宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第202集

内野々遺跡
内野々第2・第3遺跡
内野々第4遺跡

Uchinono/Uchinono №2・№3/Uchinono №4 Site

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3

2011

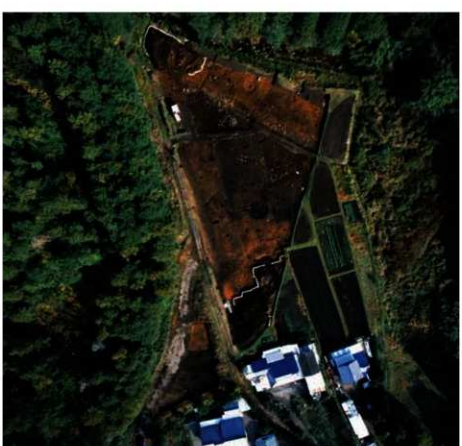
宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第202集

『内野々遺跡、内野々第２・３遺跡、内野々第４遺跡）』正　誤　表

ページ・図番号	誤	正
巻頭図版２	昭和49年（1975年）の	昭和50年（1975年）の
p107　右13行目	以下の４種類に分類して	以下の５種類に分類して
p140　左19行目	早期の可能性も考えられる。	早期の可能性も考えられるという。
p140　左31行目	異形石器は	このタイプの異形石器は
抄録　内野々第４遺跡 主な遺物	磨石、玦状耳飾	搬入礫、玦状耳飾
抄録　内野々第４遺跡 特記事項	玦状耳飾辺出土	玦状耳飾片出土

内野々遺跡　調査区全景（東から）



内野々遺跡　調査区全景（IVb層上面）

昭和49年（1975年）の遺跡周辺地形

国土画像情報（カラー空中写真）国土交通省

内野々遺跡　調査区近景（北から）

内野々遺跡　A3区土層写真

内野々遺跡　A1区土層写真

内野々遺跡　縄文時代後期の土器

内野々遺跡　赤色顔料が付着した土器

内野々遺跡　尾鈴山酸性岩類製の石器と剥片

内野々遺跡　粗製剥片石器（砂岩を中心として）

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（日向～都農間）建設予定地に係る埋蔵文化財の発掘調査を平成20年度から実施してまいりました。本書は、平成21年度から22年度にかけて実施した児湯郡都農町内野々地区の遺跡発掘調査の成果を記載しております。

主な内容としては、尾鈴山麓に位置する内野々遺跡群の中で、縄文時代後期の竪穴建物跡４軒、中～後期の集石遺構13基が検出され、これらの遺構に伴う多量の縄文土器が発見された内野々遺跡を中心として、縄文時代早期の遺構・遺物が出土した内野々第２・第３遺跡や玦状耳飾が出土した内野々第４遺跡が挙げられます。

都農町ではこれまで埋蔵文化財の発掘調査事例が少なく、今回の調査成果からこれまでに知られていた当地域の歴史像を塗り替えるような発見が相次ぎました。今回の調査で得られた多くの成果が、今後、当地域の歴史を解明する上で非常に貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成 23 年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　森　隆茂

例　言

1　本書は、東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴い、平成21～22年度に宮崎県埋蔵文化財センターが実施した、児湯郡都農町に所在する内野々（うちのの）遺跡・内野々第２遺跡・内野々第３遺跡・内野々第４遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2　発掘調査は、西日本高速道路株式会社九州支社の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
3　現地調査のうち、以下のものについては業務委託した。
　　基準点・グリッド杭等の設営
　　内野々遺跡……（有）河野測量設計事務所
　　内野々第４遺跡……（有）久保田測量設計
　　空中写真撮影
　　内野々遺跡……九州航空株式会社
　なお、内野々遺跡のグリッド杭設営については日本測地系の座標で行い、世界測地系に変換したものを用いて調査を実施した。
4　現地での遺構図作成・写真撮影については、各遺跡の調査担当者が行なった。
5　整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。
6　実測・トレース・遺物写真撮影については職員間で分担して進めた。
　遺構トレース …… 内野々：小船井／内野々第２：今塩屋／内野々第３：山本・谷口／内野々第４：原口
　遺物実測・トレース … 内野々：小船井／内野々第２・第３：今塩屋・谷口／内野々第４：原口
　遺物写真撮影 …… 小船井・今塩屋
　なお、遺物の実測・トレースについては整理作業員の補助を得て各担当者が行い、一部の石器実測及びトレースについては、内野々遺跡は株式会社九州文化財研究所に、内野々第４遺跡は株式会社パスコに業務委託した。
7　自然科学分析のための、フローテーション作業ならびに種子などの選別作業は小船井が行った。放射性炭素年代測定・種実／樹種同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その成果報告については、小船井が同社と協議・編集して掲載した。また、内野々第２遺跡ではテフラ分析を他の数遺跡と合わせて同社に委託した。
8　圧痕土器に関する選別及びレプリカ作成に係る作業は、南靖子氏の補助を得て小船井が実施した。
9　本文の執筆は職員間で分担して行った。なお、執筆者が複数の場合は各文末に括弧書きで示した。
　　第Ⅰ章 ‥‥原口　　第Ⅱ章 ‥‥小船井　　第Ⅲ章 ‥‥今塩屋・谷口　　第Ⅳ章 ‥‥原口
10　本書の作成は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書全体は小船井が編集した。
11　出土遺物および記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。
12　本書で使用した周辺遺跡位置図等は国土地理院発行の1/50,000図をもとに、周辺地形図等は西日本高速道路株式会社九州支社延岡高速道路事務所から提供された1/2,500図をもとに作成した。

凡　例

1　本書に使用した主な略記号は次の通りである。
　　ＳＡ＝竪穴建物跡　ＳＣ＝土坑　ＳＩ＝集石遺構　ＳＥ＝溝状遺構　K-Ah＝鬼界アカホヤ火山灰　Gr.＝グリッド
2　遺物への注記は以下のような略号とした。
　・内野々遺跡　：Ｈ内ノ々 ‥‥ＳＡ１-１～（竪穴建物跡埋土中）・ＳＡ１-１ｺﾈ～（竪穴建物跡床面直上出土）・A1-1～（詳細区割区一括）、C3 Ⅲ～（グリッド 層位）、TI（トレンチ一括）、Ｈ内ノ々（遺跡一括）なお、遺跡略称に用いた「Ｈ」は他地域で実施された同名の遺跡発掘調査と区分するもので、東九州自動車道に関連する遺跡発掘調査であることを示す。
　・内野々第２遺跡 ：Ｈ内ノ々２‥‥～Tr（トレンチ番号）、ＳＩ１～（現地記録時点の遺構No.）
　・内野々第３遺跡 ：Ｈ内ノ々３‥‥T～（トレンチ番号）
　・内野々第４遺跡 ：Ｈ内ノ々４‥‥H21（平成21年度調査時に出土した遺物）、Ｂ２（調査区）、ＳＩ１～（現地記録時点の遺構No）
　　なお、平成20年に県が実施した確認調査時の出土遺物はH20と注記している。
3　本書で使用した標高は海抜高であり、方位は座標北（G.N.）を基本として一部の平面図・遺構実測図は磁北（M.N.）を用いた。
4　本書で使用する土層および土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に拠り記述した。
5　土器の断面図について、口縁部見通し線を平口縁は直線、波状口縁は曲線で示した。
6　石器の断面図は１点鎖線で、敲打痕の認められる部分は波線の○で表示した。
7　石器実測図への使用痕の表現として以下のようにした。また、図面上で明示出来ない範囲については矢印で示した。
　敲打痕＝コ　磨痕＝ス　摩滅＝マ　研面＝ト　潰れ＝ツ　※実測図中の網掛けは砥面・強い摩滅面を表す。
8　遺構・遺物写真など図版の縮尺については任意であり、統一していない。
9　本書に記載する層の略称は「東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅵ」（宮崎県埋蔵文化財センター 2006）第Ⅰ章第３節の記載に準じる。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の組織 …… 1
第３節　遺跡の位置と環境 …… 2
　１　地理的環境 …… 2
　２　歴史的環境 …… 4

第Ⅱ章　内野々遺跡

第１節　発掘調査の概要と方法・経過 …… 7
第２節　整理作業の方法と報告書作成 …… 10
第３節　基本層序と土層堆積状況 …… 11
第４節　石材分類について …… 15
第５節　調査成果概要 …… 15
第６節　縄文時代の遺構と遺物 …… 16
　１　早期の遺構と遺物 …… 16
　２　中期・後期の遺構と遺物 …… 21
第７節　弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構と遺物 …… 93
第８節　その他の遺物 …… 97
第９節　植物遺体の分析 …… 97
　１　フローテーション作業について …… 97
　２　自然科学分析の結果 …… 99
　３　内野々遺跡の土器圧痕について …… 107
第10節　まとめ …… 112
　１　縄文時代 …… 112
　２　弥生～古墳時代 …… 114
　３　古代以降 …… 114
　４　尾鈴山酸性岩類について …… 114
　５　粗製剥片石器について …… 115
　６　土器圧痕について …… 116

第Ⅲ章　内野々第２・第３遺跡

第１節　遺跡の立地と環境 …… 117
第２節　発掘調査と整理作業の経過 …… 117
第３節　内野々第２遺跡 …… 117
　１　調査の概要 …… 117
　２　縄文時代早期の遺構と遺物 …… 117
　３　その他の遺構と遺物 …… 123
第４節　内野々第３遺跡 …… 123
第５節　自然科学分析 …… 123
第６節　まとめ …… 126

第Ⅳ章　内野々第４遺跡

第１節　発掘調査の概要と経過 …… 127
第２節　整理作業の方法と経過 …… 127
第３節　基本層序と土層堆積 …… 127
第４節　縄文時代早期の遺構と遺物 …… 127
　１　概要 …… 127
　２　Ⅳb層の遺構と遺物 …… 127
　３　Ⅳa層の遺構と遺物 …… 130
第５節　縄文時代前期以降の遺物 …… 132
　１　概要 …… 132
　２　出土遺物 …… 132
第６節　その他の遺物 …… 132
第７節　まとめ …… 139
　１　縄文時代早期の遺構と遺物 …… 139
　２　縄文時代前期の遺物 …… 139
　３　異形石器について …… 140
　４　内野々第４遺跡周辺の遺跡立地 …… 140

挿図目次

第Ⅰ章　はじめに

第１図　内野々遺跡群の位置関係と周辺地形図 …… 2
第２図　東九州自動車道（日向～都農間）関連遺跡位置図 …… 3
第３図　内野々遺跡群と周辺遺跡位置図 …… 5
第４図　遺跡間地形断面図 …… 5

第Ⅱ章　内野々遺跡

第１図　周辺地形図 …… 9
第２図　先行トレンチ配置図と柱状図 …… 9
第３図　現地形測量図・調査区割図 …… 12
第４図　グリッド配置図・土層断面記録位置図 …… 12
第５図　土層断面図 …… 13～14
第６図　縄文時代早期遺構配置図 …… 17
第７図　縄文時代早期遺構実測図　ＳＩ14～18 …… 17
第８図　縄文時代早期遺物実測図（１）…… 18
第９図　縄文時代早期遺物実測図（２）…… 19
第10図　Ⅳb上面遺構分布図 …… 22
第11図　縄文時代中・後期遺構実測図（１）　ＳＡ２ …… 23
第12図　縄文時代中・後期遺構出土遺物実測図（１）　ＳＡ２ …… 24
第13図　縄文時代中・後期遺構出土遺物実測図（２）　ＳＡ２ …… 25
第14図　縄文時代中・後期遺構出土遺物実測図（３）　ＳＡ２ …… 26
第15図　縄文時代中・後期遺構出土遺物実測図（４）　ＳＡ２ …… 27
第16図　縄文時代中・後期遺構実測図（２）　ＳＡ３ …… 28
第17図　縄文時代中・後期遺構出土遺物実測図（５）　ＳＡ３ …… 29
第18図　縄文時代中・後期遺構出土遺物実測図（６）　ＳＡ３ …… 30
第19図　縄文時代中・後期遺構実測図（３）　ＳＡ４・ＳＡ５ …… 31
第20図　縄文時代中・後期遺構出土遺物実測図（７）　ＳＡ４ …… 32
第21図　縄文時代中・後期遺構出土遺物実測図（８）　ＳＡ５ …… 33
第22図　縄文時代中・後期遺構実測図（４）　ＳＩ１・ＳＩ２・ＳＩ４～８・ＳＩ11 …… 35
第23図　縄文時代中・後期遺構実測図（５）　ＳＩ３・ＳＩ９・10・ＳＩ12・ＳＩ13 …… 36
第24図　縄文時代中・後期遺構出土遺物実測図（９）…… 37
第25図　縄文時代中・後期遺構及び出土遺物実測図（１）　ＳＣ１・ＳＣ２ …… 38
第26図　縄文時代中・後期遺構及び出土遺物実測図（２）　ＳＣ３ …… 39
第27図　縄文時代中・後期土器実測図（１）…… 44
第28図　縄文時代中・後期土器実測図（２）…… 45
第29図　縄文時代中・後期土器実測図（３）…… 46
第30図　縄文時代中・後期土器実測図（４）…… 47
第31図　縄文時代中・後期土器実測図（５）…… 48
第32図　縄文時代中・後期土器実測図（６）…… 49
第33図　縄文時代中・後期土器実測図（７）…… 50
第34図　縄文時代中・後期土器実測図（８）…… 51
第35図　縄文時代中・後期土器実測図（９）…… 52
第36図　縄文時代中・後期土器実測図（10）…… 53
第37図　縄文時代中・後期土器実測図（11）…… 54
第38図　縄文時代中・後期土器実測図（12）…… 55
第39図　縄文時代中・後期土器実測図（13）…… 56
第40図　縄文時代中・後期土器実測図（14）…… 57
第41図　縄文時代中・後期土器実測図（15）…… 58
第42図　縄文時代中・後期土器実測図（16）…… 59
第43図　縄文時代中・後期土器実測図（17）…… 60
第44図　縄文時代中・後期土器実測図（18）…… 61
第45図　縄文時代中・後期土器実測図（19）…… 62
第46図　縄文時代中・後期石器実測図（１）…… 65
第47図　縄文時代中・後期石器実測図（２）…… 66
第48図　縄文時代中・後期石器実測図（３）…… 67
第49図　縄文時代中・後期石器実測図（４）…… 68
第50図　縄文時代中・後期石器実測図（５）…… 69
第51図　縄文時代中・後期石器実測図（６）…… 70
第52図　縄文時代中・後期石器実測図（７）…… 71
第53図　縄文時代中・後期石器実測図（８）…… 72
第54図　縄文時代中・後期石器実測図（９）…… 73
第55図　縄文時代中・後期石器実測図（10）…… 74
第56図　縄文時代中・後期石器実測図（11）…… 75
第57図　縄文時代中・後期石器実測図（12）…… 76
第58図　縄文時代中・後期石器実測図（13）…… 77
第59図　縄文時代中・後期石器実測図（14）…… 78

第60図　縄文時代中・後期石器実測図（15）…… 79
第61図　縄文時代中・後期石器実測図（16）…… 80
第62図　縄文時代中・後期石器実測図（17）…… 81
第63図　縄文時代中・後期石器実測図（18）…… 82
第64図　弥生時代後期～古墳時代初頭遺構及び出土遺物実測図　ＳＡ１・ＳＨ234 …… 94
第65図　弥生時代後期～古墳時代初頭遺物実測図 …… 95
第66図　その他の遺物実測図 …… 97
第67図　F4Gr.周辺土壌サンプリング箇所…… 98
第68図　内野々遺跡出土の種実遺体 …… 105
第69図　遺構埋土出土の炭化材 …… 106
第70図　圧痕資料写真（１）…… 109
第71図　圧痕資料写真（２）…… 110
第72図　圧痕資料写真（３）…… 111

第Ⅲ章　内野々第２・第３遺跡

第１図　内野々第２遺跡 調査区平面図…… 118
第２図　内野々第２遺跡 調査区土層断面図…… 119
第３図　内野々第２遺跡 集石遺構実測図…… 119
第４図　内野々第２遺跡 土器実測図…… 119
第５図　内野々第２遺跡 石器実測図（１）…… 120
第６図　内野々第２遺跡 石器実測図（２）…… 121
第７図　内野々第２遺跡 石器実測図（３）…… 122
第８図　内野々第２遺跡 出土遺物分布図…… 123
第９図　内野々第３遺跡 石器実測図…… 124
第10図　内野々第２遺跡 自然科学分析関連図…… 126

第Ⅳ章　内野々第４遺跡

第１図　調査区の位置図 …… 128
第２図　調査区平面図 …… 128
第３図　調査区土層断面図 …… 128
第４図　集石遺構（Ⅳb層）実測図…… 129
第５図　土器出土分布図（Ⅳb層）…… 129
第６図　石器出土分布図（Ⅳb層）…… 129
第７図　Ⅳb層出土の土器実測図 …… 129
第８図　Ⅳb層出土の石器実測図（１）…… 129
第９図　Ⅳb層出土の石器実測図（２）…… 130
第10図　集石遺構（Ⅳa層）実測図…… 131
第11図　土器出土分布図（Ⅳa層）…… 131
第12図　石器出土分布図（Ⅳa層）…… 131
第13図　Ⅳa層出土の土器実測図…… 131
第14図　Ⅳa層出土の石器実測図…… 131
第15図　土器出土分布図（Ⅲ層）…… 133
第16図　石器出土分布図（Ⅲ層）…… 133
第17図　Ⅲ層出土の土器・石器実測図 …… 133
第18図　Ⅰ・Ⅱ層出土土器・陶磁器実測図…… 134
第19図　Ⅰ・Ⅱ層出土石器実測図（１）…… 134
第20図　Ⅰ・Ⅱ層出土石器実測図（２）…… 135
第21図　Ⅰ・Ⅱ層出土石器実測図（３）…… 136
第22図　Ⅰ・Ⅱ層出土石器実測図（４）…… 137

表目次

第Ⅱ章　内野々遺跡

第１表　縄文時代早期集石遺構一覧表 …… 20
第２表　縄文時代早期土器観察表 …… 20
第３表　縄文時代早期石器計測表 …… 20
第４表　縄文時代中・後期集石遺構一覧表 …… 40
第５表　縄文時代中・後期遺構出土土器観察表（１）…… 40
第６表　縄文時代中・後期遺構出土土器観察表（２）…… 41
第７表　縄文時代中・後期遺構出土土器観察表（３）…… 42
第８表　縄文時代中・後期遺構出土石器計測表 …… 42
第９表　縄文時代中・後期土器観察表（１）…… 82
第10表　縄文時代中・後期土器観察表（２）…… 83
第11表　縄文時代中・後期土器観察表（３）…… 84
第12表　縄文時代中・後期土器観察表（４）…… 85
第13表　縄文時代中・後期土器観察表（５）…… 86
第14表　縄文時代中・後期土器観察表（６）…… 87
第15表　縄文時代中・後期土器観察表（７）…… 88

第16表　縄文時代中・後期土器観察表（８）…… 89
第17表　縄文時代中・後期石器計測表（１）…… 90
第18表　縄文時代中・後期石器計測表（２）…… 91
第19表　縄文時代中・後期石器計測表（３）…… 92
第20表　弥生～古墳時代土器観察表 …… 96
第21表　弥生～古墳時代石器計測表 …… 97
第22表　フローテーション作業結果一覧表 …… 98
第23表　種実同定結果（１）…… 103
第24表　種実同定結果（２）…… 104
第25表　樹種同定結果 …… 104
第26表　放射性年代測定 …… 104
第27表　暦年較正結果 …… 104
第28表　圧痕土器観察表 …… 108

第Ⅲ章　内野々第２・第３遺跡
第１表　内野々第２遺跡の基本層序 …… 117
第２表　内野々第３遺跡の基本層序 …… 123
第３表　内野々第２遺跡 縄文土器観察表…… 124
第４表　内野々第２遺跡 石器計測表（１） …… 124
第５表　内野々第２遺跡 石器計測表（２） …… 125
第６表　内野々第３遺跡 石器計測表…… 125

第Ⅳ章　内野々第４遺跡
第１表　基本層序 …… 128
第２表　Ⅳ層出土の土器観察表 …… 131
第３表　Ⅳ層出土の石器計測表 …… 132
第４表　Ⅲ層出土の土器観察表 …… 133
第５表　Ⅲ層出土の石器計測表 …… 133
第６表　土器・陶磁器観察表 …… 138
第７表　石器計測表（１）…… 138
第８表　石器計測表（２）…… 139

写真図版

巻頭図版１　内野々遺跡調査区全景
巻頭図版２　昭和49年の遺跡周辺地形、内野々遺跡近景、A1区・A3区土層堆積状況
巻頭図版３　内野々遺跡　縄文時代後期の土器、赤色顔料が付着した土器
巻頭図版４　内野々遺跡　尾鈴山酸性岩類製の石器と剥片、粗製剥片石器（砂岩を中心として）
図版１　内野々遺跡　Ｄ区集石遺構検出状況、ＳＩ15～17検出・半截状況 …… 143
図版２　内野々遺跡　ＳＩ17完掘状況、ＳＩ18検出状況、縄文時代早期遺物 …… 144
図版３　内野々遺跡　ＳＡ２・３検出・完掘状況及び土層断面 …… 145
図版４　内野々遺跡　ＳＡ２出土遺物 …… 146
図版５　内野々遺跡　ＳＡ３出土遺物 …… 147
図版６　内野々遺跡　ＳＡ４検出・完掘状況及び出土遺物 …… 148
図版７　内野々遺跡　ＳＡ５完掘状況及び出土遺物、ＳＩ１～ＳＩ12検出・半截状況 … 149
図版８　内野々遺跡　ＳＩ３・ＳＩ13配石検出状況、集石遺構出土遺物、
ＳＣ１・ＳＣ２半截状況、土坑出土遺物 …… 150
図版９　内野々遺跡　縄文時代中・後期土器（Ⅰ～Ⅴ類土器）…… 151
図版10　内野々遺跡　縄文時代中・後期土器（Ⅴ類土器）…… 152
図版11　内野々遺跡　縄文時代中・後期土器（Ⅴ～Ⅶ類土器）…… 153
図版12　内野々遺跡　縄文時代中・後期土器（Ⅶ～Ⅸ類土器）…… 154
図版13　内野々遺跡　縄文時代中・後期土器（Ⅹ～Ⅺ類土器）…… 155
図版14　内野々遺跡　縄文時代中・後期土器（Ⅺ～ⅩⅤ類土器）…… 156
図版15　内野々遺跡　縄文時代中・後期土器・石器（ⅩⅤ～ⅩⅥ類土器、打製石鏃、
石匙、削器、打製石斧、磨製石斧、スクレイパー）…… 157
図版16　内野々遺跡　縄文時代中・後期石器（礫器、石核、粗製剥片石器）…… 158
図版17　内野々遺跡　縄文時代中・後期石器（粗製剥片石器、剥片、接合資料、打欠石錘）159
図版18　内野々遺跡　縄文時代中・後期石器（磨石、凹石、敲石、砥石）
ＳＡ１完掘状況及び出土土器、ＳＨ234出土土器 …… 160
図版19　内野々遺跡　弥生時代後期～古墳時代初頭出土遺物、その他の遺物 …… 161
図版20　内野々第２遺跡　調査区遠景・全景、集石遺構群と焼礫及び出土遺物、
内野々第３遺跡　調査区近景、出土遺物 …… 162
図版21　内野々第４遺跡　遺跡遠景及び調査区近景・全景、基本層序及び土器出土状況、
ＳＩ１・ＳＩ２検出状況 …… 163
図版22　内野々第４遺跡　Ⅲ～Ⅳb層出土遺物、包含層出土遺物 …… 164

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

東九州自動車道（日向～都農間）19.7kmについては、平成17年度に宮崎県文化財課が32遺跡306,700㎡の分布調査結果を提示した。その後、当該区間は、平成17年度末までに関係市町との設計協議等が終了し、翌年度末には平成26年度供用開始に向けて用地買収を開始している。また、平19年11月には発掘調査対象面積の見直しがなされ、暫定２車線261,400㎡と面積が減っている。

平成20年７月１日、東九州自動車道関連としては初の『埋蔵文化財発掘調査協定書』が西日本高速道路株式会社九州支社長と県知事との間で締結された。この協定書では、発掘調査の範囲や体制、全体の実施計画、費用の概算額等が提示された。その後、用地の取得状況が進展しないながらも同年10月17日付けで『埋蔵文化財発掘調査委託契約』を結び、着手できる可能性がある10遺跡3,350㎡の発掘調査に着手した。今回報告する内野々遺跡ほか３遺跡についても工程上の都合から全面的な用地の取得を待たずに、平成21年５月に内野々第４遺跡、６月に内野々遺跡、12月に内野々第２遺跡と順次着手していった。そして、平成22年４月の内野々遺跡の追加調査、同5月の内野々第３遺跡の調査でこの地区の調査は終了した。この間、平成21年１月には、用地取得や文化財調査の進展を条件に平成25年度の供用開始が努力目標となったが、関係者の努力により平成22年10月末現在、32遺跡中15遺跡は完全に調査を終了、未着手は3遺跡を残すのみとなっている。

第２節　調査の組織

本書掲載の遺跡調査・整理報告の実施にあたり、以下の体制が組織された（平成21～22年度）。

調査主体　宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所　　長　　福永　展幸（平成21年度）
〃　　森　　隆茂（平成22年度）
副所長兼総務課長　長友　英司（平成21年度）
副　所　長　　北郷　泰道（平成22年度）
総 務 課 長　　矢野　雅紀（平成22年度）
主幹兼総務課総務担当リーダー
　　高山　正信（平成21年度）
副主幹兼総務課総務担当リーダー
　　長友　由美子（平成22年度）
調査第一課長　　長津　宗重（平成21・22年度）
主幹兼調査第一課調査第二担当リーダー
　　菅付　和樹（平成21・22年度）

調査担当

内野々遺跡
調査第一課調査第二担当　主　事　小船井　順
　　主　事　橋本　清美
内野々第２遺跡
調査第一課調査第二担当　主任主事　今塩屋　毅行
　　主　事　橋本　清美
内野々第３遺跡
調査第一課調査第二担当　主　事　山本　光俊
　　主　事　川俣　唱子
　　主　事　谷口　めぐみ
内野々第４遺跡
調査第一課調査第一担当　主　査　出山　真次
調査第一課調査第二担当　主　事　原口　耕一郎
整理・報告担当
調査第一課調査第二担当　主任主事　今塩屋　毅行
　　主　事　原口　耕一郎
　　主　事　小船井　順
　　主　事　谷口　めぐみ

調査指導

橘　昌信（別府大学）

調査協力（五十音順）

金丸　武史・藤木　晶子（宮崎市教育委員会）
桑畑　光博・山下　大輔（都城市教育委員会）
総合農業試験場生物環境部
都農町教育委員会
東　和幸（鹿児島県歴史資料センター黎明館）
南　靖子（前熊本大学埋蔵文化財調査室）

第３節　遺跡の位置と環境

１ 地理的環境

内野々遺跡および内野々第２～第４遺跡（以下、内野々遺跡群と略す）は、宮崎県児湯郡都農町大字川北に所在する。都農町は宮崎県の中央部よりやや北より、宮崎平野の北縁部に位置している。

町の地勢は、町西部の尾鈴山系（標高1405.2m）から派生する山塊や丘陵が日向灘に向けて展開するので、西側から山岳部、山麓部、平野部ならびに海岸部と４区分できる。

一方、尾鈴山系を源とする名貫川・都農川・心見（征矢原）川の３河川は、山麓部と平野部を南北に分断する。山麓部においては、これら３河川および支流による開析作用や土砂の堆積によって扇状地や新旧数段の河岸段丘が形成されている。

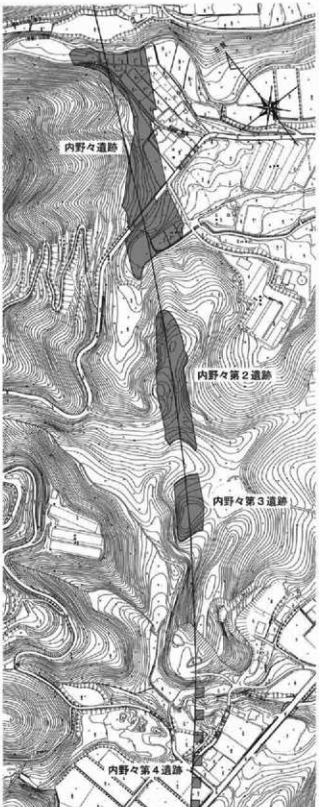
また、日向灘に面する海岸部は南北に直線的な海浜となり、そのなかに点在する小さな沖積地には尾鈴山酸性岩類の円礫が堆積している。

このように都農町は起伏と地形の多様性に富む地勢であり、内野々遺跡群は山麓部に立地している。

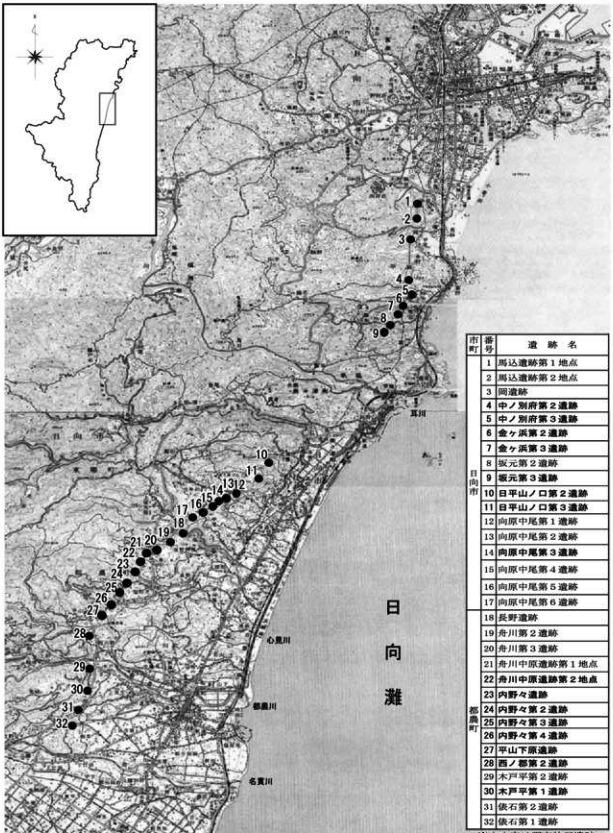
この内野々遺跡群のうち、内野々遺跡と内野々第２・第３遺跡は、心見川と支流沿いに形成される小さな段丘上（椎原面）に立地する。この小段丘は開析谷や小河川によって寸断され、やつで状の丘陵へと発達している。この丘陵は南側に広がる狭小な沖積地に向けて細長い尾根となる。内野々第４遺跡は、その沖積地や谷部に立地している。

このように内野々遺跡群は、扇状地末端の湧水点付近や河岸段丘面上、さらに細長い痩せ尾根上に展開する地理的特徴を有している。この特徴は、都農町より南側（川南町以南）のテーブル状台地が卓越した地形とは対照的な遺跡立地環境の反映でもある。

各遺跡における調査着手前の土地利用形態は、低地部分は水田や宅地ないし湿地帯、丘陵部分は竹林や果樹・造林地であり、畜産関係の施設も建てられている。遺跡周辺の低地や丘陵部は、耕地基盤整備や農業振興策による大規模な造成を受け、かつての地形とは大きく様変わりした箇所も少なくない。



第１図　内野々遺跡群の位置関係と周辺地形図



市町	番号	遺跡名
日向市	1	馬込遺跡第１地点
	2	馬込遺跡第２地点
	3	岡遺跡
	4	**中ノ別府第２遺跡**
	5	**中ノ別府第３遺跡**
	6	**金ケ浜第２遺跡**
	7	**金ケ浜第３遺跡**
	8	坂元第２遺跡
	9	**坂元第３遺跡**
	10	**日平山ノ口第２遺跡**
	11	**日平山ノ口第３遺跡**
	12	向原中尾第１遺跡
	13	向原中尾第２遺跡
	14	**向原中尾第３遺跡**
	15	向原中尾第４遺跡
	16	向原中尾第５遺跡
	17	向原中尾第６遺跡
都農町	18	長野遺跡
	19	舟川第２遺跡
	20	舟川第３遺跡
	21	舟川中原遺跡第１地点
	22	**舟川中原遺跡第２地点**
	23	**内野々遺跡**
	24	**内野々第２遺跡**
	25	**内野々第３遺跡**
	26	**内野々第４遺跡**
	27	**平山下原遺跡**
	28	**西ノ都第２遺跡**
	29	木戸平第２遺跡
	30	**木戸平第１遺跡**
	31	俵石第２遺跡
	32	俵石第１遺跡

※太文字は調査終了遺跡
（平成22年11月末現在）

第２図　東九州自動車道（日向～都農間）関連遺跡位置図

2 歴史的環境

この項では、内野々遺跡群周辺の歴史的関係や事象について、その概略を述べることとする。

旧石器時代

数年ほど前まで、都農町内で後期旧石器時代の遺構や遺物は、採集遺物が数点知られているのみであった。その一端を現し始めたのが、東九州自動車道建設に伴う発掘調査である。面的・層位的な発掘調査の成果によって、都農町内における旧石器時代遺跡の展開と人間活動の様相がより具体的に把握されつつある。

例えば、内野々遺跡から北に位置する舟川第２遺跡（報告書作成中）や内野々第４遺跡の南にある平山下原遺跡ではナイフ形石器や剥片尖頭器、細石刃核といった石器類が出土し、礫群が検出されている。

また、都農町南縁の俵石第１遺跡では、合計５期の文化層が認められ、AT火山灰層より下層に石器と礫群の存在が確認されている。

縄文時代

草創期　朝草原遺跡では草創期末葉とされる無文土器が出土しているが、さらに類例と比較検討を要する。なお、都農町に隣接する川南町では、赤石・天神木遺跡で隆帯文土器と石器群の出土例が知られている。

早期　都農川中流域（町中央部）の調査事例として、黒石遺跡が挙げられる。この遺跡では、集石遺構が検出され、押型文土器や打製石鏃などが出土した。早期後半段階の様相を示している。

他方、東九州自動車道建設に伴う発掘調査成果によって、町西部の山麓部における遺跡様相を縦断的に把握可能となってきた。尾立第２遺跡では、多数の集石遺構や陥し穴状遺構が検出され、無文土器や押型文土器と石器類が出土している。また、石鏃の遺跡内製作と他所からの持ち込みの実態が明らかにされている。

隣接する俵石第１遺跡では、列状に並ぶ陥し穴状土坑群が検出され、両遺跡は地形的に連続することから遺跡空間の時系列的な変遷過程を知る好例となる。

さらに、平山下原遺跡では無文土器単純期の遺物包含層が調査され、早期前半段階の土器と石器相が把握された。早期後半段階の遺跡調査例が多い都農町域において、平山下原遺跡の調査例は注目される。

前・中期　当該期の遺構や遺物は希薄である。今回報告する内野々第４遺跡における、曽畑式土器や石製垂飾、内野々遺跡の船元式系土器、深浦式土器の出土など数少ない。

後期　都農町南部地域で数例の調査がなされたにとどまる。新別府川原遺跡では竪穴建物跡１軒が検出され、新別府下原遺跡では貝殻条痕文土器や石斧類が出土している。

弥生時代

都農町域では、弥生時代中期の集落（新別府下原遺跡）の存在が確認されているが、弥生時代の「集落」遺跡は、後期初頭の又猪野原遺跡や森遺跡、後期後半の境ヶ谷第１遺跡、後期後半～古墳時代初頭の新別府下原遺跡や尾立第２遺跡など、後期に属する場合が多い。集落と密接に関係する「墓」は新別府下原遺跡例など少数の事例にとどまる。弥生時代後期に増加する「集落」や「墓」は、宮崎平野部における人間活動の拡大や遺跡の面的展開と連動する事象と考えられる。

心見川下流域に位置する森遺跡では、中期末葉から後期初頭にかけての竪穴建物跡１軒が検出され、弥生土器や磨製石鏃、砥石などが出土した。とくに須玖式系壺や瀬戸内系の高杯の存在からは、往時の交流の一端がうかがえる。

都農川下流域の岩山（境ヶ谷第１）遺跡では、後期後半の竪穴建物２軒や周溝状遺構１基が検出されている。上流域の木戸平第１・第２遺跡では、かつて弥生時代後期の土器（甕と壺）の出土例が知られていたが、東九州自動車道建設に伴って竪穴建物跡などが調査されている（木戸平第２遺跡）。

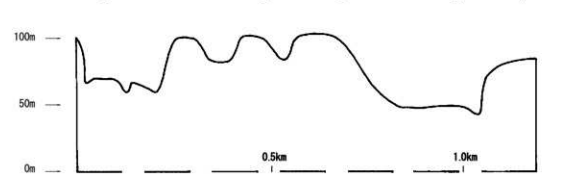
町南東部では、新別府下原遺跡の調査例があげられる。弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての竪穴建物７軒、土壙墓５基、周溝状遺構３基が検出された。出土遺物には両端に抉りのある石庖丁や砥石、鉄製鎌の存在が特筆される。

名貫川北岸では尾立第２遺跡が位置し、「水穴」の可能性がある陥没孔に一括埋納された甕と壺の一群が認められた。弥生時代終末期前後の土器群である。

第３図　内野々遺跡群と周辺遺跡位置図

1 内野々遺跡	2 内野々第２遺跡	3 内野々第３遺跡	4 内野々第４遺跡	5 平山下原遺跡	6 舟川第２遺跡	7 西ノ郡第２遺跡
8 木戸平第２遺跡	9 横石第１遺跡	10 舟川尾立遺跡	11 寺迫下原遺跡	12 宮川遺跡	13 山来大原第２遺跡	14 山来大原第１遺跡
15 舟川中原遺跡	16 長野遺跡	17 又姥野原遺跡	18 心見住迫上遺跡	19 内野遺跡	20 内野下原遺跡	21 旧牧跡第２遺跡
22 旧牧跡第１遺跡	23 心見遺跡	24 白石第２遺跡	25 白石第１遺跡	26 上黒萩遺跡	27 平山遺跡	28 西ノ郡第１遺跡
29 白水遺跡	30 境ヶ谷第２遺跡	31 境ヶ谷第１遺跡	32 久次牟田遺跡	33 井手ヶ平遺跡	34 川神田遺跡	35 木戸平第１遺跡
36 上荒生遺跡	37 炭塚遺跡	38 黒石遺跡	39 中原遺跡	40 都萬古墳群	41 荒生尾立第２遺跡	42 馬場口遺跡
43 鹿牟田遺跡	44 鍛冶屋敷遺跡	45 鍛冶田遺跡	46 荒生尾立第１遺跡	47 横石第２遺跡	48 中河原遺跡	49 森遺跡
50 尾立遺跡	51 温牟田遺跡	52 朝草原遺跡	53 榎土手遺跡	54 立野遺跡	55 竜ヶ平第２遺跡	56 竜ヶ平第１遺跡遺跡
57 下原遺跡	58 新別府川原遺跡	59 新別府遺跡	60 新別府肥遺跡	61 福原尾遺跡	62 新別府下原遺跡	

※１～９は東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う発掘調査遺跡



第４図　遺跡間地形断面図

古墳時代

古墳は海岸部と山麓部に分布する。海岸沿い12基の県指定古墳が存在する。すべて積石塚で前方後円墳が２基、円墳が10基である。全国的にも類例の少ない積石塚だが、正式な調査を受けていないために詳細は不明である。新別府川原、木戸平、舟川中原地区に１基ずつ円墳が存在している。

なお、平山遺跡からは６世紀後半に位置づけられる須恵器の杯や甕が出土したとされている。

古代

都農町内で古代の遺跡は知られていない。『倭名類聚抄』には日向国児湯郡に「都農郷」がみえ、『延喜式』にみえる日向国６牧のうち「都農野牧」について、及び日向国16駅のうち「去飛駅」については、町内に比定されることが多い。『続日本後紀』『日本三代実録』『延喜式』に記載された都農神社関係記事も著名である。また、いわゆる乙類九州『風土記』逸文には、「吐濃峯（とのみね）」の神について神功皇后にまつわる説話がみられる。なお、藤原京（694～710）跡から「日向久湯（ひさ）評」などと墨書された木簡が出土している。

中世

中世のはじめ都農町域は新納院に含まれていたとされる。中世においては土持氏→伊東氏→島津氏と都農の支配者が変遷する。なかでも森遺跡では溝状遺構１条が検出され、青磁碗、格子目文の須恵器、陶器碗、土師器皿などが出土している。河岸段丘上には「堀内」、台地上に「鍛冶屋敷」、標高256mの山丘頂部に平坦地が認められる「城ン平」といった城館関連の地名を散見できるが、遺構そのものは確認されていない。

近世

藩政時代に都農町は秋月家・高鍋藩の支配を受けた。町内において近世の遺構は、藩牧である岩山牧が知られている。現在は岩山牧駒追込場跡として土塁が残っており県指定文化財となっている。高鍋藩では寛文検地（1661）の段階で110町だった町内の田畑は、明治11年（1878）には487町に増えるという。近世における開墾の様子が伺われる。

近現代

近代以降の都農町は高鍋県→美々津県→宮崎県→鹿児島県→宮崎県と所管の県が変遷する。近代以降も開墾は続けられ、昭和16年（1941）に町内の田畑は738町となった。明治11年頃には内野々地区や隣接する平山地区にも灌漑用の堰があったという。第二次世界大戦後は、みかん、野菜のハウス栽培用地、水田の大規模な基盤整備が実施され産業基盤の整備が進められた。

畜産業の盛んな都農町であるが、平成22年４月に発生した口蹄疫渦は畜産業をはじめとした町産業に甚大な被害をもたらした。今もなお畜産地帯の復活への努力が続いている。（原口）

参考文献

角川書店　1986『角川日本地名大辞典45　宮崎県』

都農町教育委員会　1988『都農町遺跡詳細分布調査報告書』

長津　宗重　1990『新別府下原遺跡』　都農町教育委員会

吉永　真也　1992『黒石遺跡』　都農町教育委員会

吉永　真也　1993『森遺跡』　都農町教育委員会

平凡社　1997　『宮崎県の地名』日本歴史地名大系第46巻

小学館　1997　『風土記』新編日本古典文学全集５

都農町　1998　『都農町史　通史編』

宮崎県教育庁文化課　1999『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ』　宮崎県教育委員会

柴田　博子　2004「藤原京出土「日向久湯評」木簡」『宮崎県地域史研究』第17号

井上　美奈子　2007『朝草原遺跡・尾立第３遺跡』　宮崎県埋蔵文化財センター

日高　優子2007『立野第５遺跡・立野第２遺跡』　宮崎県埋蔵文化財センター

岸田　裕一2007『尾立第２遺跡』　宮崎県埋蔵文化財センター

柴田　博子2008「古代南九州の牧と馬牛」『牧の考古学』　高志書院

横山　正文2011『俵石第１遺跡』　宮崎県埋蔵文化財センター

田中　達也・川俣　唱子2011『平山下原遺跡』　宮崎県埋蔵文化財センター

第Ⅱ章　内野々遺跡

第１節　発掘調査の概要と方法・経過

第１次調査

本遺跡は平成21年６月５日より調査を開始した。本遺跡の遺跡全体面積は14,700㎡であるが、当初は遺跡範囲内で高速道路建設予定地にかかる土地の大部分は用地買収が完了していない状況であった。そのため、調査は事前に旧地権者から発掘調査の承諾を得られた地区から順次着手した。この場所を調査の便宜上、北からＡ区（段丘状の緩斜面）、Ｂ区（丘陵裾及び平坦面地）、Ｃ区（南北を丘陵斜面により挟まれた谷地形）とする（第１図）。調査にあたり、６～７月にかけて遺跡範囲内において、遺物包含層の残存状況や遺構及び遺物の分布状況を把握することを目的として、４～25㎡程度の先行トレンチ（以下Ｔと略称）を設置した（第２図）。掘削方法についてはＢ・Ｃ区は重機及び人力で行い、Ａ区については重機の進入が不可能であったため人力で掘削を行った。これらの調査中、新たに発掘調査可能範囲が確保できたため、この部分をＤ区（丘陵裾部）としてＡ区と平行して調査を行った。

以下に各区の概要と調査方法・記録を記す。

各区の概要

Ａ区は西側に位置する丘陵の裾から、遺跡北東に隣接する後谷川に向けて緩やかに傾斜する段丘状の地形である。この地形を段状に切り盛り造成が行われ、調査着手までは畑地や水田として利用されていた。Ａ区の掘削は人力で行ったため、造成土が厚く堆積すると想定された範囲を避け、安全が確保出来る深度まで掘り下げを行い土層の堆積状況を確認した。

調査の結果、調査区中央～北半にかけてはアカホヤ火山灰層まで削平を受けている場所を除き、上層の黒色土から遺物が出土することが判明した。また、遺構らしき掘り込みが確認され、トレンチを一部拡張しアカホヤ火山灰層まで面的に掘り下げた結果、竪穴建物跡らしきプランを捉えることができた。また、アカホヤ下層は人頭大の自然礫が密に含まれている状況であり、縄文時代早期包含層の残存状況は不良であった。

Ｂ区は現地形で平坦地であったが、人力で掘削を行ったところ、東側へと傾斜する谷地形を造成土で埋め立てていることが判明した。しかし、造成土下層では黒色泥炭層及びアカホヤ火山灰層の残存も確認できたことから、途中から重機を用いて造成土を除去し土層堆積状況及び遺物の残存状況を調査した。

Ｂ区5Tではアカホヤ火山灰及び上層の黒色土の堆積は比較的良好であった。しかし、市道沿いで壁面が露出している箇所からはアカホヤ火山灰の直下に拳大から人頭大の礫が非常に密に含まれている状況であり縄文時代早期包含層の残存状況は不良であった。

Ｂ区6Tではアカホヤ火山灰の下層である黒褐色砂質土層中から黒曜石の細片が出土しているが、旧地形は南東側へと続く傾斜であることから、流れ込みによる堆積物であると判断した。

Ｃ区は内野々遺跡の南端に位置し、丘陵間に東西に延びる谷地形であり内野々第２遺跡に接する。トレンチは谷地形に直交する様に設定し、掘削は重機で行った。5Tの土層断面から、Ｃ区北側の斜面地や谷底付近の一部ではアカホヤ火山灰が良好に堆積しているが、下層についてはＢ区同様に不良であることが判明した。このため、遺構検出はアカホヤ上面でのみ行ったが、遺構らしき掘り込みは確認できなかった。

谷底部分については、黒色泥炭層が厚く堆積し、アカホヤ火山灰が認められない。また、この下層では拳大の礫を密に含む青灰色粘質土が堆積しており、掘削直後に湧水するような状況で、遺構は確認されなかった。遺物については耕作土中から近世陶磁器片が出土したのみである。

Ｄ区はＡ・Ｂ区の中間に位置し、遺跡内で最も高所（標高約80m）にある。現地形は平坦地であるが、西側斜面では明らかに削平された形跡があり造成された結果であった。前述した調査経緯から、他の区より遅れて調査に着手した。掘削は人力及び重機で行った。

Ｄ区北半はアカホヤ火山灰層が80㎝以上堆積する場所がある一方で、隣接するトレンチではほとんど確認できず、上層の黒色土が厚く堆積する。このような

状況から旧地形は小規模な谷地形部分であることが判明した。南半ではアカホヤ火山灰は非常に薄く堆積しており、上面の黒色土中は土砂崩れによる礫の堆積が確認できるなど堆積は不良であり、遺構は確認できなかった。しかし、アカホヤ火山灰下層の褐色粘質土中で、赤化した礫の集中を検出し、その周辺から数点の遺物が確認された。

この一連の調査の結果、内野々遺跡の主体は遺跡範囲の北半に相当するA区とD区であることから、同年7月9日に西日本高速道路株式会社と協議を行い、B区及びC区を除いたA区とD区南半について全面調査を実施することとなった。

全面調査の方法

調査の便宜上、A区を10区に細分した。グリッド杭は日本測地系を基に10m間隔で設置した（第4図）。

掘削は造成土を重機で除去後、アカホヤ火山灰層まで人力により行った。検出した遺構の掘削及び記録を行った後、A区で縄文時代早期の包含層が残存する範囲については重機によりアカホヤ火山灰層を除去した。

縄文時代早期の調査についてA区は各グリッドにL字状トレンチを設置し、遺物が出土した部分を中心に面的に掘削を行った。

遺物取り上げについてはトータルステーションを用いて位置を記録した後に行ったほか、調査区割り（第3図）に従い包含層一括として取り上げた。また、遺構出土の遺物は床面直上のものを図化した。

遺構・土層断面実測図は1/10または1/20を基本として、一部1/5で記録した。写真記録は35mmと6×7モノクローム・リバーサル写真及び、デジタルカメラ（1,000万画素程度）を併用した。

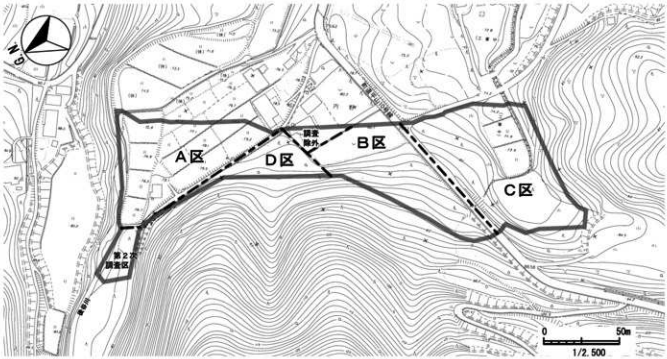
第2次調査

第1次調査が終了した段階でA区北西側にある当時未買収であった箇所（500㎡）については、平成22年4月に調査を行った。この部分は、後谷川の上流へとA区から連続する河岸段丘状の地形であり、第1次調査の結果を受け、遺物や遺構が残存している可能性が高いと判断したことにより調査を行ったものである。

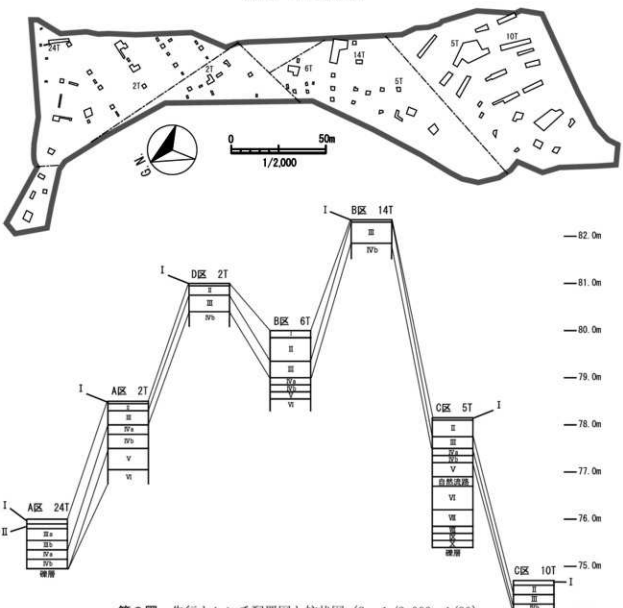
調査方法は先行トレンチを4箇所に設置し、人力により20㎡の掘削を行った。調査の結果、全てのトレンチで観察された土層堆積状況は河川の影響を大きく受けたものであり、遺物包含層や遺構は残存していなかった。また、遺物はチャート製の剥片が1点発見されたが、表土中から出土したものである。この調査結果を踏まえ、残りの480㎡の調査については必要ないと判断し、延べ2日間の発掘調査で終了とした。

日誌抄

H21.6.5	調査着手準備
6.8	発掘作業員投入。現場作業（B区）開始。器材庫等設置。
6.9	B区6Tで剥片、土器片出土
6.15～16	重機によりC区を掘削。
6.24	C区トレンチで近世陶磁器片出土。
6.25	D区トレンチ調査開始。
6.29	A区トレンチ調査開始。
6.30	A区6Tから縄文時代後期土器片出土。
7.1～2	重機によりB区・C区埋め戻し完了（調査範囲から除外することになった）。A区で竪穴建物跡検出（SA2）
7.3	D区5Tから集石遺構を検出。
7.9	西日本高速道路株式会社と協議。
7.16	A区トレンチで炭化種子出土。
7.24～27	A・D区の現地形測量を行う。
7.29～30	現場事務所、駐車場の整地作業。
7.31～8.17	全面調査へ移行。建て込み作業。
8.10	作業員15名追加。調査区周辺整備。
8.11	A区遺物包含層掘削、Ⅳb層遺構検出。
8.19	A3区で縄文時代中期土器片・石鏃・尾鈴山酸性岩類の剥片出土。
8.20	A3区で竪穴建物跡（SA1）を検出。
8.24～25	グリッド杭設置。
9.8	A3-2区で竪穴建物跡（SA3）検出。
9.18	A3-3区で丸底壷、甕出土。
10.8	A1区調査開始。Ⅳa層中から姫島産黒曜石のチップが出土。
10.15	A1-2区で石錐、磨製石鏃が出土。
10.16	現地説明会打合せ。重機により排土の整地を行う。



第１図　周辺地形図



第２図　先行トレンチ配置図と柱状図（S＝１/2,000　1/80）

10. 25	現地説明会開催。
10. 27～28	炭化物集中箇所の土をサンプリング。
11. 2	A1区で竪穴建物跡（ＳＡ４）を検出。
11. 20	別府大学の橘昌信教授が来跡。
11. 25	当センター所長が現場視察のため来跡。
11. 28	空中撮影実施。
11. 29	A4区掘削開始。
12. 1～4	A3区の遺構配置図作成。
12. 3～7	A3区のアカホヤ層を重機で除去。 Ｖ層の掘削を開始。縄文時代早期の土器片などの遺物が出土。
12. 8～14	サンプリングした土のフローテーション作業を行う。
12. 14～18	遺構分布図作成。
12. 15	Ｄ区、縄文時代早期の調査開始。
12. 16	A2区で竪穴建物跡（ＳＡ５）を検出。 Ｄ区で集石遺構を検出。
12. 24～25	重機により調査区埋め戻し、事務所等撤去を行う。
H22. 1. 7	撤去最終確認を行う。第１次調査終了。
H22. 4. 23～26	遺跡最北西部分の20㎡を掘削。 第２次調査終了。

教育普及活動等

発掘調査の成果や調査現場を、地元住民をはじめ広く県民へ公表することで、調査への理解と協力を呼びかけるとともに、発掘調査及び郷土の歴史や文化財に対する興味・関心を高め、埋蔵文化財保護への理解に供するべく、現地説明会を開催した。また、発掘体験コーナーを設け、説明会参加者に発掘作業を体験して頂いた。普段触れることの無い文化財と直接触れ合う機会を提供することを目的としたものである。

現地説明会は平成21年10月に開催した。内容は、Ａ区の南半で検出した遺構及び出土した遺物を中心に行い、その時点までの調査成果として説明を行った。

当日は開始直前まで雷を伴う雨天であったにも関わらず、総数50名の見学者が来跡され、郷土の歴史や埋蔵文化財に対する関心の高さが窺われた。また、遺物展示場所では出土した多様な遺物を目にし、郷土に存在する貴重な文化財に深い関心を示された様子であった。

当遺跡で実施した現地説明会は、東九州自動車道（日向～都農間）遺跡発掘調査における最初の現地説明会であり、発掘体験を同時に開催することは当センターで初の試みでもあった。

この他に、平成22年８月には宮崎県立図書館において、遺跡速報会としてそれまでの調査成果や整理作業の過程で新たに判明した事実の報告を実施している。

第２節　整理作業の方法と報告書作成

遺物の整理作業にあたっては、宮崎県埋蔵文化財センター本館（以下、センター）にて実施した。

出土した土器・石器の水洗、注記、接合、実測、トレースについては平成22年１月～10月に行った。なお、一部の石器に係る実測・トレースについては業務委託している。

フローテーション作業は、土の水洗作業までは現地で行い、回収した遺物の選別作業はセンターで行った。また、土器に付着した圧痕資料に係る作業については平成22年8月～10月に実施した。資料の探査及び型取り作業はセンターにて行い、走査型電子顕微鏡による詳細な観察及び写真撮影は、宮崎県総合農業試験場の協力を得て実施した。

報告書に掲載した遺構分布図やグリッド配置図など一部の挿図は、調査で得られたデータを基にデジタルデータで作成した。挿図作成には、株式会社CUBICの『遺構くん』『トレースくん』やAdobe社の『Illustrator』などのソフトウェアを使用している。

雨の中、調査員の説明に聞き入る参加者

第３節　基本層序と土層堆積状況

本遺跡は複数の丘陵を中心とした複雑な地形に立地するため土層の堆積状況は必ずしも一定ではない。このため、基本層序の設定に際してはアカホヤ火山灰層を基準として各区において同位層を抽出した後、遺跡の主体時期の堆積層については細分した。なお、Ａ・Ｄ区については全面調査を実施したが、先行トレンチの調査結果を受け、Ⅵ層下位の掘削は行っていない。

遺跡の主体部分であるＡ区北半は河岸段丘状地形の緩斜面にあり、比較的平坦な調査区には鍵層となるアカホヤ火山灰が明瞭に堆積するが、丘陵斜面や谷部、河川付近などは地形的な影響を受け堆積の不良な場所も確認できる。特に、調査区北端は遺跡に隣接する後谷川があり、前述した通り水位の上昇や水流の変化に伴って土層堆積に大きな影響を与えている。

また、Ａ区中央以南では、アカホヤ降灰後に堆積したいわゆるクロボクと呼ばれるⅢ層の黒褐色砂質土については色調や内容物に関してほとんど変化がない状況であった。そのため、Ⅲ層中からは縄文時代前期末～弥生時代・古代・中世の遺物が出土しているが、出土層位から遺物の時期を決定することが困難であった。

なお、本遺跡ではテフラ等に関する理化学的な分析は行っていない。これらの同定については、調査員の経験に基づき判断した。

基本層序は次のⅠ～Ⅸ層に分かれる。

Ⅰ　層：表土
Ⅱ　層：耕作土及び造成土
Ⅲa 層：黒色砂質土（10YR3/1）で拳大の礫を多く含む
Ⅲb 層：暗褐色砂質土（10YR3/3）で小白斑を含む
Ⅳa 層：褐色土（10YR3/3）
　　鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層
Ⅳb 層：明黄褐色土（10YR6/8）
　　鬼界アカホヤ火山灰層（以下、K-Ah）
Ⅴ　層：暗褐色砂質土（10YR3/3）
Ⅵ　層：黒褐色粘質土（10YR3/2）
Ⅶ　層：暗オリーブ褐色砂質土（2.5Y3/3）
Ⅷ　層：暗オリーブ褐色砂質土（2.5Y3/3）
　　砂質土に姶良Tn火山灰混じる
Ⅸ　層：にぶい橙色（7.5YR7/4）で礫を密に含む

Ⅰ層は表土であり遺跡に堆積した表面の土層である。

Ⅱ層は造成土及び耕作土であり、近世陶磁器片が少量含まれる。水稲耕作に伴う灰黄褐色粘質土の下部にはマンガン沈着層があり、部分的に硬化がみられる。

Ⅲ層はクロボク・クロニガに相当する黒褐色の砂質土である。この層についてはＡ区北半及びＤ区ではⅢａ・Ⅲbの２つに細分することができる。Ⅲa層は拳大の礫が多く含まれ、河川の堆積物ないし西側の丘陵斜面上で見られる堆積物であり、遺物は少ないが全体的に弥生時代以降の遺物を包含する傾向がある。Ⅲb層はＡ区北半から中央にかけて広がる。全体的にⅢ層に比べてやや明るく、小白斑を含む暗褐色砂質土である。縄文時代前期末～古墳時代初頭までの遺物を包含する。

Ⅳ層はアカホヤ火山灰を主体とした堆積層で、Ⅲ層同様に細分した。Ⅳa層はK-Ahの二次堆積物で、Ⅲ層までの漸移層もこれに含んだ。Ａ区北半では縄文時代後期の遺物を含む。Ⅳb層はプライマリーなK-Ahの堆積層である。降灰以前の旧地形の影響を受けており、堆積が良好な場所での層厚は10～20cmほどであり、厚い場所では80cmを計る。

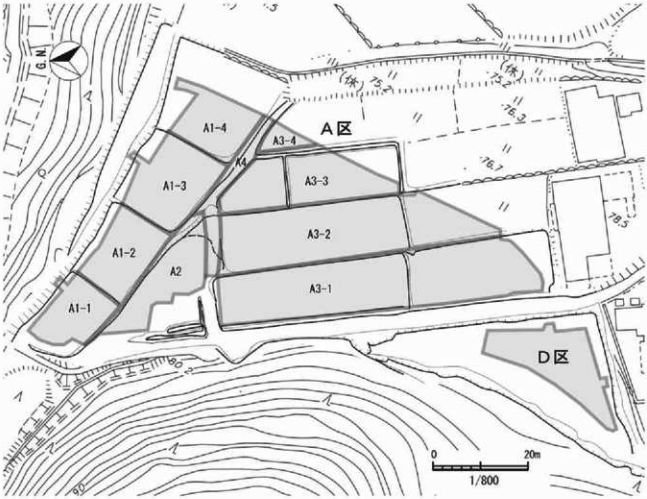
Ⅴ層はＡ区中央とＤ区で確認でき、層厚10cm程度で比較的薄く残存状況は不良である。縄文時代早期の遺物包含層である。

Ⅵ層はⅤ層と同様、Ａ区中央以南に確認できる。遺跡全体に広く堆積が見られるが、自然礫を密に含んでおり、Ｄ区以外の場所での堆積は不良である。縄文時代早期の遺構を検出した。

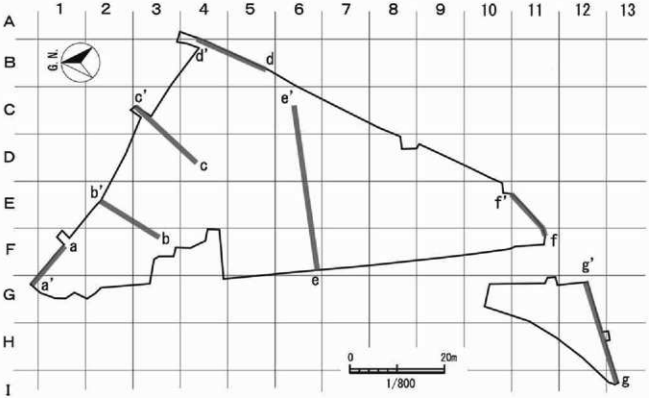
Ⅶ層はしまりのやや強い砂質土であり、層厚20～30cmを計り比較的良好に残存していた。

Ⅷ層はⅦ層と同質の堆積層であるが、姶良Tn火山灰と思われる黄褐色土をブロック状に含む。層厚10～15cmでＣ区にのみ確認できた。なお、Ⅶ、Ⅷ層はＢ区以南を主体に広がる層序であり、遺構の検出及び遺物の出土はなかった。

Ⅸ層は拳大から人頭大の尾鈴山酸性岩類の自然礫を密に含む層であり、遺跡の北半で確認できる。これより下位層についてはより堆積が不良であり、遺構及び遺物の存在はないと判断した。



第３図　現地形測量図・調査区割図



第４図　グリッド配置図・土層断面記録位置図

b-b'
1　灰黄褐色土（Hue10YR5/2）　しまり強く粘性強い。水田に伴う耕作土。Ⅱ層相当
2　にぶい黄褐色土（Hue10YR5/3）砂質土。礫多く、K-Ahをブロック状にごく少量含む。Ⅱ層
3　暗褐色土（Hue10YR3/2）　しまりやや強い。炭化物、微細な礫をごく少量含む。Ⅱ層
4　明褐色土（Hue7.5YR5/6）砂質土。しまりやや強い。K-Ahを多く含む。Ⅱ層
5　黒色土（Hue10YR2/1）　しまり非常に強い。Ⅰ層に伴うマンガンの沈着層。Ⅱ層相当
6　黒褐色土（Hue10YR3/1）砂質土。しまりやや強い。1～5cm程度の小礫を密に含む。Ⅲa層
6'　黒褐色土（Hue10YR3/1）砂質土。しまりやや弱く、5cm程度の礫を密に含む。Ⅲa層
7　にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）砂質土。しまり弱い。Ⅲa層
8　褐色土（Hue10YR4/4）砂質土。しまり強い。砂粒を多く含み、北側に向けて徐々に小礫を密に含む。Ⅲa層
9　にぶい黄橙色土（Hue10YR6/4）砂質土。しまり強い。砂粒と共に事大の礫を密に含む。Ⅲa層
10　黄褐色土（Hue10YR5/2）砂質土。しまり強い。Ⅲa層
11　黒褐色土（Hue10YR2/2）砂質土。しまりやや強い。K-Ahをごく少量含む。Ⅲb層相当
12　黒褐色土（Hue10YR3/2）砂質土。しまりやや強い。K-Ahを少量含む。Ⅲb層相当
13　暗褐色土（Hue10YR3/3）砂質土。しまりやや強い。K-Ahは火山灰の二次堆積層。遺物を含む。Ⅳa層
13'　暗褐色土（Hue10YR3/3）砂質土。しまりやや弱く事大の礫を密に含む。Ⅳa層
14　明黄褐色土（Hue10YR6/8）K-Ah。Ⅳb層
15　暗褐色土（Hue10YR3/4）砂質土。微大の礫が非常に密。Ⅸ層
16　黄褐色土（Hue10YR5/6）砂質土。事大の礫が非常に密。Ⅸ層
17　にぶい黄橙色土（Hue10YR6/4）砂質土。事大の礫が非常に密。Ⅸ層

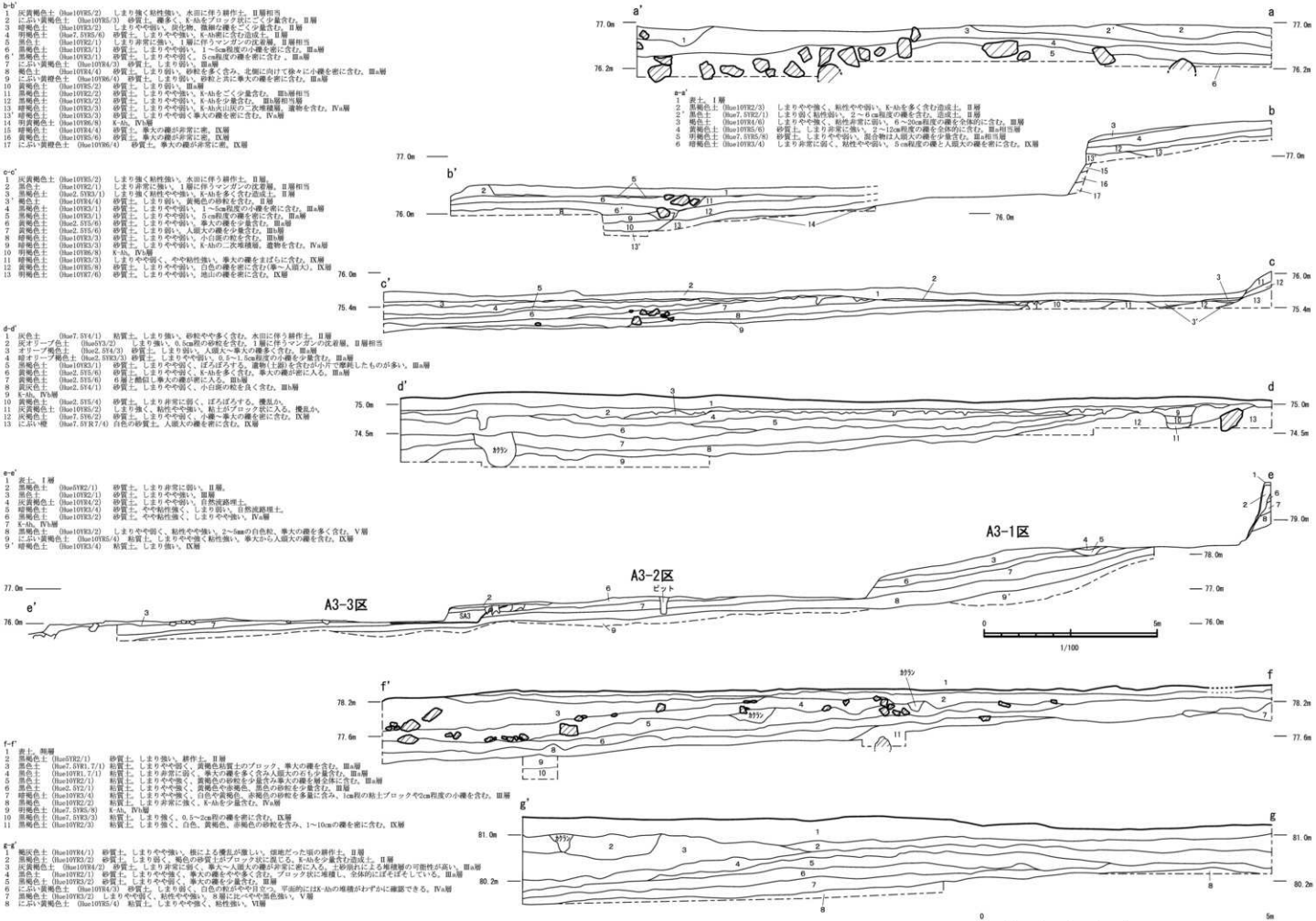
c-c'
1　灰黄褐色土（Hue10YR5/2）　しまり強く粘性強い。水田に伴う耕作土。Ⅱ層。
2　黒色土（Hue10YR2/1）　しまり非常に強い。Ⅰ層に伴うマンガンの沈着層。Ⅱ層相当
3　黒褐色土（Hue2.5YR3/1）しまり強く粘性やや強い。K-Ahを多く含む造成土。Ⅱ層
3'　褐色土（Hue10YR4/4）砂質土。しまり弱い。黄褐色の砂粒を含む。Ⅱ層
4　黒褐色土（Hue10YR3/1）砂質土。しまりやや弱い。1～5cm程度の小礫を密に含む。Ⅲa層
5　黒褐色土（Hue10YR3/1）砂質土。しまりやや強い。5cm程度の礫を密に含む。Ⅲa層
6　黄褐色土（Hue2.5Y5/6）砂質土。しまりやや強い。事大の礫を少量含む。Ⅲa層
7　黄褐色土（Hue2.5Y5/6）砂質土。しまり弱い。人頭大の礫を少量含む。Ⅲb層
8　暗褐色土（Hue10YR3/3）砂質土。しまりやや強い。小白炭の粒を含む。Ⅲb層
9　暗褐色土（Hue10YR3/3）砂質土。しまりやや強い。K-Ahの二次堆積層。遺物を含む。Ⅳa層
10　明褐色土（Hue10YR6/8）K-Ah。Ⅳb層
11　暗褐色土（Hue10YR3/3）しまりやや弱く、やや粘性強い。事大の礫をまばらに含む。Ⅸ層
12　黄褐色土（Hue10YR5/8）砂質土。しまりやや強い。白色の礫を密に含む(事～人頭大)。Ⅸ層
13　明褐色土（Hue10YR7/6）砂質土。しまりやや強い。地山の礫を密に含む。Ⅸ層

d-d'
1　灰色土　（Hue7.5Y4/1）　粘質土。しまり強い。砂粒やや多く含む。水田に伴う耕作土。Ⅱ層
2　灰オリーブ色土　（Hue5Y5/2）　しまり強い。0.5cm程の砂粒を含む。Ⅰ層に伴うマンガンの沈着層。Ⅱ層相当
3　オリーブ褐色土　（Hue2.5Y4/3）砂質土。しまり弱い。人頭大～事大の礫多く含む。Ⅲa層
4　暗オリーブ褐色土（Hue2.5Y3/3）砂質土。しまりやや弱い。0.5～1.5cm程度の小礫を少量含む。Ⅲa層
5　黒褐色土（Hue10YR3/1）砂質土。しまりやや弱く、ぼろぼろする。遺物(土器)を含むが小片で摩耗したものが多い。Ⅲa層
6　黄褐色土（Hue2.5Y5/6）砂質土。しまりやや弱く、K-Ahを多く含む。事大の礫が密に入る。Ⅲa層
7　黄褐色土（Hue2.5Y5/6）6層と酷似し事大の礫が密に入る。Ⅲb層
8　黄灰色土（Hue2.5Y4/1）砂質土。しまりやや弱く、小白炭の粒を良く含む。Ⅲb層
9　K-Ah。Ⅳb層
10　黄褐色土（Hue2.5Y5/4）　しまり強く、ぼろぼろする。機長か。
11　灰黄褐色土（Hue10YR5/2）　しまり強く、粘性やや強い。粘土がブロック状に入る。機長か。
12　灰褐色土（Hue7.5Y6/2）砂質土。しまりやや弱く、小礫～事大の礫を密に含む。Ⅸ層
13　にぶい橙　（Hue7.5YR7/4）白色の砂質土。人頭大の礫を密に含む。Ⅸ層

e-e'
1　表土。Ⅰ層
2　黒褐色土　（Hue5YR2/1）　砂質土。しまり非常に弱い。Ⅱ層。
3　黒色土　（Hue10YR2/1）　砂質土。しまりやや強い。Ⅲ層
4　灰黄褐色土（Hue10YR4/2）砂質土。しまりやや強い。自然流路埋土。
5　暗褐色土（Hue10YR3/4）砂質土。やや粘性強く、しまりやや弱い。自然流路埋土。
6　黒褐色土（Hue10YR3/2）砂質土。やや粘性強く、しまりやや強い。Ⅳa層
7　K-Ah。Ⅳb層
8　黒褐色土（Hue10YR3/2）　しまりやや弱く、粘性やや強い。2～5mmの白色粒、事大の礫を多く含む。Ⅴ層
9　にぶい黄褐色土　（Hue10YR5/4）　粘質土。しまりやや強い。粘性強い。事大から人頭大の礫を含む。Ⅸ層
9'　暗褐色土　（Hue10YR3/4）　粘質土。しまり強い。Ⅸ層

f-f'
1　表土。畑層
2　黒褐色土（Hue5YR2/1）　砂質土。しまり強い。耕作土。Ⅱ層
3　黒色土　（Hue7.5YR1.7/1）粘質土。しまりやや弱く、黄褐色粘質土のブロック、事大の礫を含む。Ⅲa層
4　黒色土　（Hue10YR1.7/1）粘質土。しまり非常に弱く、事大の礫を多く含み人頭大の石も少量含む。Ⅲa層
5　黒色土　（Hue10YR2/1）　粘質土。しまりやや強く、黄褐色の砂粒が少量含み事大の礫を層全体に含む。Ⅲa層
6　黒色土　（Hue2.5Y2/1）　粘質土。しまりやや強く、黄褐色や赤褐色、黒色の砂粒を少量含む。Ⅲ層
7　暗褐色土（Hue10YR3/4）粘質土。しまりやや強く、白色や黄褐色、赤褐色の砂粒を多量に含み、1cm程の粘土ブロックや2cm程度の小礫を含む。Ⅲ層
8　黒褐色　（Hue10YR2/2）　粘質土。しまり非常に強く、K-Ahを少量含む。Ⅳa層
9　明褐色土（Hue7.5YR5/8）K-Ah。Ⅳb層
10　黒褐色土（Hue7.5YR3/2）粘質土。しまり強く、0.5～2cm程の礫を密に含む。Ⅸ層
11　黒褐色土（Hue10YR2/3）　粘質土。しまり強く、白色、黄褐色、赤褐色の砂粒を含み、1～10cmの礫を密に含む。Ⅸ層

g-g'
1　暗灰色土（Hue10YR4/1）砂質土。しまりやや強い。板による攪乱が激しい。畑地だった頃の耕作土。Ⅱ層
2　黒褐色土（Hue10YR3/2）砂質土。しまり弱く、暗色の砂質土がブロック状に混じる。K-Ahを少量含む造成土。Ⅱ層
3　灰黄褐色土（Hue10YR4/2）砂質土。しまり非常に弱く、事大～人頭大の礫が非常に密に入る。土砂崩れによる堆積層の可能性が高い。Ⅲa層
4　黒色土　（Hue10YR2/1）　砂質土。しまりやや強く、事大の礫をやや多く含む。ブロック状に堆積し、全体的にぼそぼそしている。Ⅲa層
5　黒褐色土（Hue10YR3/2）砂質土。しまりやや弱く、事大の礫を少量含む。Ⅲ層
6　にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）砂質土。しまり弱く、白色の粒がやや目立つ。平面的には K-Ahの堆積がわずかに確認できる。Ⅳa層
7　黒褐色土　（Hue10YR3/2）　しまりやや弱く、粘性やや強い。8層に比べやや黒色強い。Ⅴ層
8　にぶい黄褐色土　（Hue10YR5/4）　粘質土。しまりやや強く、粘性強い。Ⅵ層



第５図　内野々遺跡土層断面図（S=1/60、e-e'のみS=1/100）

第４節　石材分類について

出土した石器及び遺構に使用された石材については全て肉眼にて分類した。石材は大きく12種類に分類でき、色調や粒子の相異から細分類した。

尾　鈴１：灰色～暗灰色で粒がやや粗く堅い。１～４㎜の樹脂光沢を持つ石英を多く含む。礫石器に用いられるほか、剥片が大量に出土した。

尾　鈴２：灰色～黄灰色を呈す。２㎜程度の石英が顕著にみられる。

砂　　岩：青灰色～灰色を呈する。質は粗く、組織がやや大きい。地山には含まれず、遺跡周辺からの搬入礫として持ち込まれた可能性が高い。主に打製石斧、磨石、粗製剥片石器などの礫石器に使用される。

頁　　岩：褐色のもの、緑色のものがある。層理や葉理に平行して薄く剥がれやすい。磨製石鏃の石材の他は石器としての利用は見られない。

珪質頁岩：黒褐色を呈し、緻密で非常に堅緻。

流紋岩：暗褐色を呈し、珪質頁岩に似て硬質。斑晶のみられるものを分類した。

黒曜石１：暗灰色～褐色を呈す。透明度が高く、透過光でチョコレート色を呈する。桑ノ木津留・上青木産の可能性が高い。

黒曜石２：灰白色～灰色を呈し、透明度が高いものが多いが、灰色が縞状になるものと、暗灰色で透過性の少ないものも見られる。ザクロ石鉱物粒を含む。姫島産の可能性が高い。

黒曜石３：黒色。自然面は暗灰色を呈し多孔質。発泡ガラス質が散見できる。日東産黒曜石の可能性が高い。

黒曜石４：薄片では濁った暗灰色～黒褐色の雲状を呈す。腰岳産の可能性が高い。

黒曜石５：褐灰～黒褐色を呈す。なめらかなガラス質で斑晶はほとんどない。剥片が数点出土した。針尾島産の可能性がある。

黒曜石６：灰～黄灰色を呈す。剥離面にも風化が見られ、自然面は褐色を呈す。出土量は少なく石鏃の未成品が１点のみ出土した。象ヶ鼻産の可能性がある。

ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ：熱による変成作用を受けた岩石で、風化面が褐色の粉を吹いたようなものを分類した。

チャート：白色、青色、赤褐色などの様々な色調があり、ガラス質で透明度が高いものもある。石鏃や石匙のほか、敲石などに使われる。

玉　　髄：乳白色を呈し光を透過しない。出土点数はごく僅かである。

安 山 岩：灰白～灰黒色を呈す。斑晶が少なく堅緻。サヌカイトを含む。出土点数は少ないが、石鏃や石匙など小型石器の石材としての利用が見られる。

千 枚 岩：灰～黒褐色を呈し、薄板状に剥がれる性質がある。明確な石器としての利用は認められない。

第５節　調査成果概要

本遺跡の遺物包含層はⅢ層（Ⅲa・Ⅲb層含む）、Ⅳa層、Ⅴ層であり、遺構検出層位はⅢ層、Ⅳb層上面、Ⅵ層上面である。

Ⅲ・Ⅳa層は縄文時代前期末～中世までの遺物を包含する。縄文土器は後期前葉～中葉の深鉢が最も出土した。これはＳＡ２・ＳＡ３を中心としてＡ区中央部に後期前半～中葉の土器が分布し、Ａ区北端はＳＡ４・ＳＡ５を中心として後期中葉～後半の土器が分布する傾向がある。また、多量の炭化種実（イチイガシ）が遺構に隣接して出土しており、放射性炭素年代測定の結果、それぞれの分布域で出土した土器の編年に沿った結果を得られた。弥生時代～古墳時代の土器については、甕、鉢、高杯、長頸壺などの器種が出土し、器形の特徴から弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物と考えられる。その他、小片であるが、古代の甕や中世の土師皿なども少量出土している。また、石器については尾鈴Ⅰ・Ⅱの剥片が非常に多く出土した。

遺構についてはⅢ層中から集石遺構を３基検出し、Ⅳb層上面で竪穴建物跡を５軒、集石遺構を10基、土坑を３基、ピットを234基検出した。

Ⅳb下位層の調査は遺物包含層の残存状況が不良であるため、比較的良好に堆積する部分を中心に行った。

Ⅴ層では縄文時代早期の押型文土器、石核や剥片などの石器が散漫に出土した。遺構はⅥ層上面で検出を行い、Ｄ区で集石遺構を５基検出した。

以上、遺構及び遺物の概要を述べたが、個々の詳細については次節以降で報告する。なお、報告内容は第１節の調査結果を踏まえ、第１次調査のＡ区及びＤ区の調査成果に要点を絞って行うこととする。

第６節　縄文時代の遺構と遺物

１　早期の遺構と遺物

（１）　遺構

縄文時代早期の包含層であるＶからⅥ層上面にかけて検出した遺構について早期の遺構として位置付けた。

早期の遺構は集石遺構を５基検出した。その全てがＤ区であり、丘陵裾の緩傾斜が舌状に張り出し南東側の谷地形に向かって傾斜が急になる地形で検出した。これらの遺構に共通する点は、いわゆる「散礫」が見られないこと、拳大から人頭大の尾鈴山酸性岩類の亜角礫で構成されていること、掘り込みを有し配石を伴わないことなどが挙げられる。

また、Ａ区ではＶ層掘削中に拳大の赤化礫の広がりを確認した。しかし、明確な掘り込みがなく、この検出面においては地山に自然礫が密に含まれ、集石遺構に関係する礫とそうでないものの区別がつかない状況であった。このようなことから、遺構として認定せず赤化礫の範囲のみを記録することとした。

当遺跡では、遺構については検出した順番に略号を付けている。本項に係る遺構の正式名称については別表（第１表）に記載するものとし、本書では略号を用いることとしたい。

集石遺構（第７図）

ＳＩ14

先行トレンチ掘削中に検出した。後述する３基と比較して礫の密度は少なく、わずかに赤化がみられる。なお、周辺から無文土器と、砂岩・ホルンフェルス製の剥片が数点出土している。

ＳＩ15・ＳＩ16

２基を密接して検出した。ＳＩ15は掘り込み中央に礫が山なりに密集する。礫は全体的に赤化していた。

ＳＩ16については浅い掘り込みを有する。ＳＩ15に関連する遺構であると考えられ、掻き出された礫の可能性がある。

ＳＩ17

ＳＩ18に隣接して検出した。下部の礫は人頭大のものが多くみられるが、礫の平坦面が上を向いていないこと、人為的な配置が確認できないことから、配石とは認定しなかった。

ＳＩ18

ＳＩ17と同様の検出状況であるが、比較的礫の大きさが揃っており、小礫は少ない。

（２）　遺物

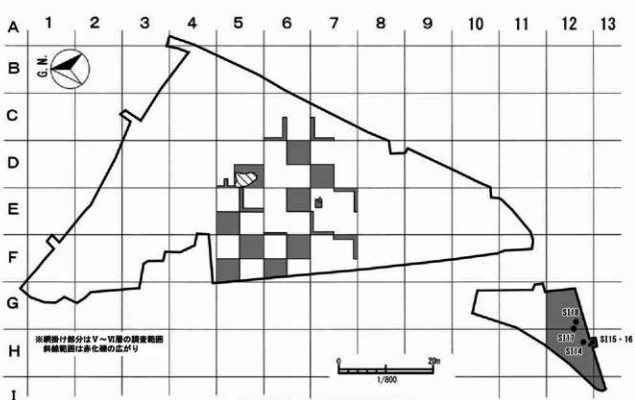
Ｖ層で出土した遺物と、集石遺構の埋土から出土したものを一括して早期遺物とした。また、早期以外の包含層から出土した遺物であっても、形態的に早期に位置付けられる可能性がある資料に関しては本項に掲載している。

調査区全体において早期の遺物包含層であるＶ～Ⅵ層については人頭大の自然礫を密に含んでおり、土層の堆積状況が非常に悪い。また、遺物は土器、石器ともに出土しているがどちらも少量で散漫な出土状況であり、原位置を保った遺物は少ないと考えられる。

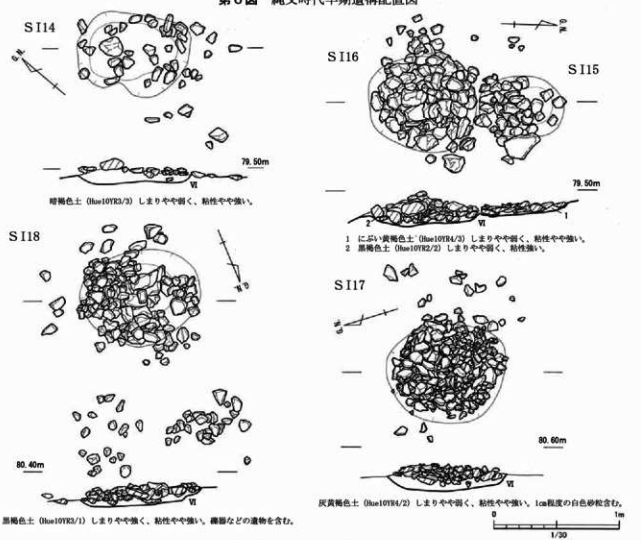
土器（第８図１～11）

出土した土器については、Ａ区では縄文時代早期の円筒系押型文土器が出土し、集石遺構を検出したＤ区では無文土器が数点出土しただけであったが、層位的な検証の結果、当該期の所産であると判断した。

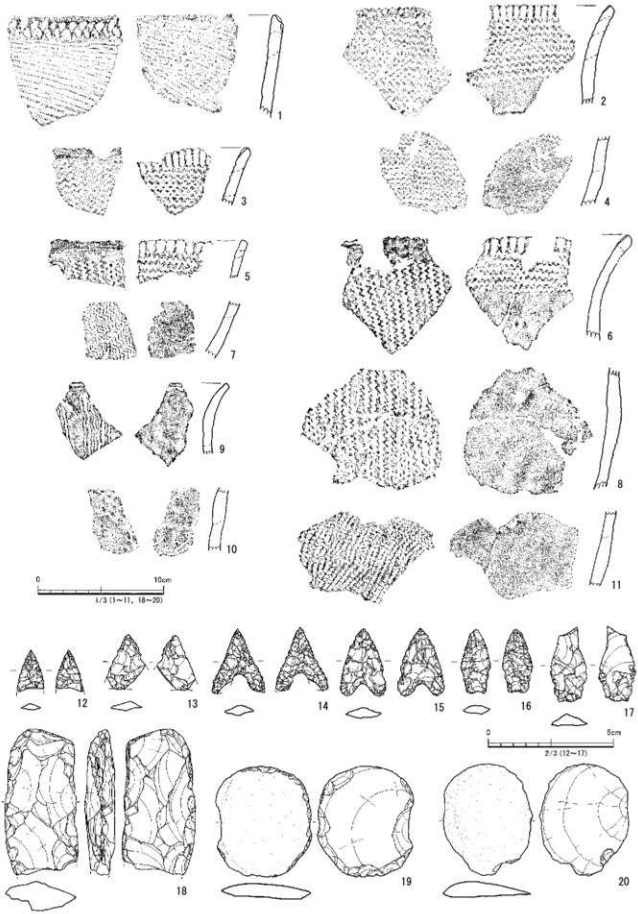
１は口唇部外面に羽状の刺突文を施し、胴部内外面を貝殻条痕文で施文する。２～４は山形押型文を横方向に施すタイプである。２・３は口唇部内面にやや幅の広い連続刻みを施すもので、内外両面の口縁直下から頸部にかけて山形押型文を横方向に施している。４は胴部片で、外面および内面上端に施されている。５～７は土器外面に山形押型文を縦方向に施すタイプである。５・６は口唇部内面にやや幅の広い連続刻みを施し、この直下から頸部にかけ横方向に山形押型文がみられる。７・８は外面に山形押型文を縦方向に施す胴部資料である。７は押型文が明瞭であり、早期初頭まで遡る可能性がある。９は頸部から口縁にかけて強く外反する。外面は一定の間隔を置き、縦方向の波状沈線が連続する。内面については、僅かであるが口縁直下に外面と同様の工具を用いて横方向に施文した形跡が伺える。10は外面に楕円押型文を施文する。11は外面に格子目状の押型文がみられ、内面の調整はナデである。



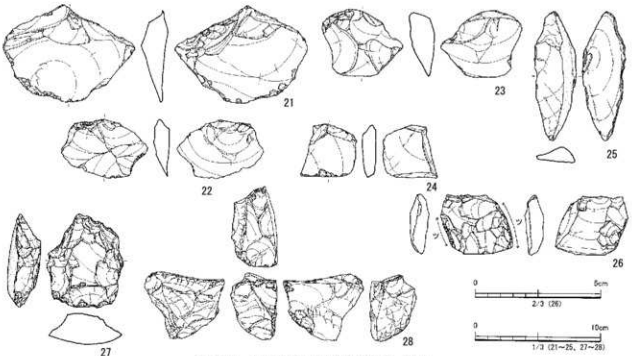
第６図　縄文時代早期遺構配置図



第７図　縄文時代早期遺構実測図　ＳＩ14～18



第８図　縄文時代早期遺物実測図（１）



第９図　縄文時代早期遺物実測図（２）

石器

早期の石器は39点出土した。器種については**Ⅲ**層から出土したものと大きな差は見られないものの、石核や剥片の石材としてホルンフェルス（風化面は灰色～浅黄褐色を呈す）が利用される点が特徴であり、第**Ⅲ**章で報告する内野々第２遺跡に共通するものと思われる。また、集石遺構の内部礫として利用されている尾鈴山酸性岩類を石材とした石器についてはほとんどみられない。わずかに磨石の可能性がある細片が１点出土したのみである。

打製石鏃（第８図12～16）

５点出土し、全て図化した。12と13はチャート製で、基部は欠損しているが、残存部分から抉りが浅い形状であったと推察される。14は黒曜石４を石材とした打製石鏃で、U字状に深い抉りを持つ。15 はＳＩ18の埋土から出土した。珪質頁岩製で、やや刃部が膨らむ二等辺三角形を呈し、やや粗い加工を施す。16はチャート製の石鏃である。石材は乳白色に青～黒色の筋が縞状に入る。先端が延びた五角形状で、僅かに抉りを持つ帖地型石鏃である。**Ⅲ**層中から出土した遺物であり原位置を保っていない。

石匙（第８図17）

１点のみ出土した。横長剥片の片端に微細な剥離を施した縦型の石匙で、石材はチャート製である。

打製石斧（第８図18）

１点のみ出土した。砂岩製の打製石斧で、刃部が欠損している。

粗製剥片石器（第８図19・20）

砂岩製の剥片である。両資料とも母岩から最初に剥離された、いわゆる第一剥片であり、表面に自然面を有する。19は縁辺に組織的な剥離が認められ、スクレイパーとしての機能があったと考えられる。20は後述する粗製剥片石器Ⅰ類に相当する。なお、砂岩の剥片は他に３点出土しているが、いずれも不定形である。

二次加工剥片（第９図21～25）

５点出土し、全て図化した。石材は流紋岩やホルンフェルスである。

楔形石器（第９図26）

26は暗緑灰色のチャートを石材とした楔形石器である。１点のみ出土した。左右の縁辺が潰れている。

石核（第９図27・28）

３点出土し、２点を図化した。27はＳＩ18の内部礫として出土した。背面に自然面を有し、剥離面共にやや風化している。28はホルンフェルス製の石核である。剥離面の風化が著しく浅黄色を呈すが、本来は黒～黒褐色であったと思われる。

この他に、未図化の剥片資料としてホルンフェルス８点、流紋岩２点、珪質頁岩製１点、チャート４点、黒曜石６が１点出土している。

赤化の度合い:◎…全体 ○…半数程度 △…少量

遺構名称		検出位置(Gr.)	検出層位	検出高(m)	穴					内部穴		出土遺物	備考
					穴縁間(m)		掘込み(m)						
略号	正式名称				長軸	短軸	長軸	短軸	深度	重量(kg)	赤化		
S114	14号集石遺構	H12	Ⅵ	79.5	1.30	0.54	0.89	0.64	0.13	7.0	△	－	先行トレンチ掘削時に検出
S115	15号集石遺構	H12	Ⅵ	78.4	0.75	0.66	0.68	0.49	0.06	58.0	○	剥片	
S116	16号集石遺構	H12	Ⅵ	79.4	1.18	0.84	0.96	0.75	0.11		◎	剥片	礫範囲中央が盛り上がる
S117	17号集石遺構	G12	Ⅵ	80.4	1.42	0.81	0.96	0.81	0.14	62.2	◎	－	
S118	18号集石遺構	G12	Ⅵ	80.3	2.00	1.26	0.93	0.75	0.13	85.0	◎	石鏃・石核	

第１表　縄文時代早期集石遺構一覧表

No.	器種	部位	出土位置	出土層位	色調		調整		胎土		焼成	備考
					外面	内面	外面	内面				
1	深鉢	口縁	F5	V	にぶい黄橙 10YR6/4	橙5YR6/6	貝殻条痕文 口縁上部に連続刺突文	貝殻条痕文	やや密	2mm以下の白色粒を多く含む 1mm以下の黒色粒を少し含む 2mm以下の赤色粒を微量に含む	良好	
2	深鉢	口縁	E5	V	にぶい黄橙 10YR7/4	明黄褐 10YR7/6	横方向の山形押型文	連続刺文→横方向の山形押型文、下部はナデ	やや密	7mm以下の白色粒・3mm以下の黒色粒を多く含む 1mm以下の赤色粒・灰色粒を少し含む	良好	
3	深鉢	口縁	E6	V	暗灰黄 2.5Y5/2	黄褐 2.5Y5/3	横方向の山形押型文	連続刺文→横方向の山形押型文	やや密	0.5mmの赤色粒・12mm以下の灰色粒を微量に含む 2mm以下の黒色粒・0.5mm以下の透明粒を多く含む 2.5mm以下の白色粒を少量含む	良好	
4	深鉢	胴部	D6	V	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	横方向の山形押型文	上端に横方向の山形押型文、下部はナデ	やや密	4mm以下の赤色・灰色・透明粒を微量に含む 2mm以下の黒色粒を少量含む 4mm以下の白色粒を多く含む	良好	
5	深鉢	口縁	D6	V	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	縦方向の山形押型文	連続刺文→横方向の山形押型文	やや密	2mm以下の黒色粒・2.5mm以下の透明粒を多く含む 1.5mm以下の白色粒を少量含む 4mm以下の灰色粒を微量に含む	良好	
6	深鉢	口縁	SA3	床	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄 2.5Y7/3	ナデ一部方向の山形押型文	連続刺文→ナデ一上部は横方向の山形押型文、下部はナデ	やや密	3mm以下の黒色粒・白色粒を多く含む 2mm以下の灰色粒を少し含む 6mm以下の赤色粒を少し含む	良好	
7	深鉢	胴部	A3区	－	橙7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	縦方向の山形押型文	ナデ	やや密	2mm以下の黒色粒・3mm以下の灰色粒を少量含む 5mm以下の白色粒を多く含む 2mm以下の透明粒を微量に含む	良好	
8	深鉢	胴部	SA3	床	にぶい黄橙 10YR7/4	灰黄 2.5Y6/2	縦方向の山形押型文	ナデ(一部指頭圧痕あり)	やや密	2mm以下の黒色粒・4mm以下の白色粒を多く含む 4mm以下の赤色粒をわずかに含む	良好	圧痕資料1
9	深鉢	口縁	A2区	面b	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	縦方向の沈線文	ナデ	やや密	1mm以下の黒色粒を少量含む 微細な白色粒・透明粒を少量含む	良好	
10	深鉢	胴部	A2区	面	橙5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	格円押型文	ナデ	やや密	5mm以下の赤色粒を少量含む 2mm以下の黒色粒を多く含む 1.5mm以下の白色粒・2mm以下の灰色粒を微量に含む	良好	
11	深鉢	胴部	E6	V	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4	格子目押型文	ナデ	やや密	2mmの赤色粒を微量に含む 3mm以下の黒色粒・5mm以下の白色粒を多く含む 1.5mm以下の透明粒を少量含む	良好	

第２表　縄文時代早期土器観察表

No.	器種	石材	取り上げ番号	出土位置	出土層位	座標(m)			法量(cm, g)				備考
						X	Y	Z	最大長	最大幅	最大厚	重量	
12	打製石鏃	チャート	4023	G12	Ⅴ	-78363.575	51342.415	80.106	(1.6)	(1.1)	(0.3)	(0.3)	
13	打製石鏃	チャート	4034	G12	Ⅴ	-78362.645	51341.150	80.190	(2.2)	(1.5)	(0.5)	(1.2)	
14	打製石鏃	黒曜石4	4061	D6	Ⅴ	-78304.401	51379.127	75.929	2.5	2.1	0.4	1.1	
15	打製石鏃	珪質頁岩	S118-4	S118	Ⅴ	－	－	－	2.7	1.8	0.5	1.6	
16	打製石鏃	チャート	995	E5	面	-78291.674	51368.523	76.765	2.5	1.2	0.3	1.0	転地型
17	石匙	チャート	4024	G12	Ⅴ	-78363.340	51342.333	80.084	2.9	1.5	0.5	1.8	縦型
18	打製石斧	砂岩	4062	D6	Ⅴ	-78304.501	51379.166	75.933	(11.4)	5.8	2.4	(186.1)	
19	複製剥片石器	砂岩	4076	H12	Ⅴ	-78365.131	51336.731	80.454	8.7	7.5	1.2	99.4	複製剥片石器Ⅱ類に相当
20	複製剥片石器	砂岩	S115-1	S115	－	－	－	－	9.8	7.0	1.2	73.0	複製剥片石器Ⅰ類に相当
21	二次加工剥片	流紋岩	4026	H12	Ⅴ	-78364.129	51337.739	80.454	7.7	10.4	2.5	124.3	
22	二次加工剥片	流紋岩	4027	H12	Ⅴ	-78363.450	51336.806	80.499	4.6	6.8	1.2	30.5	
23	二次加工剥片	ホルン	4013	G12	Ⅴ	-78362.818	51343.660	80.017	5.2	6.4	2.0	53.6	
24	二次加工剥片	ホルン	4045	D5	－	-78290.690	51369.531	76.449	4.5	4.3	1.1	23.3	
25	二次加工剥片	ホルン	4042	F6	Ⅴ	-78305.712	51357.613	77.210	10.1	3.3	1.4	37.4	
26	使用石器	チャート	4005	H12	Ⅴ	-78360.991	51337.760	80.617	2.4	2.9	0.7	5.1	縁辺に潰れあり
27	石核	ホルン	S118-1	S118	－	－	－	－	7.3	6.0	2.7	113.8	
28	石核	ホルン	4004	H12	Ⅴ	-78361.561	51335.965	80.686	5.3	3.7	6.3	108.1	

第３表　縄文時代早期石器計測表

2　中期・後期の遺構と遺物

（1）　遺構（第10図）

当該期の遺構は全てA区で検出した。竪穴建物跡４軒、集石遺構13基、土坑３基を検出した。

竪穴建物跡

ＳＡ２（第11図）

ＳＡ２はA区の中央に位置し、ＳＡ３に接する。縄文時代後期前葉の竪穴建物跡である。先行トレンチの結果から、ＳＡ２の掘り込み面はこのⅢ層中であると思われることから、Ⅲ層を慎重に掘削しながら面的に精査を行いプランの検出を試みた。しかし、ＳＡ２の上部埋土はⅢ層に酷似しており、Ⅲ層での面的な検出は困難を極めた。その結果、Ⅳb層上面でプランを検出することとなった。

Ⅳb層で検出したＳＡ２の平面プランは長軸約6.7m、短軸6.6mの円形状を呈し、検出面からの深さは60cmを測る。床面積は25.5㎡である。掘り底はしまりが強いが、明確な硬化面を持たない。中央部に複数の礫が集まる楕円形の土坑があり、中央炉の可能性がある。床面で検出したピットは６基あり、主柱穴の可能性がある。また、掘方の周囲にピットが巡る。北側壁面は床面から急激に立ち上がるが、南東側は緩やかに立ち上がる。また、途中から大きく開き２段状を呈するが、埋没時に壁面が崩落した結果である可能性も考えられる。以上の形状から、ＳＡ２は竪穴住居としての機能があったと考えられる。

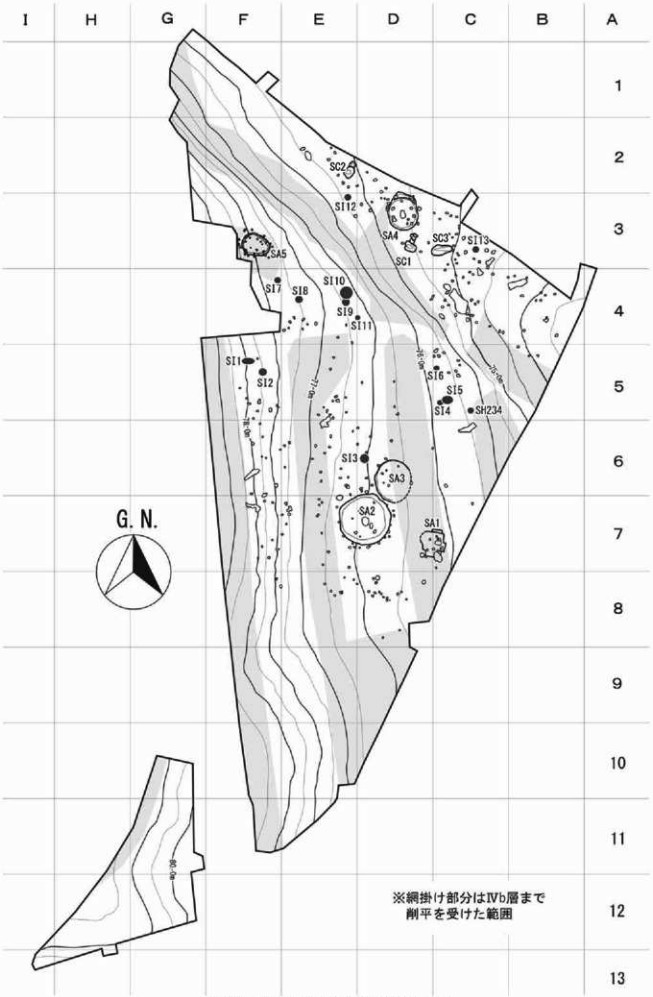
先行トレンチの土層断面からは明確な床面を捉えることはできなかった。これは、床面が硬化しておらず、かつ埋土最下層と地山（Ⅴ層）との土質が酷似しており分層が非常に困難であったことに起因する。そこで、遺構面の認定に際しては、「しまりのやや強い暗褐色砂質土中に人頭大の自然礫を密に含み、この礫が風化または剥離したと思われる微細な白色粒を含む」という地山の土質的な特徴をもとに行った。結果、得られた分層線を遺構の立ち上がり及び床面と認識して掘削を行った。このように、ＳＡ２は分層が非常に困難な遺構であったため、調査は地山まで掘り抜くサブトレンチを多用して行ったものの床面直上から縄文時代早期の遺物が出土しており、掘り間違いの可能性は強く残る結果となった。そのため、ＳＡ２の遺構平面図下端については検討した結果、修正を加えた推定線である。

埋土は黒褐～黒色の砂質土で、水平堆積である。埋土中には随所に人頭大の尾鈴山酸性岩類の自然礫が含まれている。特に遺構の西側は地形的にやや高く、転落して混入したと考えられる礫が多く出土した。また、埋土中央部分では小礫が多く含まれる状況であったが、これが中央の土坑に関係するものなのか、あるいは中央部分が最終的に埋没した結果なのかは判断できなかった。

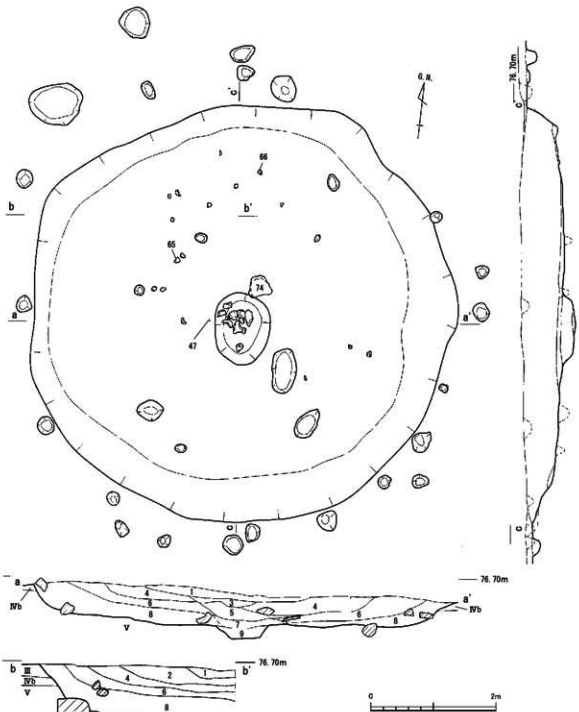
遺物は深鉢、浅鉢、台付鉢、打製石鏃、石錐、打製石斧、石核、礫器、二次加工剥片、剥片、磨石、石錘、台石、炭化種実、炭化材が出土している（第12～15図）。遺物出土傾向としては、埋土上層が多く床面に近くなるにつれて少なくなる傾向がある。また、前述したように床面直上で出土した遺物は遺構の検出面から判断される時期とは矛盾する。そこで、本書に掲載した資料は遺構埋土出土の遺物を含めて遺構の遺物とした。

出土した土器の器種は深鉢が主体であり、文様構成は沈線文と貝殻文の二系統がみられる。29～33は沈線により区画し、この間に縄文が施された、いわゆる磨消縄文土器である。頸部が強く屈曲し胴部が張る形状で、丁寧なナデで調整している。29は胴部に渦文・鉤手文がみられ、縄文はない。31・32は赤色顔料が付着する。胎土、調整共に酷似しており、同一個体の可能性がある。34は頸部から胴部最大径にかけ、幅の広い縄文帯を持ち、施文後、文様の端部をナデで平行に調整する。35～38は貝殻で調整・施文する。35・36は口縁部直下に貝殻腹縁による連続刺突文を丁寧に施す。40・41は台付鉢形土器の口縁部で、同一個体である。40は穿孔を有する。どちらも赤色顔料が明瞭に付着する。42はサブトレンチからの出土で、床面直上に相当する。43・44は波状口縁を呈し、外面には沈線や連続刻み・刺突文で幾何学的な文様を施す。

46～48は石鏃である。46は流紋岩製で、やや抉りが深い。47と48は姫島産黒曜石製で、正三角形に近い形状を呈し、抉りが浅く小型の石鏃である。49は珪質頁岩製の石錐である。50～53は砂岩製の礫器である。50は刃部に使用痕が看取できる。51は磨石を加工した第一剥片を素材としたものである。52は扁平な磨・敲石

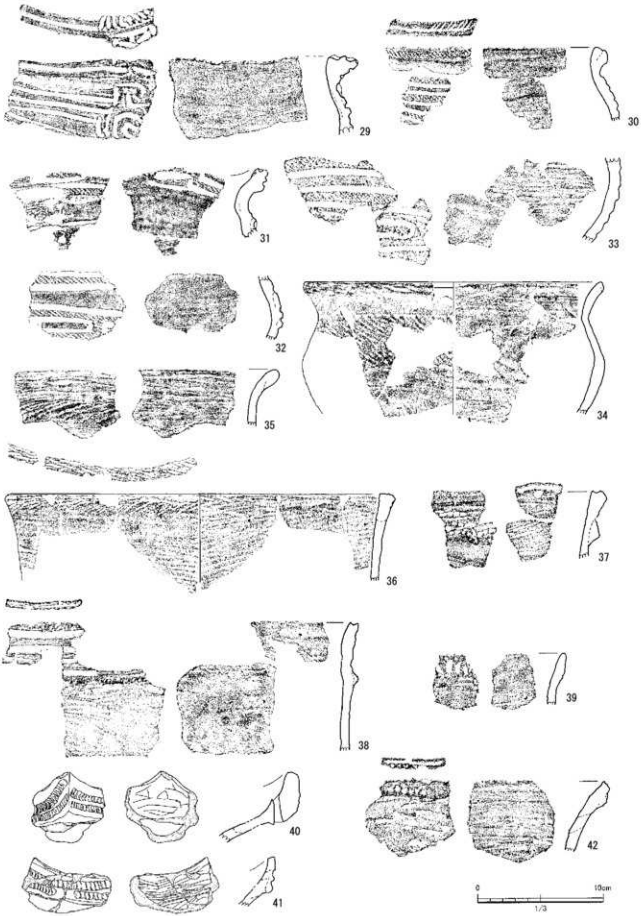


第10図　Ⅳb層上面遺構分布図（S=1/500）

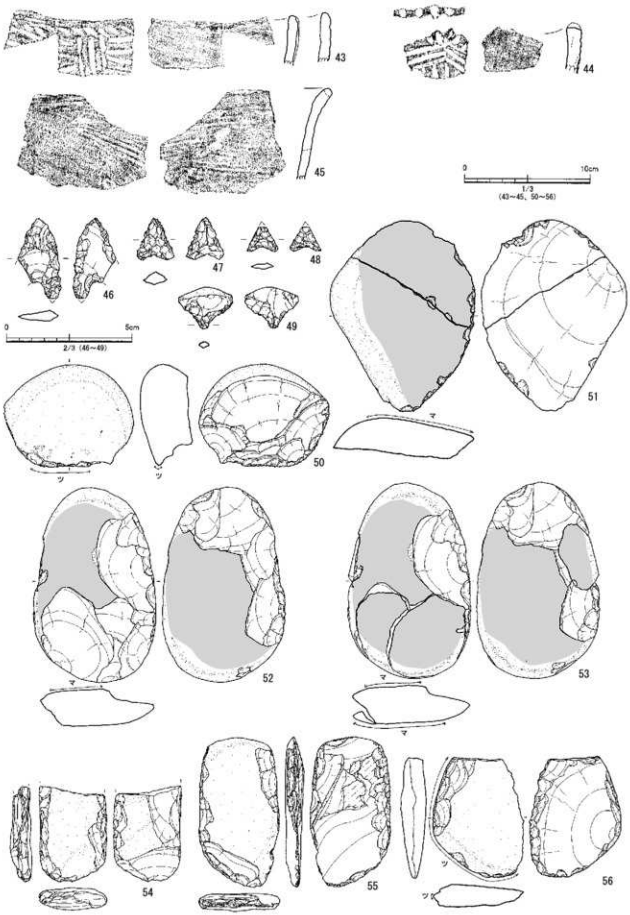


1　黒色土　(Hue7.5YR1.7/1)　砂質土。粘性やや弱く、しまり弱い。
2　黒褐色土 (Hue10YR3/1)　砂質土。粘性やや弱く、しまり弱い。3~5mmの小礫を少量含む。
3　黒色土　(Hue7.5YR3/1)　砂質土。粘性やや強く、しまりやや弱い。1~3cmの小礫やφ~5mmの砂粒を密に含む。
4　黒褐色土 (Hue10YR3/2)　砂質土。粘性非常に弱く、しまりやや強い。1~2mm程の白色粒やφ~3mmの橙色パミス、2~10cm程の小礫を含む。
5　黒褐色土 (Hue5YR2/1)　粘質土。粘性非常に強く、しまりやや強い。2~5cmの小礫が密に入る。
6　黒褐色土 (Hue10YR2/2)　砂質土。粘性非常に弱く、しまり強い。1~2mmの白色粒、5~8mmの黄褐色砂粒を含む。
7　黒褐色土 (Hue10YR3/1)　粘質土。粘性強く、しまり強い。2~3cmの小礫が全体的に含まれる。
8　黒褐色土 (Hue10YR2/3)　砂質土。粘性非常に弱く、しまり強い。1~2mm程の白色粒やφ~6mmの橙色粒、炭化物粒を含み、人頭大の礫が少量みられる。
9　暗褐色土 (Hue10YR3/)　砂質土。粘性やや弱く、しまり非常に強い。拳大の礫を多く含む。

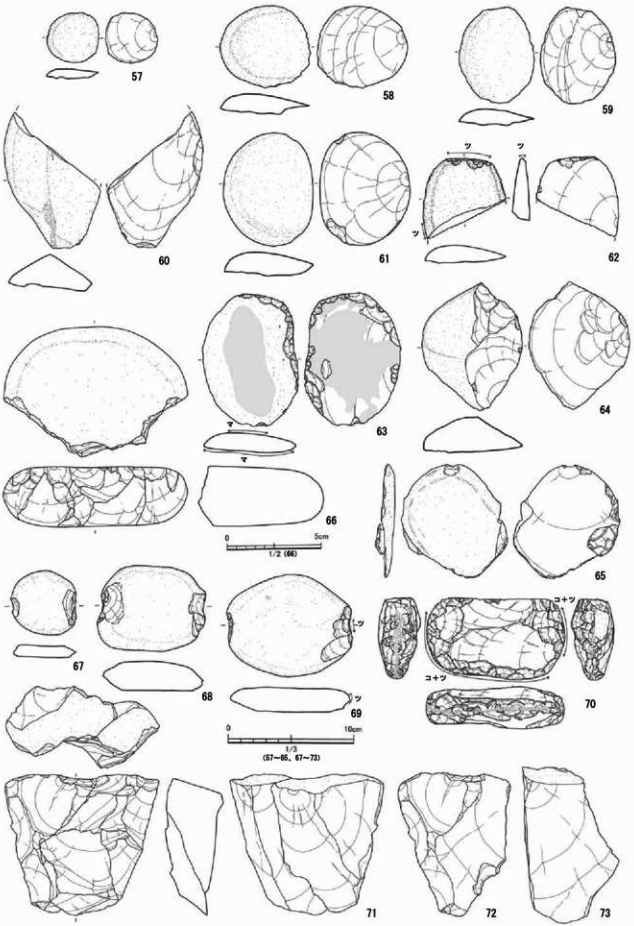
第11図　縄文時代中・後期遺構実測図（1）　ＳＡ２



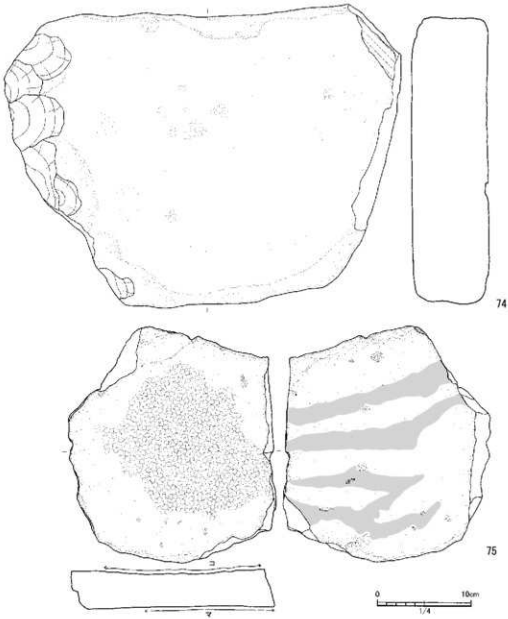
第12図　縄文時代中・後期遺構出土遺物実測図（1）　ＳＡ２



第13図　縄文時代中・後期遺構出土遺物実測図（２）ＳＡ２



第14図　縄文時代中・後期遺構出土遺物実測図（3）　ＳＡ２



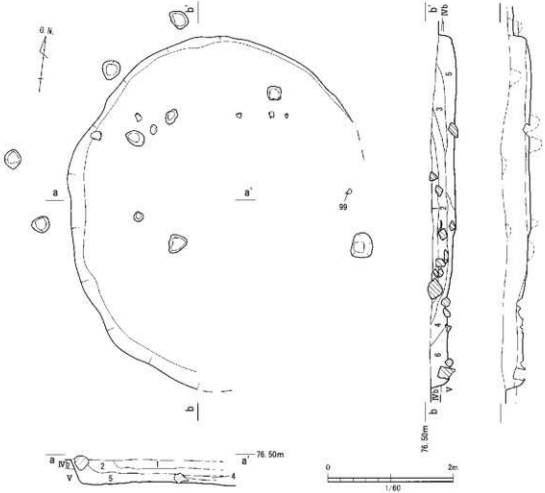
第15図　縄文時代中・後期遺構出土遺物実測図（４）　ＳＡ２

を加工したもので、表・裏面に磨り面を有し僅かに敲打痕がある。なお、53は52と剥片３点との接合資料であり、剥片は遺構周辺の包含層から出土した。54～56は砂岩製の石斧である。57～64は砂岩及び尾鈴山酸性岩類製の剥片である。第一剥片及びこれを加工したものである。65は安山岩系の二次加工剥片である。C5Gr.で出土した資料１点と接合した。67～69は石錘である。69の剥離面には潰れが見られる。71は同じ遺構内から出土した72と73の剥片の接合資料である。74～75は台石である。74は連続した剥離があり石核でもある。75の表は敲打痕が明瞭で、裏面には研磨面を有する。

ＳＡ３（第16図）

ＳＡ３はＡ区中央のD6Gr.に位置し、ＳＡ２に隣接する。現代の切り盛り造成の結果、東側は大きく削平を受けていた。出土した土器の特徴から縄文時代後期前葉の竪穴建物跡と判断した。ＳＡ２と接するように位置することから、本来一部が切り合い関係にあったと考えられるが、Ⅳb層上面での遺構検出の際にはそれぞれが独立する状態であり、平面及び土層断面からは明確な切り合いは認められなかった。

削平のため、遺構の全体形の詳細は不確かであるが、完掘状況から南北に延びる楕円形の掘り込みであった

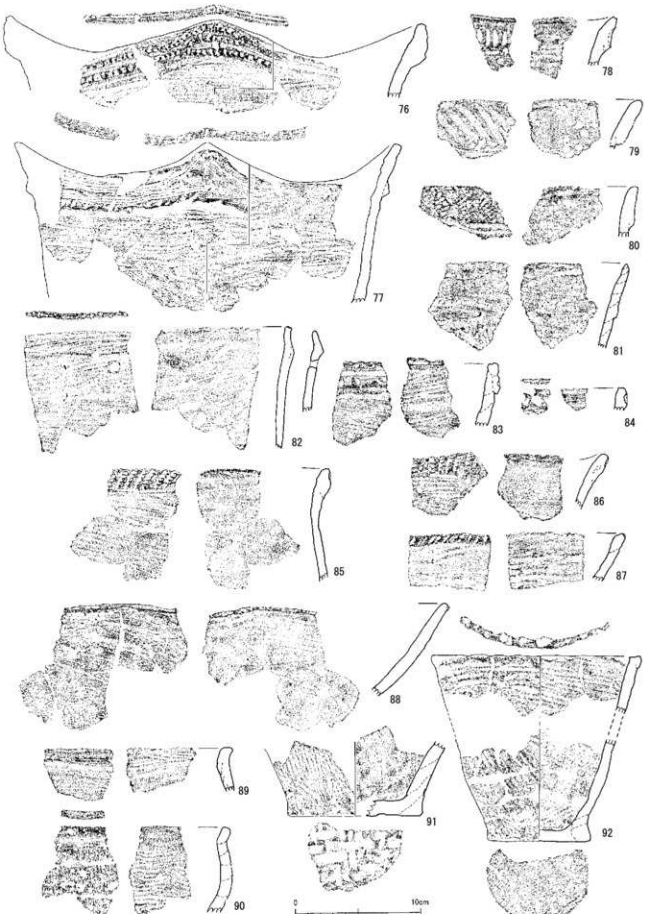


1　黒色土　(Hue7.5YR1.7/1)　粘質土。粘性強く、しまり弱い　1～5mmの小礫を少量含む。
2　黒色土　(Hue7.5YR2/1)　粘質土。粘性やや強く、しまりやや強い。2～5mmの白色粒、小礫～拳大の礫を少量含む。炭化物（種実）多く含む。
3　黒褐色土 (Hue10YR2/3)　砂質土。粘性やや弱く、しまりやや強い。1～3mmの小礫を均一に含む。
4　黒褐色土 (Hue7.5YR2/2)　砂質土。粘性弱く、しまり強い。5～8mmの砂粒を均一かつやや密に含む。
5　黒褐色土 (Hue7.5YR1.3/1)　砂質土。粘性非常に弱く、しまり非常に強い。小礫を密に含む。
6　黒褐色土 (Hue5YR3/1)　粘質土。粘性非常に強く、しまり非常に弱い。K-Ahブロックを含む。微細なパミスを含み、1～2mmの小礫を含む。

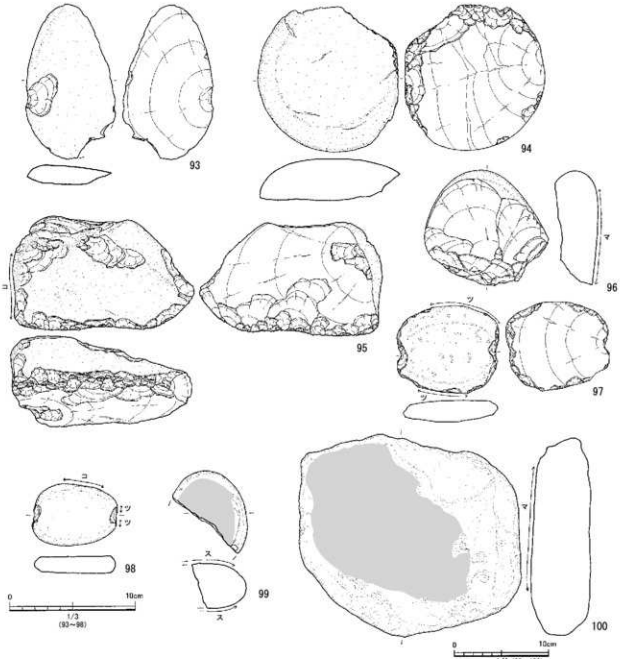
第16図　縄文時代中・後期遺構実測図（2）　ＳＡ３

と考えられる。残存する長軸は5.6m、推定される短軸は4.7mの楕円形プランを呈し、検出面からの深さは37cmを計る。推定復元した床面積は18.3㎡である。埋土の質及び堆積状況はＳＡ２と似ており、床面の認定は同様の根拠で行った。完掘状況での床面は明確な硬化面を持たず、地山（Ⅴ層）中の礫が無数に露出する状態である。壁面はやや急に立ち上がる。床面では５基のピットを検出し主柱穴の可能性がある。ＳＡ３はＳＡ２と同様の構造を有することから竪穴住居としての機能があったと考えられる。

遺物の出土量はやはり床面に近づくにしたがって少量となる。土器（第17図）は口縁が肥厚し貝殻文や短沈線で文様帯を構成する深鉢が主体であり、胴部から底部にかけては貝殻条痕文による調整が多く見られる。76は肥厚帯に竹管状工具の押し引きにより、沈線を描く。胎土は白っぽく、焼成により広い範囲に赤化がみられる。77は口縁部に突帯を貼り付け、その上に貝殻連続刺突文がわずかにみられるが、施文しない箇所もあり不規則である。口唇部はわずかに外面へ突出し、口縁帯に二叉状工具で粗い沈線を施す。口縁は波状を呈し、口唇部には切りつけたような刻みが連続する。突帯・文様共に粗く、全体的に粗雑な作りである。83は半截竹管状工具による刺突文が２列あり、その間に沈線が１条みられる。軟質な胎土で、浅黄色を呈し微細な黒色斑点が散見できる。85～87は貝殻腹縁による連続刺突文が明瞭である。88～90は無文の深鉢である。89、90は頸部から口縁部が短く、弱く屈曲する。91は底部に網代痕が顕著に残る。また、断面に煤が付着し



第17図　縄文時代中・後期遺構出土遺物実測図（5）　ＳＡ３



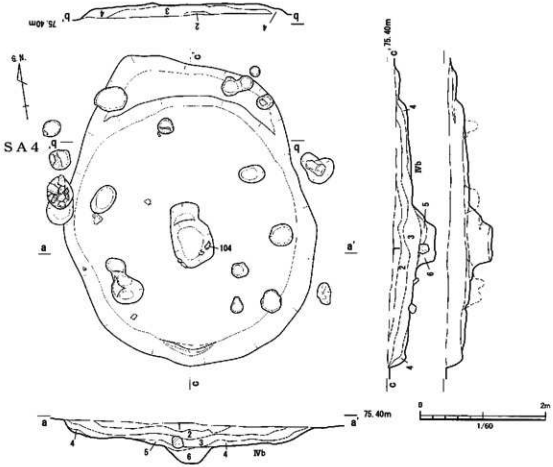
第18図　縄文時代中・後期遺構出土遺物実測図（６）　ＳＡ３

していることから、破損後にも何らかの形で使用された可能性がある。92は器高の低い深鉢である。バケツ状に広がる形状で、胴部との境が明瞭である。

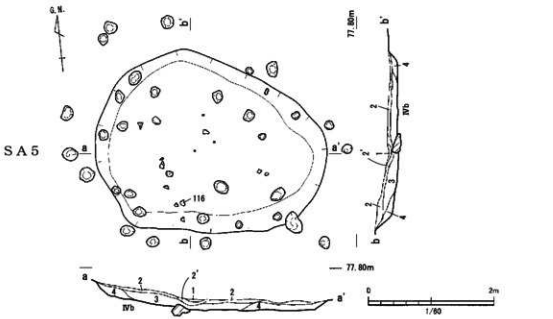
石器（第18図）は砂岩または尾鈴山酸性岩類を石材とした礫石器が主体であり、打製石斧、礫器、剥片、磨石、石錘、台石が出土した。95は礫器で、亜角礫の自然面が残存する。この他、炭化種実や炭化材が埋土から出土した。このため、第２層はフローテーション用に埋土を採取した。なお、結果の詳細については第９節の第22表を参照されたい。

ＳＡ４（第19図）

ＳＡ４は遺跡北端のD3Gr.に位置し、北側の小川とは約16m離れている。縄文時代後期中葉の竪穴建物跡である。遺構検出面はⅣb層上面であるが、遺構の輪郭が明瞭ではなく、「シミ」や「にじみ」の様な状態で検出した。完掘状況は長軸約4.3m、短軸約3.8mの楕円形の掘り込みを呈し、床面積は10.5㎡を測る。北側に不定形の浅い掘り込みを有し、当初は竪穴建物の建て替えの痕跡を考慮したが、土層断面の観察では切り合いが見られないことから、ＳＡ４に伴うものと判断し

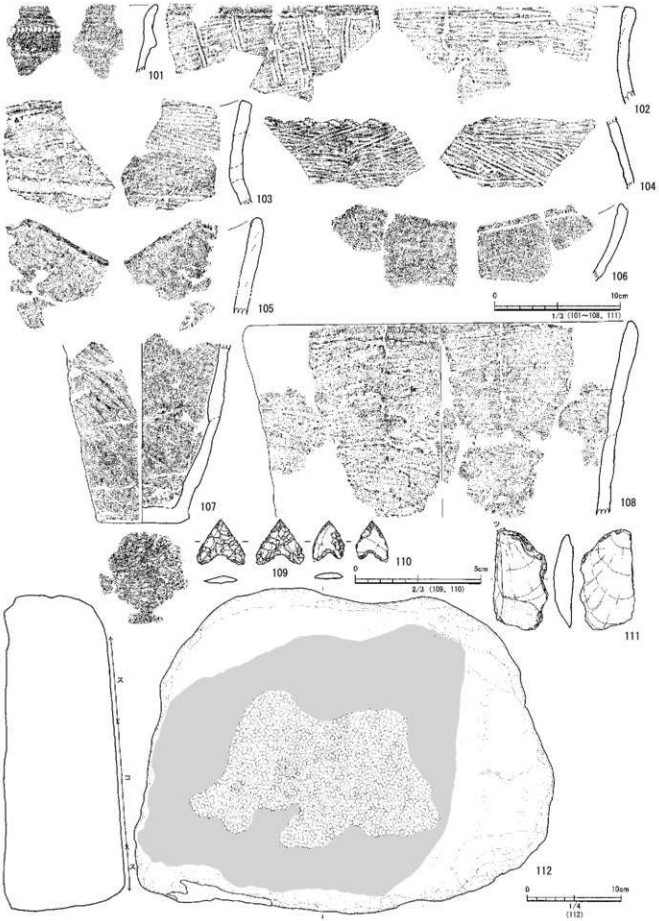


1　黒褐色土　(Hue10YR3/1)　砂質土。しまりやや弱い。
2　オリーブ褐色土 (Hue2.5Y4/3) 砂質土。しまりやや強い。茶褐色のパミスを含みK-Ahをブロック状に含む。炭化物をごく少量含み、中央は黒色がやや強く5cm程度の層を含む。
3　暗灰黄色土 (Hue2.5Y4/2)　砂質土。やや粘性弱く、しまり強い。K-Ahと暗褐色粘土ブロックを多く含み、炭化物を多く含む。
4　黄褐色土　(Hue2.5Y5/4)　砂質土。しまり強く、炭化物少量含む。
5　黒褐色土　(Hue2.5Y3/2)　粘質土。しまりやや弱く、K-Ahを少量含む。
6　オリーブ褐色土 (Hue2.5Y3/2) 粘質土。しまりやや弱く、5mm程度のK-Ahを少量含む。

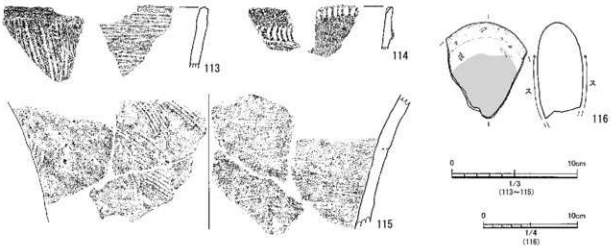


1　黒褐色土 (Hue10YR3/2)　砂質土。粘性弱く、しまりやや弱い。1～2mmの白色粒、2～4mmの橙色粒を含む。
2　黒褐色土 (Hue10YR2/2)　砂質土。粘性やや弱く、しまり弱い。1mm程度の白色粒を少量含む。
2'　黒色土　(Hue10YR2/1)　砂質土。粘性やや弱く、しまり弱い。1～2mmの白色、橙色粒を含み、5～7mm程の小礫を全体に含む。
3　黒色土　(Hue10YR1.7/1) 砂質土。粘性弱く、しまりややや強い。1～2mmの白色、橙色粒を全体に密に含む。
4　暗褐色土 (Hue10YR3/3)　砂質土。粘性非常に弱く、しまり非常に強い。1～2mmの白色、橙色パミス、炭化物を全体に含む。

第19図　縄文時代中・後期遺構実測図（3）　ＳＡ４・ＳＡ５



第20図　縄文時代中・後期遺構出土遺物実測図（7）　ＳＡ４



第21図　縄文時代中・後期遺構出土遺物実測図（８）　ＳＡ５

た。遺構周辺ではⅣb層が厚く堆積しているため、掘方はこの層中で掘削が停止されている。壁面はやや緩やかに立ち上がる。床面は平坦で、やや強くしまるが明確な硬化面は確認できない。床面では中心から放射状にピットが６基検出され、それぞれが約1.5m間隔で配置する。また、掘方の周囲では2.0m間隔でピットが巡る。中央には楕円形の土坑を有し、微細な炭化物片が混じる埋土が堆積する。以上の構造から竪穴住居としての機能があったと判断した。

遺物については深鉢、打製石鏃、剥片、台石、炭化種実などが出土した（第20図）。先述したＳＡ２・ＳＡ３と比較して、遺物は埋土上層には多く、床面に近づくにつれて出土量が減少する点で似ており、土器口縁部の文様が簡素化する点で異なる。炭化種実については、床面直上から採取した埋土サンプルにフローテーション作業を行った結果得られた。同定の結果はイチイガシの子葉であり、その放射性炭素年代測定の結果は、3,484±23（BP）であった。

102は口縁部を横方向の貝殻条痕文で調整した後、一定の間隔を置き垂直に施文する。104は頸部に貝殻腹縁刺突文が連続するもので、床面直上で出土した。103は頸部に浅いナデにより、幅広な回線文状のくぼみが巡る。106は内面の口縁部直下に沈線を有する。なお、調整はナデである。107の外面は斜方向の強い指ナデがあり、回線状を呈する。108は無文の深鉢で、色調と胎土に含まれる赤色砂粒が特徴的である。109・110は石鏃である。110は安山岩製で、やや浅い抉りを持ち縁辺がやや張る五角形状を呈する。112は台石である。

ＳＡ５（第19図）

ＳＡ５はＡ区北西のF36r. で検出した。この部分は調査着手時点まで宅地であった場所である。旧地形は緩傾斜であるが、この宅地造成時に平坦面へと変化している。従って、地山まで削平が及ぶ範囲がみられた。ＳＡ５についても遺構上面が削平されており、残存状況は不良であった。また、K-Ahの堆積も不安定であり、遺構検出が困難であった。出土した土器の特徴から縄文時代後期中葉の竪穴建物跡である。長軸3.7m、短軸2.9mを測りの東西にやや延びる不整楕円形を呈し、検出面からの深さは17cmを測る。床面積は5.9㎡で、検出された他の竪穴建物と比較すると非常に狭い。掘底は東に向け若干傾斜し、ややしまりが強いが明確な硬化面は見られない。壁面は緩やかに立ち上がる。床面及び周囲に多数のピットを検出しているが、一部は樹根の可能性がある。埋土は暗褐～黒色を呈し、水平状の堆積である。中央部分は小礫が多く含まれ異なる堆積状況を示すが、埋没過程における流入土の質の違いと考えられる。

遺物は埋土の残存状況も不良であり、わずかであった（第21図）。114は肥厚帯に爪形文が連続する。縄文時代中期の遺物であり、流れ込みの可能性が高い。115の胎土は橙～赤色を呈し、赤錆色の石粒が特徴的である。116は尾鈴２を石材とした磨石である。床面直上で出土した。

集石遺構

当該期の集石遺構は13基検出した（第22～23図）。検出状況では早期の集石遺構と同様に散礫らしい礫の広がりが見られず、拳大～人頭大の礫が密に集積された出土状況であった。一方で、礫の石材利用については依然として尾鈴山酸性岩類を主体としているものの、砂岩の円礫やホルンフェルスなどが内部礫として出土するなど、早期の集石遺構とは異なる点が見られる。

検出は基本的にⅣb層上面で行ったため、掘り込みが浅く、内部礫が少量のような状態であれば遺構と認定せずに掘り下げた結果、掘方の一部が欠損したものがあった。ＳＩ４～ＳＩ11はⅣb層で検出したが、この周辺は土層の堆積がやや不良であり、K-Ahはブロック状に含む程度であった。

集石遺構については以下のとおり分類して掲載した。なお、遺構の詳細は第４表に掲載している。

Ⅰ類…掘り込みを持たないもの。
Ⅱ類…掘り込みがあり、配石がないもの。
Ⅲ類…掘り込みがあり、配石があるもの。

Ⅰ類（第22図）

ＳＩ１

F5Gr.に位置し、Ⅲ層中で検出した。拳大から人頭大の扁平な礫が上面を向くものも見られる。部分的に礫の赤化が見られた。

ＳＩ２

F5Gr.に位置し、Ⅲ層中で検出した。ＳＩ１の東側に隣接して検出した。遺構を構成する礫は拳大のものがほとんどであり、地山の分層線に平行して堆積する。礫の密度は薄く散漫に広がる状態であることから、ＳＩ１から転落した礫が集積した可能性がある。

ＳＩ４

C5Gr.に位置し、ＳＩ５に密接する。検出した当初は掘り込みを有する集石遺構と判断し、ＳＩ５と切り合い関係にあると考えていたが、土層断面で確認したところ東側に傾斜する自然堆積層に含まれた礫である可能性が高い。拳大の赤化礫が薄く広がり、人頭大の礫もわずかにみられるが、一部はⅤ・Ⅵ層に含まれる自然礫が露出している可能性がある。

Ⅱ類（第22・23図）

ＳＩ５

C5Gr.に位置する。掘り込み南半に内部礫が集中し、北半は散漫に広がる。礫検出範囲内から117～119が出土しており、縄文時代後期前半の遺構の可能性がある。

ＳＩ６

C5Gr.に位置する。やや深い掘り込みを有し、拳大の礫が密に入る。人頭大の平滑な礫を含む。

ＳＩ７

Ⅲ層中から掘り込まれる。南東側は一部削平を受けている。F4Gr.に位置し、周辺は炭化種実が集中して出土しており、埋土中にも含まれる。

ＳＩ８

E4Gr.に位置し、Ⅳb層上面で検出した。東側はトレンチ状の攪乱があり、削平を受けている。

ＳＩ９・ＳＩ10

E4Gr.に位置する。Ⅳb層上面で検出した。土層断面では明確な切り合いを確認できなかった。検出面では地山に含まれる人頭大の自然礫が複数露出する状態であった。ＳＩ９からは120・121が出土した。

ＳＩ11

E4Gr.のⅣb層上面で検出した。埋土中から122が出土しており縄文時代中期の遺構の可能性がある。

ＳＩ12

E3Gr.で検出した集石遺構である。Ⅳb層を掘り込み、埋土中に拳大よりやや小さめの赤化礫が密に入る。

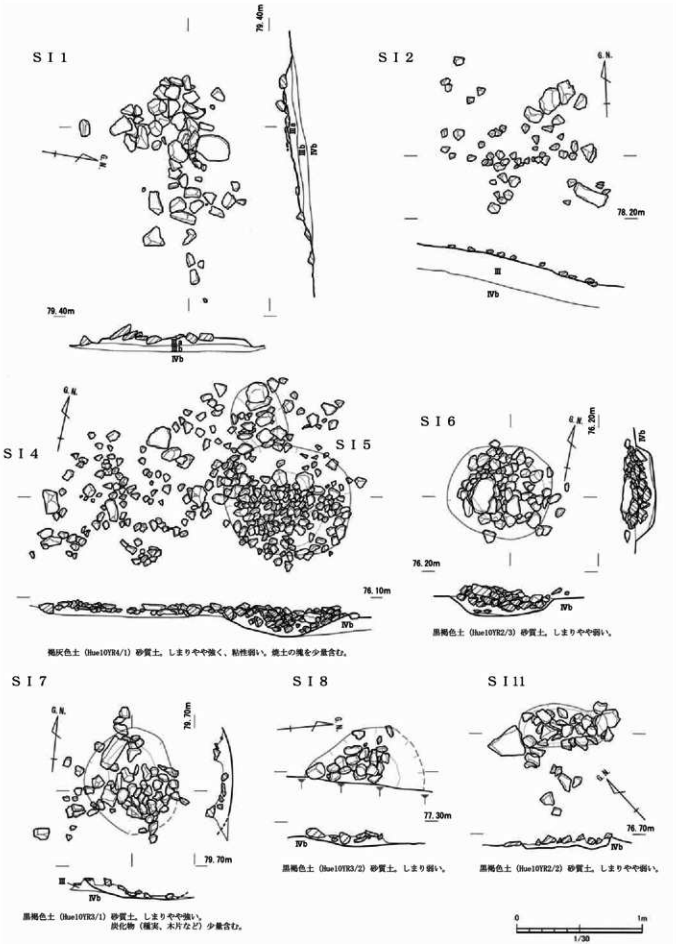
Ⅲ類（第23図）

ＳＩ３

D6Gr.に位置し、ＳＡ２・ＳＡ３の北側に隣接して検出した集石遺構である。Ⅳb層まで掘り込まれないため一部掘方を欠損する。上部は赤化した拳大の礫があり、下部に配石を有する。配石は扁平な礫で平滑面が上を向き、部分的に赤化が見られる。埋土に炭化物はほとんどみられない。

ＳＩ13

調査区北端のC3Gr.で検出した。Ⅳb層を掘り込み、やや平滑な拳大から人頭大の礫を密に含む。掘り込みに沿って配石がみられる。後世の攪乱により切られ、礫の一部が影響を受けている。



褐灰色土（Hue10YR4/1）砂質土。しまりやや強く、粘性弱い。焼土の塊を少量含む。

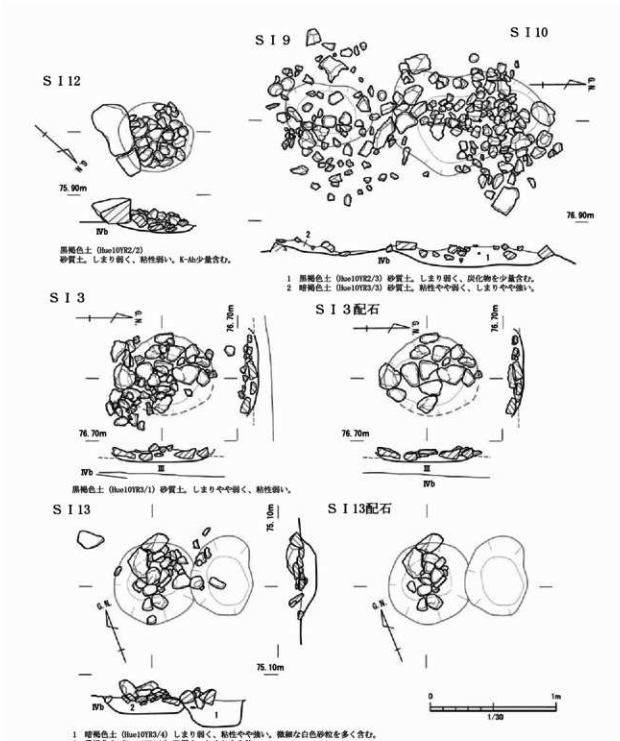
黒褐色土（Hue10YR2/3）砂質土。しまりやや弱い。

黒褐色土（Hue10YR3/1）砂質土。しまりやや強い。
炭化物（種実、木片など）少量含む。

黒褐色土（Hue10YR3/2）砂質土。しまり弱い。

黒褐色土（Hue10YR2/2）砂質土。しまりやや弱い。

第22図　縄文時代中・後期遺構実測図（4）　SI1・SI2・SI4～8・SI11

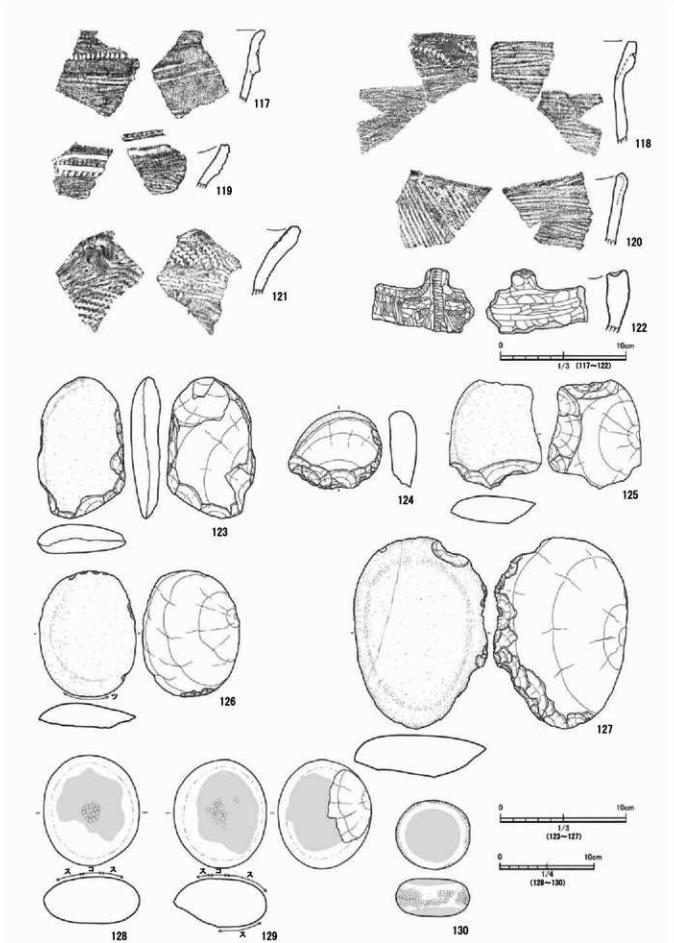


第23図　縄文時代中・後期遺構実測図（５）　ＳＩ３・ＳＩ９・10・ＳＩ12・ＳＩ13

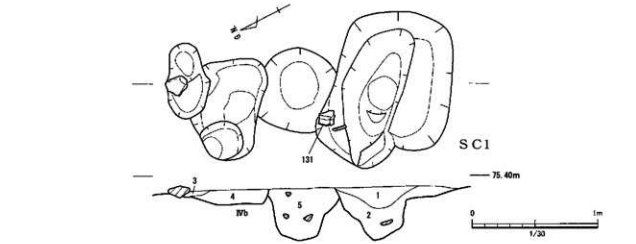
集石遺構出土遺物（第24図）

集石遺構はいずれも掘り込みが浅いため、明確に遺構に伴うかどうかの判断はできなかった。そこで、検出した内部礫の検出範囲内で出土した遺物を遺構の遺物として掲載した。

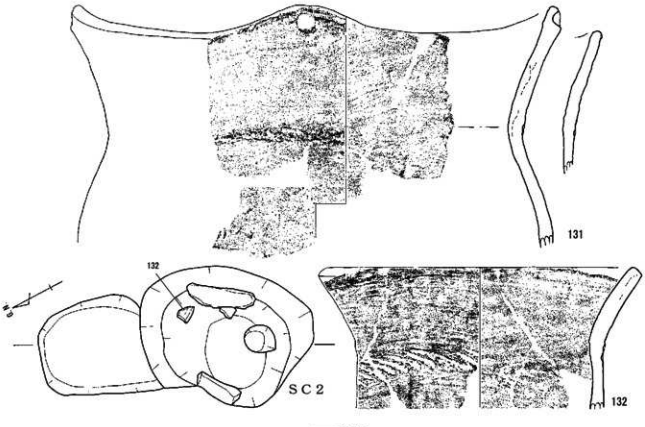
117～121は縄文時代後期の貝殻文を主体とする深鉢である。119は口縁部が肥厚し、この肥厚帯に刺突文・沈線文を施す。120の外面には貝殻条痕文が明瞭にみられ、沈線状を呈す。121は波状口縁で、外面頸部及び内面口唇部直下に貝殻腹縁による連続刺突文がみられる。全体的に色調は黒く、二次的な被熱を受けた可能性がある。122は、139と酷似した特徴を持つ土器の口縁部である。139と比較すると、やや黄色で焼成が不良である。123～130は砂岩ないし尾鈴１を石材とした礫石器である。この他に、尾鈴山酸性岩類製の剥片については21点（6.5kg）確認している。



第24図　縄文時代中・後期遺構出土遺物実測図（9）

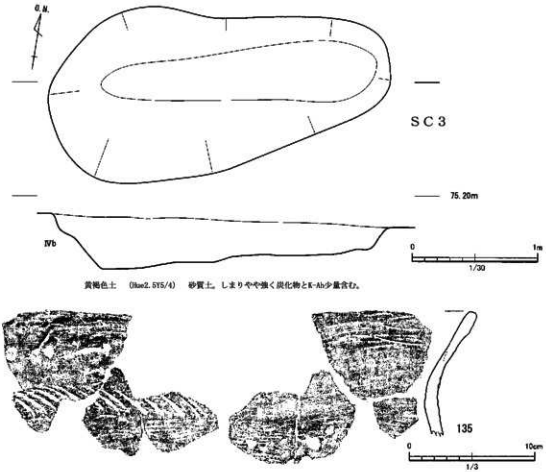


1　オリーブ褐色土　(Hue2.5Y4/3) 砂質土。しまり強く、炭化物少量含む。K-Ah含む。
2　黄褐色土　(Hue2.5Y5/4) 砂質土。しまりやや強い。炭化物ごく少量含む。
3　黒褐色土　(Hue10YR4/1) 砂質土。しまり弱い
4　黄灰色土　(Hue2.5YR5/4) 砂質土。しまり強い。
5　暗灰黄色土　(Hue2.5Y4/2) 砂質土。しまりやや強く、炭化物少量含む。K-Ah含む。



1　黒褐色土　(Hue10YR4/1)　砂質土。しまり弱く、K-Ah含む。
2　黄灰色土　(Hue2.5YR5/4)　砂質土。しまり強い。
3　黄褐色土　(Hue2.5Y5/4)　砂質土。しまりやや強い。炭化物やや多く含む。K-Ah少量含む。
4　オリーブ色土　(Hue2.5Y4/3)　砂質土。しまりやや強く。3層に比べやや黒色強い。K-Ah少量含む。
5　暗灰黄色土　(Hue2.5Y4/2)　砂質土。しまりやや強く、K-Ah多く含む。

第25図　縄文時代中・後期遺構及び出土遺物実測図（1）　ＳＣ１・ＳＣ２



第26図　縄文時代中・後期遺構及び出土遺物実測図（２）　ＳＣ３

土坑（第25・26図）

全て調査区北端に位置しⅣb層上面で検出した。これらの検出状況はＳＡ４同様の埋土を呈し、掘り込みが非常に不鮮明であった。また、埋土や出土した土器の特徴から、ＳＡ４に併行する時期の遺構である可能性がある。

ＳＣ１（第25図）

ＳＡ４に隣接して検出した。土層断面の状況から、複数のピットと切り合い関係にある。南側の遺物を伴う掘り込みがＳＣ１である。

131は波状口縁を呈す深鉢である。外面には波頂部の口縁直下に凹点文を施し、頸部には粗雑な貝殻腹縁刺突文が連続する。

ＳＣ２（第25図）

E2Gr.に位置する。検出状況は南北に長い瓢箪型を呈すが、土層断面状況から浅い掘り込みと切り合い関係にある。遺構は後世のピットにより切られる。ＳＣ２の埋土は３層に分けられ、掘底に近づくにつれて微細な炭化物片が混じりやや黒色が強くなる。

埋土中から出土した遺物は、打製石鏃が１点、深鉢片、チップなどである。132は平口縁の深鉢で、頸部の貝殻腹縁連続刺突文が特徴的である。頸部は屈曲気味で、口縁部の器壁が厚くなり、口唇部はナデにより丁寧に面取されている。133は頸部片である。132と同様の文様帯を頸部に持ち、直下に竹管状工具による連続刺突文を平行して施文する。色調及び胎土は酷似する。134はにぶい褐色を呈すチャート製の石鏃である。へ字状のやや浅い抉りを持つ。掘削時に破損したが、元は完形の資料である。この他、黒曜石５を石材とするチップなどが出土している。

ＳＣ３（第26図）

C3Gr.に位置し、ＳＡ４・ＳＣ１に隣接する。南北に延びる長楕円形である。遺物は一括して取り上げたため、平面図上では図化しなかった。135は埋土中から出土した遺物と、周辺の包含層から出土した遺物が接合したものである。平口縁の深鉢で、頸部がくびれ口縁はやや強く外反する。132と同様の文様帯を持ち、口縁部直下はわずかに肥厚する。

赤化の度合い:◎…全体　○…半敷程度　△…少量

遺構名称		分類	検出位置(Gr.)	検出層位	検出高(m)	確認面(m)		掘込み(m)			内部硬		配石		出土遺物	備考
略号	正式名称					長軸	短軸	長軸	短軸	深度	重量(kg)	赤化	重量(kg)	赤化		
SI1	1号集石遺構	Ⅰ	F5	Ⅲ	79.2	1.65	1.33	-	-	-	45.0	○	-	-	土器片	
SI2	2号集石遺構	Ⅰ	F5	Ⅲ	77.9	1.65	1.19	-	-	-	21.0	△	-	-		
SI3	3号集石遺構	Ⅲ	D6	Ⅲ	76.7	1.13	0.67	0.76	(0.64)	0.11	12.5	○	13.5	◎	土器片	底方の一部は欠損
SI4	4号集石遺構	Ⅰ	C5	Ⅳb	76.0	1.56	1.11	-	-	-	107.5	○	-	-	土器片・石器	
SI5	5号集石遺構	Ⅱ	C5	Ⅳb	76.0	1.58	0.98	1.03	0.85	0.21		◎	-	-	土器片・石器	焼土焼少量含む
SI6	6号集石遺構	Ⅱ	C5	Ⅳb	76.0	0.86	0.79	0.87	0.76	0.15	49.0	○	-	-	土器片	
SI7	7号集石遺構	Ⅱ	C5	Ⅳb	77.6	1.26	1.11	(0.81)	0.68	0.08	47.0	△	-	-	炭化種実	底方の一部は欠損
SI8	8号集石遺構	Ⅱ	F4	Ⅳb	77.3	0.77	0.44	(0.48)	(0.55)	0.09	9.5	△	-	-		搬出による削平受ける
SI9	9号集石遺構	Ⅱ	E4	Ⅳb	76.9	1.43	0.82	0.70	0.49	0.07	127.0	△	-	-	土器片・石器	
SI10	10号集石遺構	Ⅱ	E4	Ⅳb	76.9	1.38	1.21	1.24	0.77	0.16		△	-	-		
SI11	11号集石遺構	Ⅱ	E4	Ⅳb	76.7	1.02	0.85	0.64	0.34	0.08	18.0	△	-	-	土器片	
SI12	12号集石遺構	Ⅱ	E3	Ⅳb	75.7	0.69	0.51	0.60	0.54	0.09	8.5	△	-	-		
SI13	13号集石遺構	Ⅲ	C3	Ⅳb	75.0	0.88	0.71	0.68	0.64	0.21	16.0	○	11.0	○		

第４表　縄文時代中・後期集石遺構一覧表

No	番理	分類	部位	出土位置	出土層位	法量(cm)	色調 外面	色調 内面	施文・調整等 外面	施文・調整等 内面	胎土			熟料	備考
29	深鉢	Ⅳ	口	SA2	2層	-	黒褐 2.5Y3/1	浅黄 2.5Y7/4	丁寧なナデ・口唇部は連続的な刻目文様・沈線文(横一縦)・波文	横・斜方位のナデ	やや粗	1mm以下の赤色・灰色・透明・黒色粒を少量含む		-	縄文なし
30	深鉢	Ⅳ	口	SA2	3層	-	橙 7.5YR6/6	明灰黄 2.5Y5/2	ナデ→口唇部は斜位の短沈線文・磨消縄文	ケズリ気味の横方向のナデ	やや密	1mm以下の黒色粒を微量に含む 1mm以下の透明粒を少量含む		-	
31	深鉢	Ⅳ	口～胴	SA2	-	-	にぶい褐 7.5YR5/3	橙 7.5YR6/6	口縁部に磨消縄文・波状文・隆起ミガキ・格状取手の刺突痕と思われるものあり	口唇部に上平状の沈線文・縄文→横方向のミガキ	やや粗	2mm以下の赤色・黒色粒を少量含む 3mm以下の白色粒を含む 1mm以下の灰色粒を少量含む		赤:外・内	外:黒斑
32	深鉢	Ⅳ	胴	C5	-	-	にぶい褐 7.5YR5/3	橙 7.5YR6/6	磨消縄文(沈線文・縄文・横方向のナデ)	横方向のミガキ	やや粗	2mm以下の赤色・黒色粒を少量含む 3mm以下の白色粒を含む 1mm以下の灰色粒を少量含む		赤:外	外:黒斑 31と同一個体
33	深鉢	Ⅳ	胴	SA2	-	-	にぶい赤褐 5YR4/3	にぶい褐 7.5YR6/4	磨消縄文(沈線文・縄文・横方向のナデ)	粗い横方向のナデ	やや密	2mm以下の黒色粒を少量含む 1mm以下の白色・透明粒を多く含む 1mm以下の黒色粒を微量に含む		-	
34	深鉢	Ⅳ	口～胴	SA2	床	口:(23.5)	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/8	ナデ・縄文・条痕とナデ	横方向のナデ	やや密	2mm以下の赤色・白色粒を少量含む 1mm以下の黒色・白色粒を少量含む 0.5mm以下の透明粒を多く含む		-	外:スス付着 内:黒斑
35	深鉢	Ⅴ	口	SA2	-	-	明赤褐 5YR5/6	にぶい褐 7.5YR5/4	貝殻条痕文・貝殻腹縁による連続刺突文	貝殻条痕文→横方向のナデ	やや密	2mm以下の赤色粒を含む 1mm以下の黒色・白色粒を微量に含む 0.5mm以下の透明粒を多く含む		-	外:スス付着
36	深鉢	Ⅴb	口	SA2	3層	口:(30.0)	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	貝殻腹縁による連続刺突文・貝殻条痕文	貝殻条痕文	やや密	1mm以下の赤色粒を多く含む 1mm以下の黒色・白色粒を微量に含む 0.5mm以下の透明粒を多く含む		-	外:スス付着 内:黒斑
37	深鉢	Ⅴa	口	SA2	-	-	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	口唇部に沈線文、口唇部縁に貝殻腹縁刺突文、横方向のナデ	横方向のナデ・深いエ具痕・貝殻条痕文	やや密	1mm以下の白色・透明粒を少量含む		-	
38	深鉢	Ⅴa	口～胴	SA2	-	-	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR4/1	口唇部に沈線文、口唇部縁に連続刻目・沈線・ナデ、突帯上に刻目	横方向のナデ、指頭痕	やや粗	3mm以下の赤色粒を少量含む 1mm以下の白色・透明粒を少量含む		-	外:胴部にスス付着
39	深鉢	Ⅴb	口	SA2	-	-	にぶい黄橙 10YR7/4	灰黄褐 10YR5/2	半截竹管状工具による連続刺突文・横方向のナデ	横方向のナデ	やや粗	2mm以下の赤色粒を少量含む 1mm以下の白色・灰色粒を少量含む		-	
40	合付鉢	Ⅴc	口	SA2	1層	-	明赤褐 2.5YR5/8	にぶい黄橙 10YR6/4	ナデ・半截竹管による押引文・焼成前穿孔	ナデ	やや密	2.5mm以下の赤色粒を少量含む 1mm以下の白色・透明粒を微量に含む 2mm以下の黒色粒を微量に含む		赤:外	
41	合付鉢	Ⅴc	口	SA2	2層	-	明赤褐 2.5YR5/6	にぶい黄橙 10YR6/4	ナデ・半截竹管による押引文	横方向のナデ	やや密	2.5mm以下の赤色粒を少量含む 1mm以下の白色・透明粒を微量に含む 3mm以下の灰色粒を微量に含む		赤:外	40と同一個体か
42	深鉢	Ⅴc	口	SA2	-	-	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁に沈線文、横方向のナデ・2段の短い連続刺突文	横方向のナデ	やや密	1mm以下の赤色・灰色粒を少量含む 1mm以下の黒色・透明粒を微量に含む 1mm以下の白色粒を多量含む		-	
43	深鉢	Ⅴd	口	SA2	-	-	にぶい赤褐 5YR5/4	褐 7.5YR4/6	沈線文(肢がみられる)	斜位のナデ	密	1mm以下の赤色・白色・黒色粒を少量含む		-	外・内:スス付着
44	深鉢	Ⅴd	口	SA2	-	-	にぶい橙 7.5YR6/4	明赤褐 5YR5/6	工具による連続刺み・縦方向の刺突文、横・横方向の沈線文、丁寧なナデ	横方向のナデ	やや粗	2mm以下の赤色粒を多く含む 4mm以下の灰色粒を少量含む		-	
45	深鉢	Ⅺ	口～胴	SA2	2層	-	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	貝殻条痕文・ナデ	貝殻条痕文・ナデ	やや密	3mm以下の赤色粒を多く含む 1mm以下の白色・透明粒を多く含む 3mm以下の灰色粒を少量含む		-	外:黒斑、整条痕の重皮痕か
76	深鉢	Ⅴa	口	SA3	-	口:(32.0)	橙 7.5YR7/6	橙 5YR7/6	口唇部に沈線・半截竹管による押引文・貝殻条痕文	貝殻条痕文	やや密	2mm以下の赤色粒を多く含む 1mm以下の白色粒を多く含む		-	
77	深鉢	Ⅴa	口～胴	SA3	2層	口:(29.4)	明褐灰 7.5YR7/2	にぶい橙 7.5YR7/4	口唇部に刻み→沈線文(幅広で浅い)→左突帯上に連続刻目→貝殻条痕文	貝殻条痕文	やや密	1mm以下の赤色・白色・灰色粒をやや多く含む		-	外:スス付着

第５表　縄文時代中・後期遺構出土土器観察表（１）

No	器種	分類	部位	出土位置	出土層位	法量(cm)	色調 外面	色調 内面	施文・調整等 外面	施文・調整等 内面	胎土			胎土	釉料	備考
78	深鉢	Vc	口	SA3	–	–	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR5/2	ヘラ状工具による下からの連続刺突文・ナデ	貝殻条痕文→横方向のナデ	やや粗	2mm以下の赤色粒・雲母を少量含む		–	波状口縁
79	深鉢	Vb	口	SA3	–	–	にぶい橙 7.5YR6/4	灰黄褐 10YR4/2	横方向のナデ→斜方向の浅い連続短回線文→ナデ	横方向のナデ	やや粗	2mm以下の赤色粒・透明粒を少量含む		–	
80	深鉢	Vb	口	SA3	–	–	明黄褐 10YR7/6	明赤褐 5YR5/6	ナデ・二枚貝の連続押圧文	横方向のナデ	やや粗	3mm以下の赤色・灰色粒を多量含む 1mm以下の黒色・透明粒を少量含む 3mm以下の白色粒を多く含む		–	
81	深鉢	Va	口	SA3	–	–	橙 7.5YR7/6	にぶい黄 2.5Y6/3	ナデ→横方向のナデ→板状工具による縦方向のナデ	斜方向のナデ	やや密	1mm以下の赤色・灰色粒を微量に含む 3mm以下の白色粒を多く含む 0.5mm以下の透明粒を多く含む		–	外:スス付着
82	深鉢	Va	口	SA3	–	–	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	貝殻条痕文・口唇部に連続刺突文	貝殻条痕文→斜方向のナデ	やや密	1mm以下の黒色粒を少量含む 1mm以下の透明粒を多く含む		–	焼成後穿孔
83	深鉢	Vc	口	SA3	–	–	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部沈線文、貝殻条痕文・口唇部に半截竹管による刺突文・沈線文	横方向の貝殻条痕文	やや密	1mm以下の赤色・灰色粒を少量含む 1mm以下の白色粒を多く含む 0.5mm以下の透明粒を多く含む		–	内:黒斑
84	深鉢	Vc	口	SA3	–	–	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	横方向のナデ→竹管による連続刺突文・口唇部に沈線文	横方向のナデ	やや密	1mm以下の赤色・黒色粒を微量に含む 2mm以下の白色・灰色粒を少量含む 0.5mm以下の透明粒を少量含む		–	
85	深鉢	Vb	口	SA3	2層	–	にぶい橙 10YR7/4	橙 7.5YR7/6	貝殻腹縁連続刺突文・貝殻条痕文	貝殻条痕文→ナデ	やや密	1mm以下の白色粒を多く含む 0.5mm以下の透明粒を多く含む		–	外:スス付着・黒斑 波状口縁か
86	深鉢	Vb	口	SA3	–	–	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	横方向の貝殻条痕文・斜方位の貝殻腹縁による連続刺突文	横方向の貝殻条痕文→ナデ	やや密	1mm以下の赤色・黒色・透明粒を少量含む 1mm以下の白色粒を多く含む		–	85と同一個体の可能性あり
87	深鉢	Vb	口	SA3	–	–	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁端部に斜方向の貝殻腹縁連続刺目・貝殻条痕文	横方向のナデ→ナデ→貝殻条痕文	やや密	2mm以下の白色粒を多く含む 1mm以下の白色・灰色・透明粒を少量含む		–	内:炭化物付着
88	鉢	底	口	SA3	–	–	浅黄 2.5Y7/3	黄灰 2.5Y4/1	口唇部に浅い連続押圧文か→横方向・斜方位の粗いナデ	横方向のエ具ナデ→ナデ	やや密	2mm以下の白色粒を少量含む 1mm以下の黒色・白色・透明粒を少量含む		–	外:スス付着
89	深鉢	XI	口	SA3	–	–	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4	横方向の貝殻条痕文→ナデ	横方向・斜方位の貝殻条痕文・横方向のナデ	やや粗	1mm以下の黒色・透明粒を少量含む 1mm以下の白色粒を多量含む		–	外:接合痕
90	深鉢	XI	口	SA3	1層	–	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	横方向のナデ(表面風化)、部分的に刺突文	横方向のナデ→縦方向の貝殻条痕文	やや粗	1mm以下の黒色粒を微量に含む 1mm以下の白色・透明粒を多く含む		–	内:黒斑、炭化物付着
91	深鉢	XV	胴～底	SA3	–	底:(10.3)	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	斜方向の貝殻条痕文	貝殻条痕文	やや密	2mm以下の赤色・白色粒を少量含む 1mm以下の灰色粒を微量に含む		–	外:黒斑 横代痕
92	深鉢	底	口～胴～底	SA3	1層	口:(16.4) 底:8.15 器:(14.7)	にぶい橙 10YR6/4	にぶい橙 5YR6/4	横方向のナデ→斜方向の貝殻条痕文	貝殻条痕文	やや密	5mm以下の灰色粒を多く含む 1mm以下の白色粒を少量含む 2mm以下の黒色粒を微量に含む		–	断:スス付着 同一個体2点の合成
101	深鉢	Va	口	SA4	–	–	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	連続刺突文・横方向のナデ	横方向のナデ	やや粗	1mm以下の赤色粒を多く含む 1mm以下の黒色・灰色粒を微量に含む 3mm以下の白色・透明粒を少量含む		–	外:黒斑
102	深鉢	胴	口	SA4	–	–	橙 5YR6/6	明赤褐 5YR5/6	横方向の貝殻条痕文→直交する貝殻条痕文	横方向の貝殻条痕文	やや粗	2mm以下の赤色・黒色粒を少量含む 1mm以下の白色・灰色粒を少量含む 2mm以下の透明粒を多量に含む		–	外:スス付着
103	深鉢	胴	口～底	SA4	–	–	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	貝殻条痕文・頸部に幅広の凹線	貝殻条痕文→ナデ	やや密	2mm以下の白色粒を多く含む 1mm以下の黒色・灰色粒を微量に含む 2mm以下の白色・透明粒を多く含む		–	外・内:スス付着 波状口縁
104	深鉢	胴	頸	SA4	–	–	にぶい赤褐 2.5YR5/4	にぶい赤褐 2.5YR4/4	貝殻条痕→貝殻腹縁連続刺突文	貝殻条痕文	やや密	1mmの赤色・白色粒を少量含む 1mm以下の透明粒を多く含む		–	
105	深鉢	XI	口	SA4	–	–	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR5/4	ナデ	丁寧なナデ	やや密	4mm以下の赤色粒を多量含む 1mm以下の黒色・白色・灰色・透明粒を少量含む		–	波状口縁 外:スス付着
106	深鉢	XIV	口	SA4	–	–	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR6/6	丁寧なナデ(光沢あり)	沈線・丁寧なナデ	粗	4mm以下の白色粒・灰色粒を多く含む 1mm以下の透明粒を少量含む		–	外:スス付着 波状口縁
107	深鉢	XI	胴～底	SA4	–	底:(7.3)	橙 5YR6/6	明褐 7.5YR5/6	指頭痕・強い指ナデ	指頭痕・ナデ	やや密	2mm以下の白色粒を少量含む 2mm以下の白色粒を少量含む 1mm以下の灰色粒・透明粒を少量含む		–	外:スス付着 圧痕資料2
108	深鉢	XI	口	SA4	–	口:(30.4)	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR7/6	貝殻条痕文→粗いナデ	粗い横方向のナデ	やや密	10mm以下の赤色粒を多く含む 2mm以下の白色粒・灰色粒を含む 1mm以下の黒色粒を少量含む		–	外:スス付着
113	深鉢	XI	口	SA5	–	–	黒褐 7.5YR3/2	にぶい橙 7.5YR6/4	横方向の貝殻条痕文・口唇部は横方向のナデによる面取り	横方向の貝殻条痕文	やや密	1mm以下の赤色・透明粒を少量含む		–	外:スス付着
114	深鉢	胴	口	SA5	–	–	にぶい橙 7.5YR6/3	橙 7.5YR6/6	口唇部にC字状の刻目・縄文・C字形竹管刺目文	丁寧な横ナデ	やや密	1mm以下の白色・透明粒を少量含む 2mm以下の灰色粒を少量含む		–	外:スス付着
115	深鉢	XI	胴～頸	SA5	–	–	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	貝殻条痕文・ナデ	貝殻条痕文・ナデ	やや密	4mm以下の白色粒を多く含む 2mm以下の白色粒を少量含む 3mm以下の白色・透明粒を多く含む		–	外:スス付着 内:黒斑
117	深鉢	Va	口	SM-5	–	–	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	横方向のナデ・貝殻条痕文・連続刺突文	横方向のナデ	やや粗	3mm以下の赤色粒を多く含む 1mm以下の黒色・灰色・透明粒を微量に含む 3mm以下の白色粒を少量含む		–	
118	深鉢	Vb	口～胴	SM-5	–	–	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/3	部状沈線内に連続刺突文・ケズリ風味の横ナデ	横方向の貝殻条痕文	やや粗	1mm以下の赤色・黒色粒を少量含む 4mm以下の白色粒を多く含む 0.5mm以下の透明粒を多く含む		–	外:スス付着・黒斑 内:黒斑

第６表　縄文時代中・後期遺構出土土器観察表（２）

No	器種	分類	部位	出土位置	出土層位	法量(cm)	色調		施文・調整等		胎土		顔料	備考
							外面	内面	外面	内面				
119	深鉢	Ⅴe	口	SI4・5	-	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	口唇部は沈線内に連続刺突文・ナデ・沈線文・貝殻腹縁連続押圧文	横方向の粗いナデ	やや密	1mm以下の赤色・灰色・透明粒を少量含む 2mm以下の黒色粒を少量含む 1mm以下の白色粒を多量含む	−	外:スス付着 波状口縁
120	深鉢	Ⅺ	口	SI9-10	-	-	褐7.5YR4/6	赤褐 5YR4/6	斜方向の貝殻条痕文	横方向の貝殻条痕文	やや密	1mm以下の白色粒を微量に含む 1mm以下の透明粒を少量含む	−	波状口縁
121	深鉢	Ⅶ	口～頸	SI9・10	-	-	褐灰 10YR4/1	黒褐 2.5Y4/1	貝殻腹縁による連続刺突文・貝殻条痕文	貝殻腹縁による連続刺突文・貝殻条痕文	やや密	1mm以下の赤色・黒色・透明粒を少量含む 1mm以下の白色粒を多量含む	−	波状口縁 外:スス付着
122	深鉢	Ⅱ	口	SI11	-	-	橙7.5YR6/6	黄褐 2.5Y5/3	口縁端部押引文、突起上に円形凹点文と刻み、条線文、十字突帯にC字形連続刻み	横方向のナデ	やや粗	3mm以下の白色粒を多く含む 2mm以下の赤色・灰色粒を少量含む 2mm以下の黒色粒を微量に含む	−	
131	深鉢	Ⅶ	口～胴	SC1	-	口:(37.6)	明赤褐 5YR5/6	明黄褐 10YR6/6	貝殻条痕文・粗いナデ・指先による刺突文・頸部に貝殻腹縁連続刺突文	貝殻条痕文	やや密	5mm以下の赤色・黒色粒を多量含む 1mm以下の白色粒を多量含む 2mm以下の透明粒を含む	−	波状口縁
132	深鉢	Ⅶ	口～胴	SC2	-	口:(24.2)	橙5YR7/8	明赤褐 5YR5/8	横方向のナデ・貝殻腹縁による連続刺突文	貝殻条痕文・ナデ	やや密	3mm以下の赤色粒を少量含む 2mm以下の黒色・灰色粒を少量含む 2mm以下の白色・透明粒を多量に含む	−	外:スス付着 内:スス付着
133	深鉢	Ⅶ	頸	SC2	-	-	橙5YR6/8	明赤褐 2.5YR5/8	貝殻条痕文→貝殻腹縁・竹管状工具による連続刺突文	横方向のナデ・貝殻条痕文	やや密	1mm以下の赤色・透明粒を少量含む 1mmの白色・灰色粒を多く含む	−	
135	深鉢	Ⅶ	口	SC3	-	-	明赤褐 5YR5/6	赤褐 5YR4/6	貝殻条痕文・粗いナデ・貝殻腹縁連続刺突文・口唇部横方向のナデで面取り	貝殻条痕文・粗いナデ	やや粗	3mm以下の赤色粒を多く含む 1mm以下の黒色・白色・透明粒を少量含む	−	外:スス付着

第７表　縄文時代中・後期遺構出土土器観察表（３）

No.	器種	石材	取り上げ番号	出土位置	出土層位	座標(m)			法量(cm,g)				備考
						X	Y	Z	最大長	最大幅	最大厚	重量	
46	打製石鏃	流紋岩	-	SA2	-	-	-	-	(3.2)	(1.7)	0.4	(1.9)	
47	打製石鏃	黒曜石2	SA2-18 ユカ	SA2	床	-78311.074	51369.778	76.250	1.6	1.5	0.5	0.8	
48	打製石鏃	黒曜石2	SA2-3	SA2	3層	-78309.159	51370.781	76.168	(0.9)	1.2	0.2	(0.2)	
49	石錐	珪質頁岩	-	SA2	-	-	-	-	1.6	2.2	0.6	1.8	
50	礫器	砂岩	-	SA2	-	-	-	-	8.1	10.3	4.1	439.0	
51	礫器	尾鈴1	SA2-48	SA2	2層	-78312.803	51368.253	76.384	14.9	11.5	3.2	572.0	磨滅面あり
52	礫器	砂岩	SA2-24	SA2	1層	-78313.276	51371.786	76.252	15.4	9.7	2.9	522.0	刃部潰れあり
53	接合資料	砂岩	-	SA2	1層	-	-	-	15.4	9.7	3.0	604.0	52+剥片３点、磨滅面あり
54	打製石斧	砂岩	-	SA2	-	-	-	-	(7.5)	(5.4)	(1.7)	(84.8)	
55	打製石斧	砂岩	-	SA2	-	-	-	-	11.8	6.4	1.4	137.7	
56	打製石斧	砂岩	-	SA2	-	-	-	-	9.5	7.2	1.9	156.2	刃部潰れあり
57	剥片	砂岩	SA2	SA2	-	-	-	-	3.9	4.2	0.8	15.6	
58	剥片	砂岩	SA2-12	SA2	3層	-78309.488	51371.032	76.119	6.4	7.2	1.6	85.0	
59	剥片	砂岩	SA2-79	SA2	-	-78310.764	51370.211	76.359	7.6	5.9	1.3	58.7	
60	剥片	尾鈴1	SA2-52	SA2	1層	-78311.806	51367.360	76.471	10.8	7.6	3.2	156.5	
61	剥片	砂岩	SA2-13	SA2	3層	-78309.866	51371.468	76.128	9.0	7.1	2.0	155.6	
62	剥片	砂岩	SA2-40	SA2	1層	-78313.909	51370.362	76.503	6.3	6.5	1.4	58.7	刃部潰れあり
63	二次加工剥片	砂岩	SA2-92	SA2	-	-78304.915	51381.225	74.713	10.4	7.6	1.5	151.0	磨滅面あり
64	剥片	尾鈴1	-	SA2	-	-	-	-	10.0	8.0	2.8	178.4	
65	二次加工剥片	安山岩	SA2-1 ユカ	SA2	床	-78310.683	51368.841	76.565	8.9	8.4	1.5	87.9	
66	石核	珪質頁岩	SA2-12 ユカ	SA2	床	-78308.612	51370.268	75.840	3.2	9.7	6.9	321.0	
67	石錘	ホルン	-	SA2	-	-	-	-	5.1	5.2	10.5	48.0	
68	石錘	尾鈴1	SA2-39	SA2	1層	-78313.884	51370.710	76.369	6.8	8.6	2.3	208.7	
69	石錘	尾鈴2	SA2-93	SA2	-	-78304.107	51381.747	74.882	8.0	10.0	2.0	229.7	
70	敲石	尾鈴1	-	SA2	-	-	-	-	11.0	6.4	3.4	309.0	敲打痕・刃部潰れあり
71	接合資料	尾鈴1	-	SA2	-	-	-	-	11.1	12.2	6.5	678.0	72+73
72	剥片	尾鈴1	SA2-47	SA2	2層	-78312.677	51368.463	76.351	11.3	8.8	4.3	305.0	
73	剥片	尾鈴1	SA2-49	SA2	1層	-78312.985	51368.034	76.476	12.3	7.7	4.3	373.0	
74	台石	尾鈴1	SA2-20 ユカ	SA2	床	-78310.421	51370.510	75.960	42.0	32.2	8.2	19000.0	敲打痕あり
75	台石	尾鈴2	SA2-29	SA2	-	-78312.050	51370.958	76.209	26.1	21.9	4.2	3891.5	敲打痕・磨滅面あり
93	剥片	砂岩	SA3-151	SA3	-	-78303.990	51373.282	76.485	12.2	7.1	1.5	120.9	
94	礫器	尾鈴1	SA3-134	SA3	-	-78305.662	51372.195	76.374	11.5	11.1	3.3	542.0	
95	礫器	尾鈴1	SA3-274	SA3	1層	-78306.468	51372.956	76.353	9.0	14.4	7.1	858.0	敲打痕あり
96	礫器	砂岩	SA3-152	SA3	-	-78303.457	51373.083	76.368	9.1	9.8	3.4	390.5	
97	石錘	砂岩	SA3-135	SA3	-	-78305.534	51372.234	76.355	7.0	8.1	1.7	119.3	刃部潰れあり
98	石錘	砂岩	-	SA3	-	-	-	-	4.9	6.7	1.4	73.4	敲打痕あり
99	磨石	尾鈴2	SA3-1 ユカ	SA3	床	-78305.248	51376.022	76.060	(8.8)	(7.95)	4.7	(338.7)	磨滅面あり
100	台石	尾鈴2	-	SA3	2層	-	-	-	23.6	21.4	6.4	5029.0	磨滅面あり
109	打製石鏃	黒曜石2	SA4-23	SA4	-	-78269.864	51374.910	75.070	1.8	1.9	0.3	0.6	
110	打製石鏃	安山岩	SA4-13	SA4	-	-78271.734	51376.074	75.159	(1.6)	(1.2)	0.2	(0.3)	
111	剥片	尾鈴1	-	SA4	-	-	-	-	7.9	4.3	2.4	70.1	
112	台石	尾鈴1	SA4-2	SA4	-	-78271.751	51374.874	75.341	44.5	34.4	12.8	33000.0	敲打痕・磨滅面あり
116	磨石	尾鈴2	SA5-4	SA5	-	-78275.454	51355.318	77.478	(10.2)	(8.6)	4.8	(559.5)	磨滅面あり
123	スクレイパー	砂岩	SI4・5-10	SI4・5	-	-	-	-	11.0	6.8	2.3	213.9	
124	二次加工剥片	砂岩	SI4・5-16	SI4・5	-	-	-	-	6.1	7.4	2.1	130.7	
125	二次加工剥片	砂岩	SI7-18	SI7	-	-	-	-	8.6	7.3	2.3	166.5	
126	剥片	尾鈴1	-	SI9・10	-	-	-	-	10.0	7.6	2.1	182.1	刃部潰れあり
127	礫器	尾鈴1	SI13-1	SI13	-	-	-	-	15.0	10.5	3.3	564.0	
128	凹石	砂岩	SI9・10-11	SI9・10	-	-	-	-	11.7	10.2	4.9	880.6	敲打痕・磨滅面あり
129	凹石	尾鈴2	SI9・10-12	SI9・10	-	-	-	-	11.5	9.8	5.1	825.3	敲打痕・磨滅面あり
130	敲石	尾鈴1	-	SI9・10	-	-	-	-	7.3	7.85	4.0	353.0	縁周に敲打痕あり
134	打製石鏃	チャート	-	SC2	-	-	-	-	2.8	2.0	0.3	1.2	

第８表　縄文時代中・後期遺構出土石器計測表

（2） 包含層出土遺物

ここではⅠ～Ⅳa層中から出土した遺物を一括して報告する。前述のとおり、Ⅲ層は縄文時代前期末から中世までの遺物包含層であるが、器種により当該期以降の遺物であると判断できる石器については第７節および第８節で報告する。

遺物は、鉢、深鉢、浅鉢、皿、円盤状土製品などの土器、打製石鏃、石匙、打製石斧、スクレイパー、削器、石核、剥片、礫器、石錘、磨石、凹石、台石、砥石などの石器がある。土器の時期幅は、縄文時代中期中葉、後期については前半～後葉までと考えられる。なお、一部の土器は前期末に相当する。

前期末の土器（第27図147・150、第28図151～153）

当該期に相当する土器片がわずかに確認された。147は貝殻による調整が主体である。150・151はＴ字形の刻目突帯を持ち、150は内・外面に相交弧文が明瞭にみられ、外面下部に弧状の条線が２条みられる。152・153は外面に貝殻腹縁による弧状の連点があり同一個体の可能性が高い。

中期～後期の土器

以下、縄文時代中期～後期の土器を器種ごとに分類し、文様や口縁形態により細分した。

Ⅰ類土器（第27図136～138）

器面全体に粗い縄文を施す一群で、調査区北東側のC4～C5Gr.で出土した。136はキャリパー状の深鉢で、外面は縦位の縄文を主体として、頸部は貝殻殻頂部を連続して押圧する。口縁下部には２条の刻目突帯文が巡る。口唇部には押圧刻目文を施し一部には貼付突帯を持ち、緩やかな波状口縁を呈す。なお、この突帯部には条線状の刻みを施し、その他は縄文が口縁部内面までみられる。同一個体である胴部片には補修孔が２箇所みられる。137は136に比べ、細い縄文を施す。やや器壁が厚く、胎土は堅い。138は胴部に弧状の突帯を貼付、その突帯上に部分的な押圧刻みを施す。

Ⅱ類土器（第27図139～146・148～149）

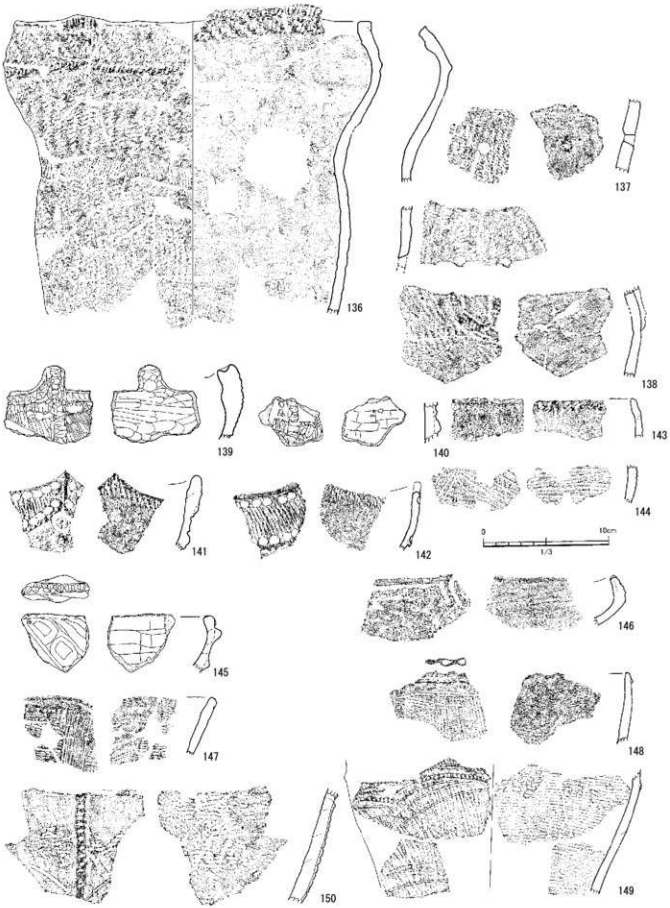
縄文、篦、貝殻などの工具を用いて縦条線を施す一群である。139・140は十字形突帯にＣ字型の刺突文が連続する。139は特徴的な盃状突起がみられ、十字型貼付突帯に爪型文が連続する。胎土は堅く、白色粒子や乳白色の片岩がよく混じる。140は粘土帯を十字に粗雑に貼り合わせている。141～142は口縁下の文様帯部分の器壁がわずかに肥厚し、２列の円形刺突文が連続し、その間に縦位の条線を施す。143は胎土に２㎜程度の雲母片を含む。145は口縁部が内湾するキャリパー状の口縁を呈し、外面に格子状の貼付突帯文を持つ。146は口縁部が強く内湾する器形で、縦の短沈線上方の口唇部に微隆起が確認できる。149は弧状の刻目突帯を持ち、下部に連弧文が数条みられる。また、内面には相交弧文がわずかに確認でき、煤が付着する。

Ⅲ類土器（第28図154）

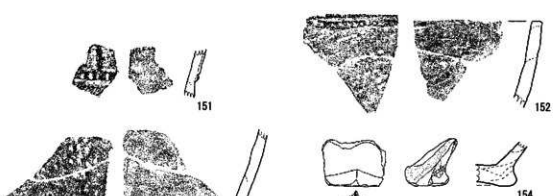
中期の底部資料である。154は底部を船首状につまみ出した多角形を呈し、中央は若干上げ底気味である。胎土中の鉱物粒が比較的大きく在地のものではない可能性が高い。

Ⅳ類土器（第29図、第30図170～175・181、第32図218）

沈線文や縄文を主体として施す土器で、口縁部から胴部にかけて直線的な沈線や曲線（渦文）と縄文による文様帯がみられる。成形のための調整はナデまたはミガキで、赤色顔料が塗布されているもの（155・156・159・163・168・181）もある。155は口唇部にＳ字状の沈線を持つ。157は横位の沈線を基本として、逆Ｃ字の短沈線がみられる。未図化であるが、同一個体の土器片の内面には貝殻腹縁刺突文が１箇所みられた。158は褐色を呈し、焼成前の穿孔がみられる。159は波状口縁で、貝殻腹縁刺突による疑似縄文を施す。160・161は頸部がくびれ、胴部が膨らむ形状を呈する。165～167は鉤手文や渦文がみられる。168は頸部に細い沈線を持つ。169は器壁が厚く、赤褐色を呈し、赤錆色の石粒が混じる胎土である。170～172は橋状把手を有し、弧状の沈線文や渦文を施す。なお、172は円盤状に周囲を打ち欠いている土製円盤の可能性がある。173は170と、174は171にそれぞれ胎土及び調整が酷似しており、同一個体の可能性がある。181は胴部が強く突出する。調整はミガキであり、縄文がわずかに確認できる。また、赤色顔料が顕著である。218は貝殻



第27図　縄文時代中・後期土器実測図（1）



第28図　縄文時代中・後期土器実測図（２）

擬似縄文を有する。

Ⅴ類土器

口縁を肥厚させ、この肥厚帯に文様を集約する一群で、以下の６類に細分した。

Ⅴa類（第30図176～180、182・183）は断面三角形状の隆帯が巡り、文様は口唇部との間に施される。176は貝殻腹縁を回転させ施文する。177は突帯上部に貝殻腹縁刺突文が連続し、口唇部は波頂部に貝殻腹縁による押圧があり、波頂部以外には沈線を施す。178～180は沈線文を主体とするものである。178は沈線を主体として、線端部を円形刺突により区切る。この沈線間に３箇所の貝殻腹縁刺突文が確認できる。

Ⅴb類（第30図184～186、第31図187～192）は肥厚帯に貝殻刺突文や条線などによる短沈線が連続する。口縁はやや外反するか直立気味となる。調整は貝殻条痕文もしくは粗いナデが多い。

Ⅴc類（第31図193～198）は工具により刺突文を連続して施文する。194～197は口縁部が沈線状にくぼむ。198は波状口縁で、波頂部付近にはC字の沈線を施す。なお、底部には網代痕が確認できる。

Ⅴd類（第32図199～204）は棒状工具を用いて太めの沈線を施すもので、短沈線・曲線を描く。200は沈線端部付近に１㎜程度の刺突がある。201は幅広の沈線による渦文とD字状連続刺突文との組み合わせである。202・203はナデで調整する。

Ⅴe類（第32図205・206、208～214）は２条の沈線を基本として文様を構成するものである。205は連続刺突による沈線で渦文を描く。208は同様の文様帯が口縁部直下にみられ、深く明瞭に施された長楕円形と一条の沈線で構成する。頸部は無文で、口縁部は連続刻文を施す。209は口唇部に深い沈線があり断面Ⅴ字状を呈する。210の波頂部は３重の半弧状沈線を施文し、沈線間にD字状の押圧刻文が連続する。211・212は沈線間に短い条線状刻目文が連続する。213は沈線と楕円形刺突文が連続する。214は波状口縁で波頂部に押圧痕がみられる。

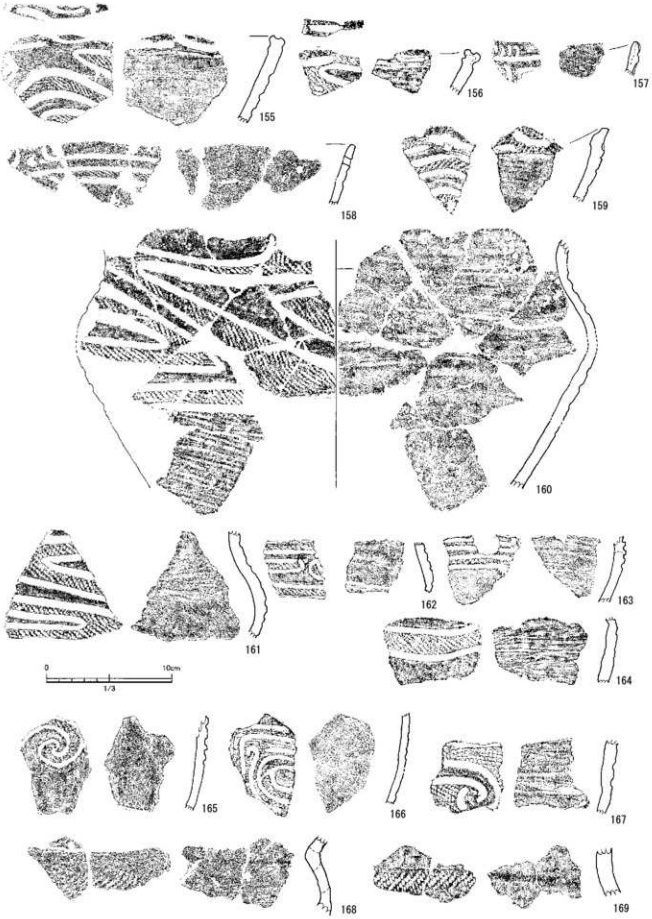
Ⅴf類（第32図215～217）はⅤ類土器の特徴を持つが、上記細分類に当てはまらないものを分類した。215は補修孔が確認できる。216は内面の口唇部直下に押圧刻みが連続する。217は波頂部に貝殻腹縁連続刺突文がみられる。施文後に口縁部を指ナデにより面取りしており、粘土の一部が外面に張り出す。内面・外面共に特徴的な明赤褐色を呈する。

Ⅵ類（第33図219～221）

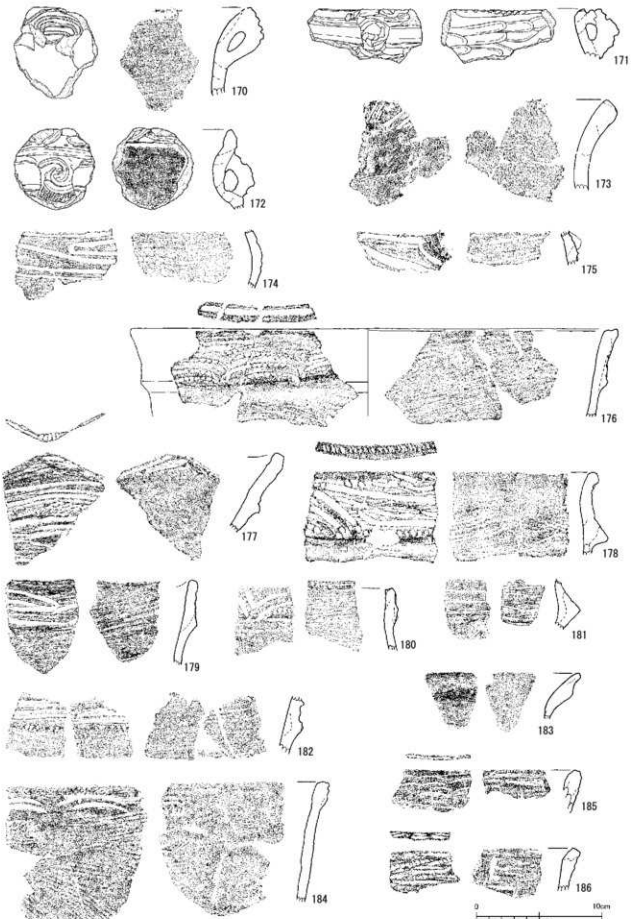
縦の貼付粘土帯を有するものを分類した。219は波状口縁の深鉢で、外面の波頂部両脇に断面D字状の貼付粘土帯を有する。口縁はⅤ類同様に肥厚し、沈線と連続刺突文を持つ。220はＳ字を縦に２つ重ねた形状のものと、頸部に貼付突帯が巡る。調整は丁寧なナデである。221は断面方形の貼付粘土帯を有する。

Ⅶ類土器（第34～35図・第36図240～244）

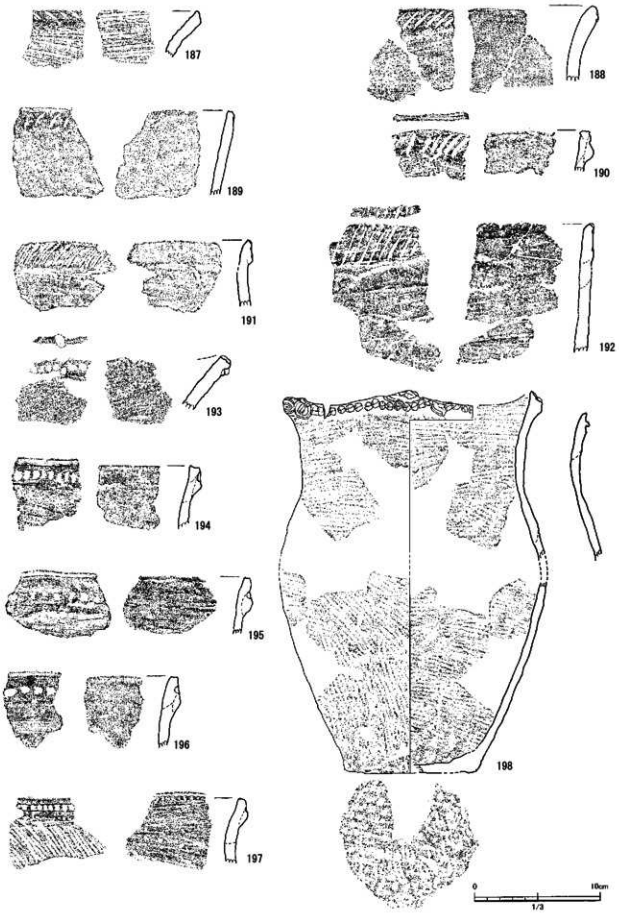
貝殻文を主体とし、頸部に貝殻腹縁による連続刺突文を有する土器群である。文様はやや押し引き状になるものも多い。口縁部は平口縁が主体であるが、波状口縁を呈するもの（229）もわずかに出土している。



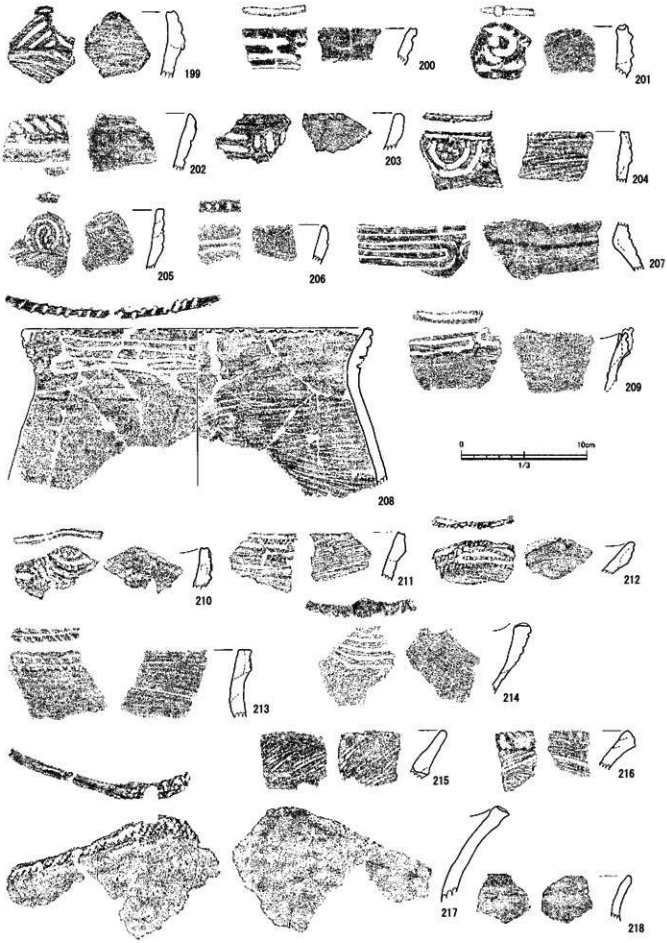
第29図　縄文時代中・後期土器実測図（3）



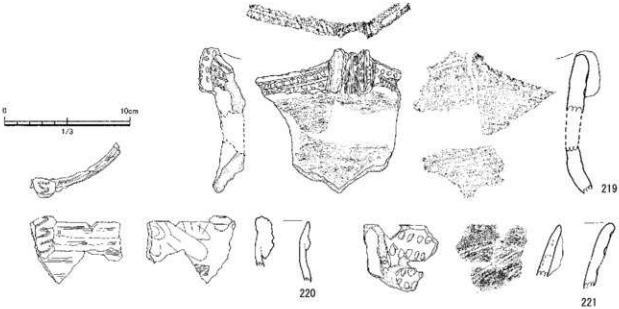
第30図　縄文時代中・後期土器実測図（4）



第31図　縄文時代中・後期土器実測図（5）



第32図　縄文時代中・後期土器実測図（6）



第33図　縄文時代中・後期土器実測図（７）

口縁部が緩やかに外反し、頸部がくびれ胴部がわずかに膨らむ形状であり、胎土の色調は赤褐色を呈し、5mm程度の赤錆色の砂粒を含むものが多い。225～227の口縁部はナデで面取りがなされ平滑である。229は内面の波頂部直下にも貝殻腹縁刺突文が連続する。C4Gr.及びその周辺、E3・F3Gr.から多く出土する傾向がある。

Ⅷ類土器（第36図245～250）

貝殻条痕文を主体として頸部に沈線を有するものである。C4Gr.のⅢb層での出土が多い。245～247は口縁直下から頸部の沈線にかけて、垂直かつ明瞭に貝殻条痕文を施す。247は頸部から胴部にかけて強く屈曲する。249は波状口縁で、波頂部内面に押圧刻みを持つ。250は口縁部が強く外反し、頸部に４条の沈線がある。

Ⅸ類土器（第37図、第38図264～270）

口唇部に文様帯が集中する一群を分類した。波状口縁を呈するものが多く、調整はナデまたはミガキである。251～257は押圧刻みが連続する。252・254は波頂部を中心として、放射状に工具を押圧する。なお、254は貝殻腹縁による刺突である。260は三叉状工具で条線を施し、棒状工具により押圧する。261～263は口唇部に縄文を施す。261は口縁部の複数箇所に吸盤状の貼付突起を持つ。263は胎土が白っぽく、赤褐色石粒が多く入る。264～270は波頂部に特徴的な施文を持つものである。267は補修孔がある。268は波頂部外面に３条の短沈線があり、口縁部には連続刺突文がみられる。270は波頂部が歪状を呈する。

Ⅹ類土器（第38図271～275）

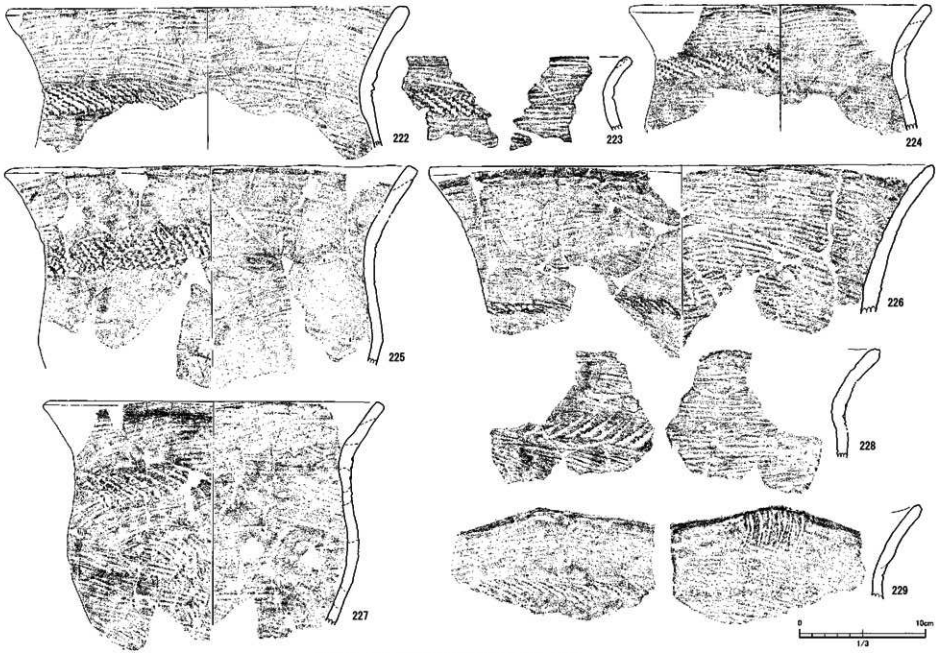
皿状の器形を呈するものを一括した。調整は貝殻条痕文やナデが主体である。272は内面に多量の炭化物が付着する。273は口唇部に押圧刻みがあり、円孔を有する。274～275は内面に貝殻腹縁連続刺突文を施す。274は口唇部内面に縦位の貼付粘土帯を付けナデ調整を施す。275は内面口縁部下に貝殻腹縁刺突文が連続する。また、直下に角度を変えて刺突文が連続する。

Ⅺ類土器（第39～42図）

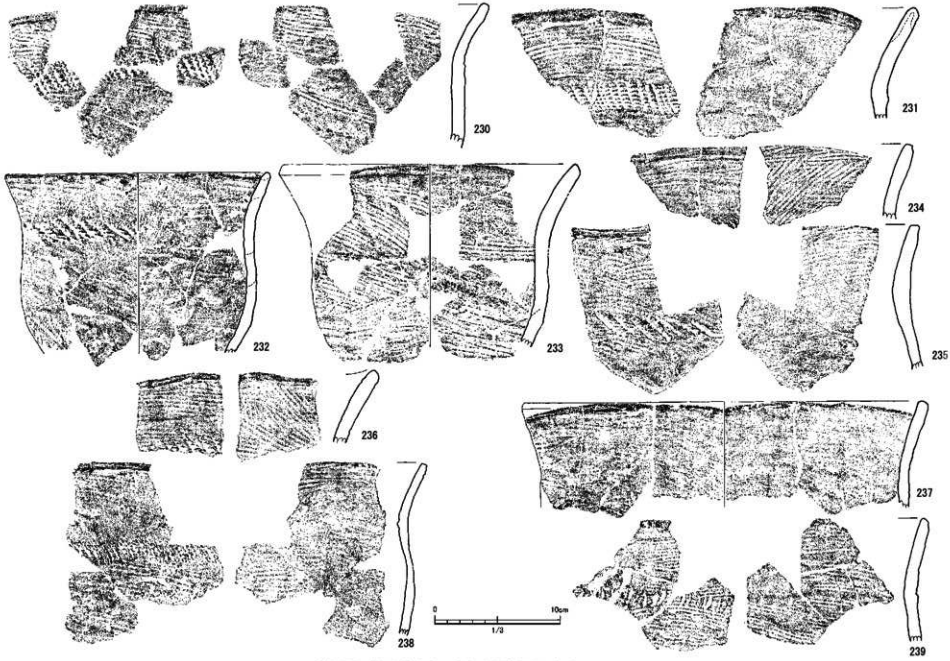
無文の深鉢を一括した。調整方法は貝殻条痕文を主体とするもの（276～301）と、ナデを主体とするもの（302～307）がある。口縁部の形状は平口縁で緩やかに外反するものが多い。色調は橙～赤褐色を呈する土器が多く見られ、特徴的な赤錆色の砂粒を含む。301は土器断面に煤がみられる。302・303は外面に指頭圧痕が明瞭に残る。306の口縁部はナデによる面取りでやや外傾気味の平坦な作りを為す。307はミニチュア土器と思われる小型の深鉢で、やや胎土が軟質である。

Ⅻ類土器（第43図）

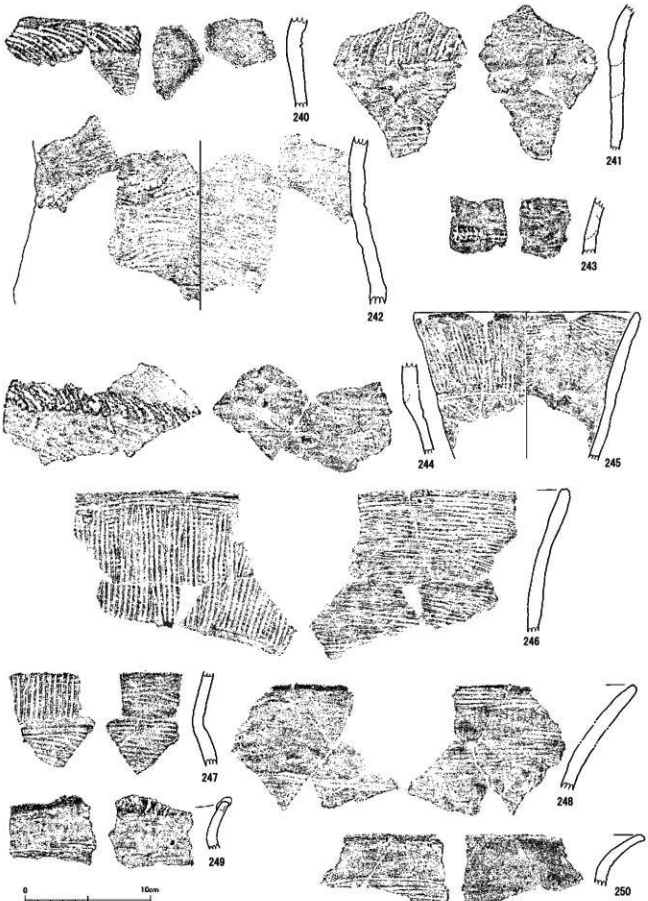
頸部から口縁部にかけて内湾する器形で、いわゆるキャリパー状の器形になる土器（308～310、313）も含めた。平口縁と波状口縁のものがみられる。調整は貝殻条痕文後にナデを施すものが多く、作りは丁寧であ



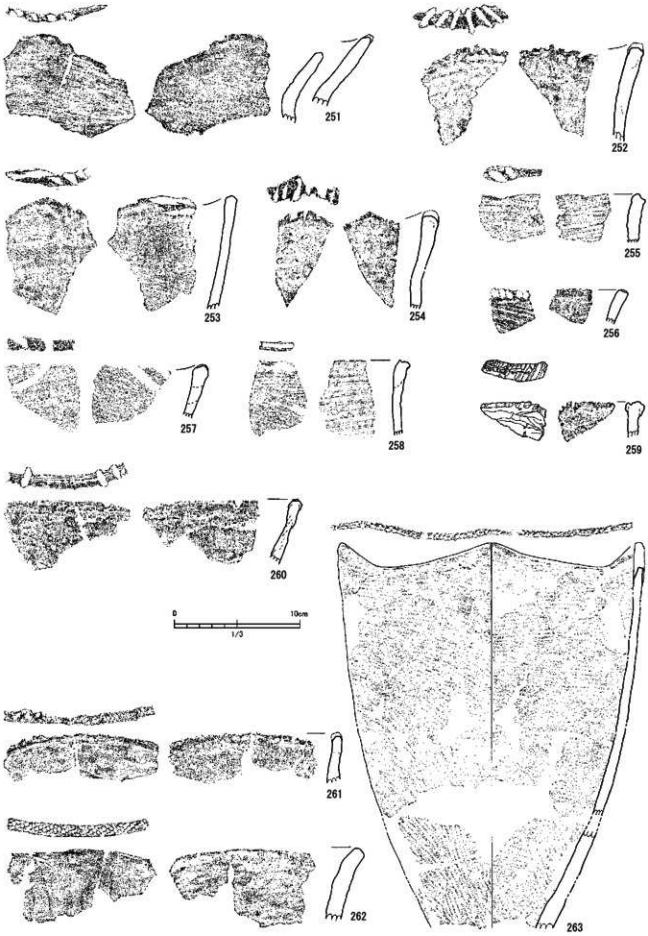
第34図　縄文時代中・後期土器実測図（8）



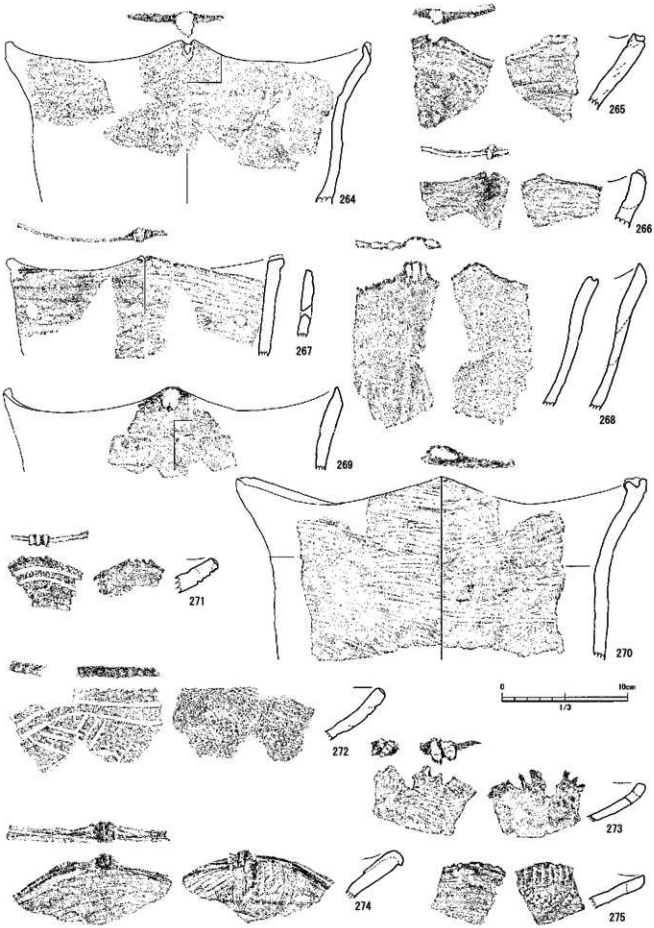
第35図　縄文時代中・後期土器実測図（9）



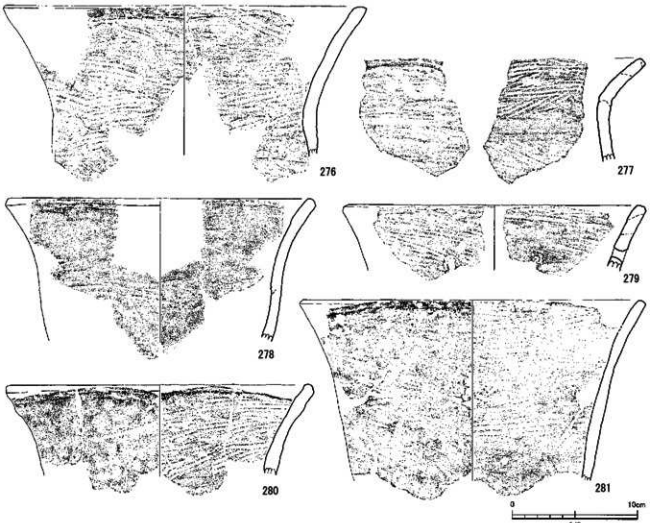
第36図　縄文時代中・後期土器実測図（10）



第37図　縄文時代中・後期土器実測図（11）



第38図　縄文時代中・後期土器実測図（12）



第39図　縄文時代中・後期土器実測図（13）

る。309・310は条線が明瞭で、沈線状を呈す。311・312は内面に煤が付着する。

XIII類土器（第32図207、第44図315～318）

後期後半の磨研土器を分類した。207は頸部資料で、X字状に反転する細沈線を施文する。調整は丁寧なナデで、ミガキがかる。315・316は幅広の凹線を描く。316・317は胎土中の角閃石が顕著である。

XIV類土器（第44図319～324）

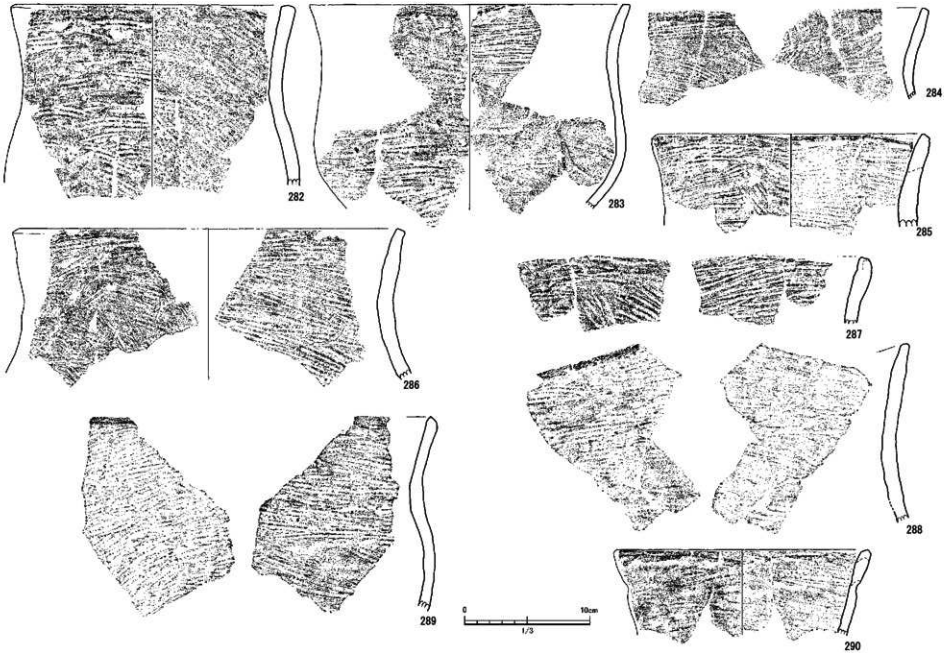
上記以外の後期に相当すると考えられる土器を一括した。319～321の胎土は堅くしまり赤褐色を呈し、いずれも沈線を施す。320・321は同様の文様を有し、同一個体の可能性が高い。322は外面の口縁部直下がくびれ、突帯状を呈し押圧刻み文が連続する。また、内面には棒状工具で平行沈線を描き、縦の短沈線や刺突文により区切る。323は４条の強い縦沈線を持つ。324は口縁部に豚蹄状の刺突列点文が集中する。

XV類土器（第44図325～330、第45図331～345）

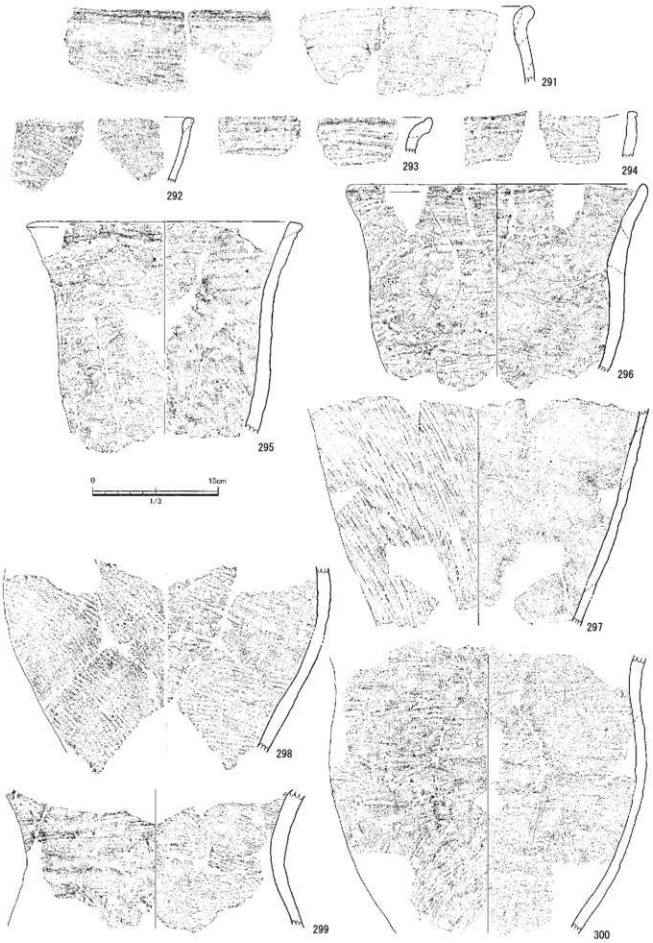
底部資料を一括した。網代痕（325～330）、木葉痕（331～333）、上げ底（334～339）、平底（340～344）、台付鉢の脚部（345）がある。331はもじり編みと木葉痕がみられ、葉脈が途切れることから、葉→もじり編組製品→土器の順で置かれたと思われる。なお、337・340・342は底部に白色物が付着する。345は２箇所の透かしが確認できる。

XVI類土器（第45図346～351）

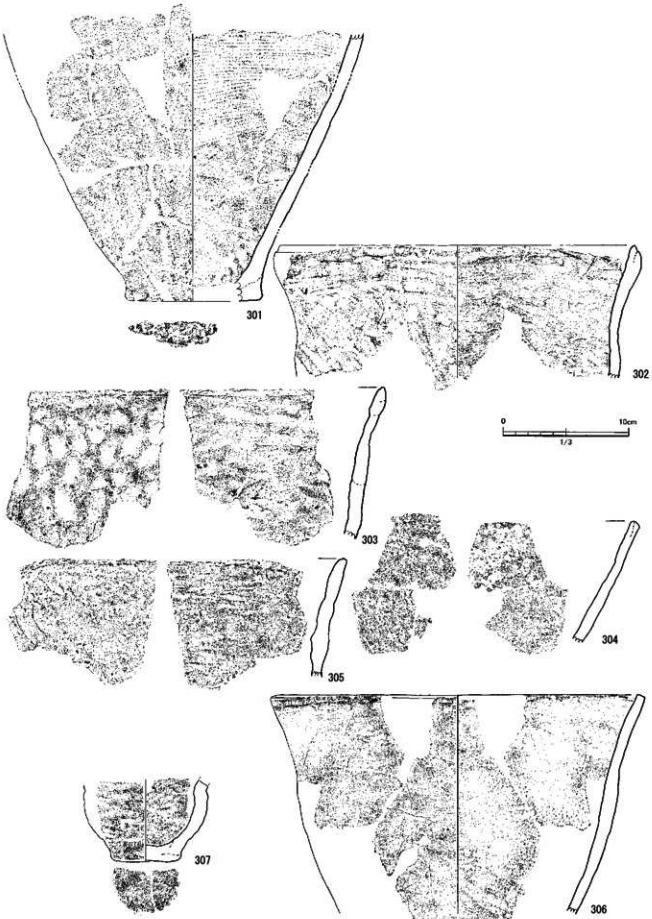
土器小片の縁辺を研磨により円盤状に加工したものを分類した。なお、打ち欠きにより加工したと思われるものについては７点出土しているが、図化していない。346は外面に貝殻腹縁刺突文が不規則に連続する。347は土器の口縁部片を加工したものである。



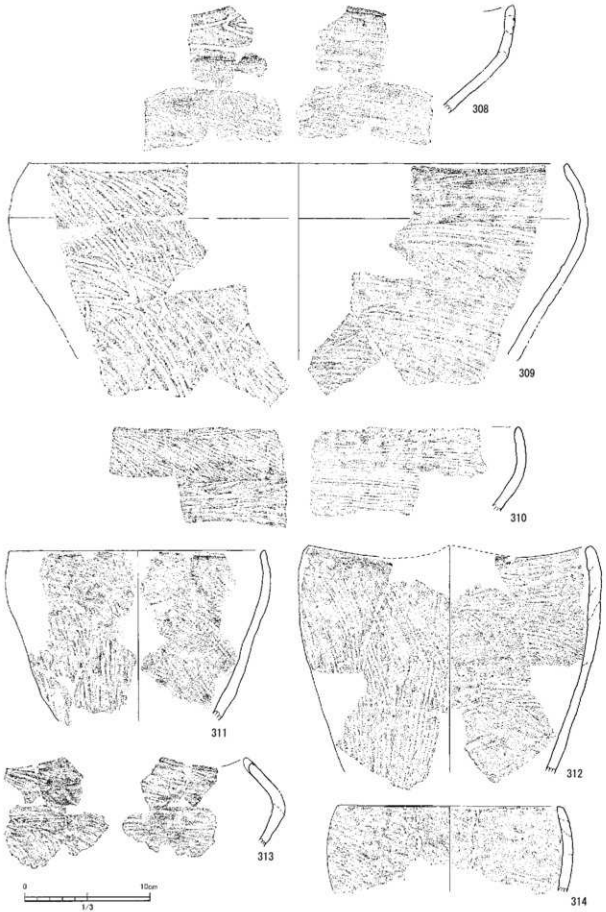
第40図　縄文時代中・後期土器実測図（14）



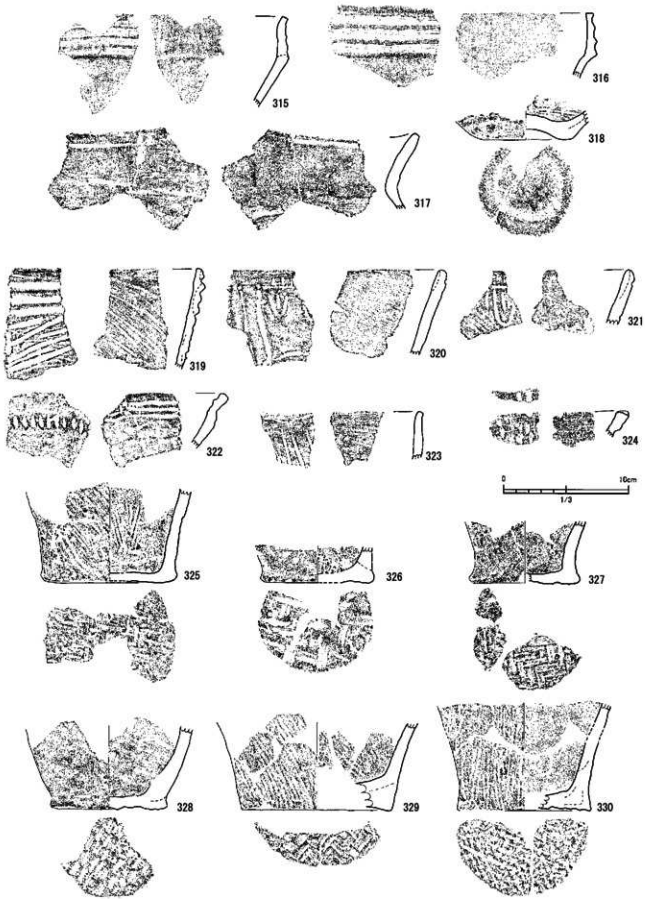
第41図　縄文時代中・後期土器実測図（15）



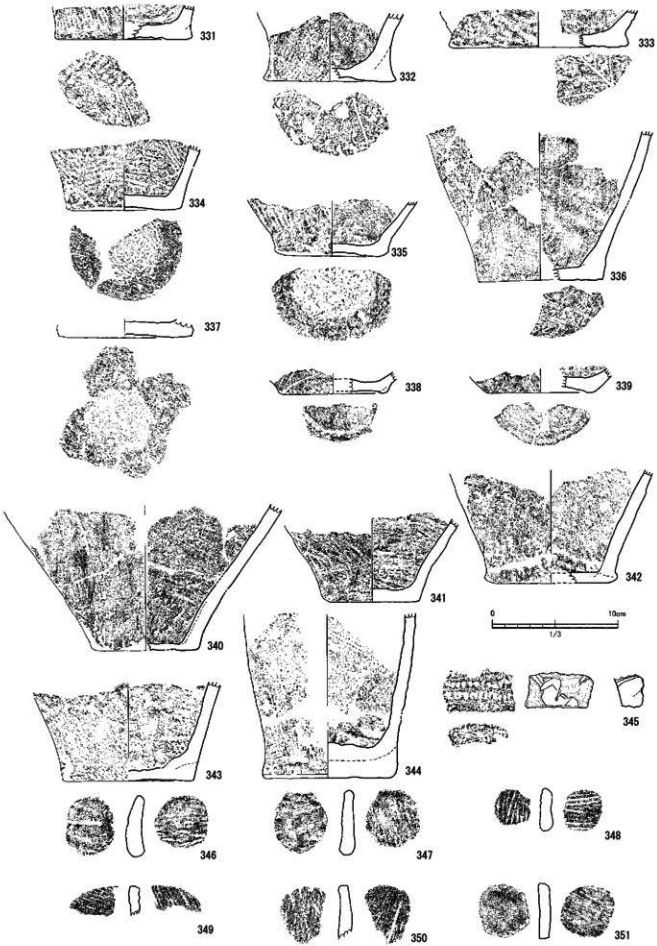
第42図　縄文時代中・後期土器実測図（16）



第43図　縄文時代中・後期土器実測図（17）



第44図　縄文時代中・後期土器実測図（18）



第45図　縄文時代中・後期土器実測図（19）